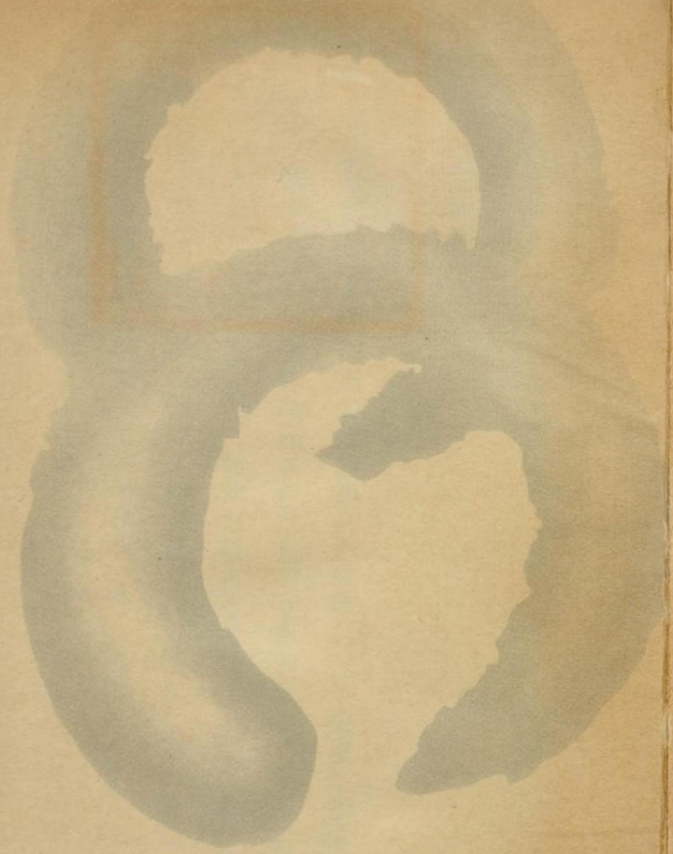
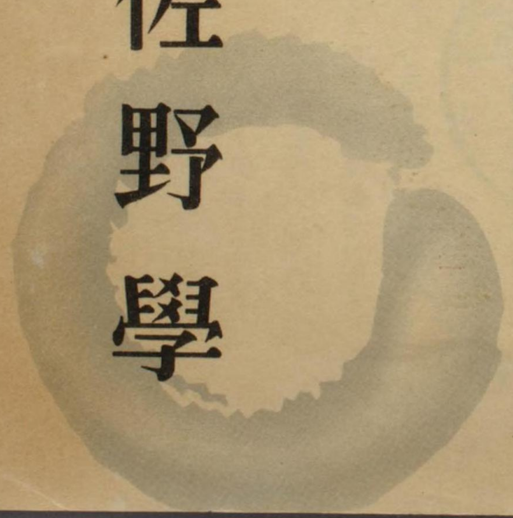
210.44
Sa615a
00278976

足利尊氏





佐野學

210.44 Sa815a

序

敗戦後に日本人の旧来の価値観念が崩壊した。歴史の世界でも価値の転倒が行われざるをえなかつた。歴史とは、過去に生産されたものであつても、今日の制度や観念のなかにまで生命を持続している現在的なものをいう。時代が新しくなれば、これまで価値あるものとされていた歴史事実が無価値となつたり、逆に軽蔑され呪詛されていたものが新しい価値をもつようになる。

逆賊ときめつけられてきた足利尊氏の再批判のごときは好テーマである。この本は、青山書院の依頼によつて着手したものだが、やつているうちに、尊氏の事業と個性とにすこぶる興味を感ずるにいたつた。かれが頼朝の事業を継承して、武家的社会構造を完成するために王朝政治の息の根をとめたのは、歴史の必然を現実化したもので、即ち進歩的なことであつた。かれがその欲するところでなかつたにしても、イタリーのルネッサンス期の僭主時代にも比すべき、下剋上的な実力時代をひらいたことも大きな功績である。人が自己の存在と価値とを実力によつてのみ証明しなければ

国立国会図書館
27.10.15
278976

ならない時代は、平静な平和時代よりもはるかに創造的である。

尊氏の天禀は、明敏で寛大で、芸術家風でもある。そのかれが、時代の必然から狡智、冷酷、背反、謀略を弄する権謀術数家となつてゆく過程には、悲劇的な興味があり、またこの間におけるかれの大首領的な風格にも興味がある。かれは第一級のマキアヴェリストであるが、西欧流の合理主義的なそれでなく、微笑をもつて死生の境を出入し、敵の悲惨な運命には涙を流すなどの日本的なニュアンスがある。私は、かれを日本的なマキアヴェリストと規定し、その典型として描こうと欲した。

ニイチェは非歴史的な力が新しい歴史を創造すると云つた。現在は正にかくあらねばならぬ時代である。終戦後に日本史に自由な解釈がたくさんでて来たことはよいことである。しかし、それはあくまでも自主的な精神に根ざしておらねばならぬ。主観的な公式をきめてかゝる左翼的な独断史学も困るが、それでもかれらには、今までひとの気のつかなかつた新しいポイントを衝いたところがある。一番困るのは、馴らされた家畜のように、急造のブルジョア民主々義の輪のなかを走りまわつて、放恣俗悪に自民族の歴史を傷つけている連中で、かれらには自主的なものがないから、歴史から積極的なものを発見しようとしないし、また、それはかれらにできることでない。私はそんな人たちから、尊氏が戯画化されることを恐れる。

歴史における客観的条件の研究は必要であるが、人間をその操り人形のようにしてしまう必然論史学にも私は反対である。歴史における人間の喜び、悲しみ、機智、勇気、理想への情熱、利慾、姦悪等の人性的なものは必然論史学では割り切れるようで本当は割り切れない。私は一つの革命時代であつた南北朝期に活躍する後醍醐天皇、大塔宮、正成、尊氏、直義、高師直等々の人間像と、その個性、その心理的過程に興味を感ずる。

この本を頼まれたのは去年の夏であつたが、あまり気が進まず、ようやく今年の春から参考太平記、増鏡、梅松論、神皇正統記、園太暦、群書類従や史籍集覧所収の雑資料その他を読んでいるうちに面白くなり、大体の腹案を得て二ヶ月ほどで書き下した。だからいくぶん粗雑で恐縮である。閑暇をえて克明に史料を漁ると面白いであろうが、そうしておればなにか文献学者的マンネリズムにおちいりそうな気がするし、そんなひまもないことだから、感じとつたところを早速まとめてみたのである。この本は専門の歴史家を相手にして書いたのでなく、一般の人々に読んでもらうために書いた。私は歴史の専門家でないが歴史の学問ではブルックハルトのような人を尊敬する。そんな人から叱られてみたいのだが、日本では残念にもちよつとブルックハルトは見当らないようである。明治以後の著作では、山路愛山の「足利尊氏」、田中義成の「南北朝時代史」に敬服した。両著とも立派な政治家的見識がある。現在の人では豊田武氏の「中世日本商業史の研究」の綿密な研

究態度に敬服した。本書挿入の写真版について撮影を許された東大史料編纂所員、村田正志氏の御好意に感謝する。なお尊氏死後の二世紀の情勢を通観して、殊に土一揆と天皇制を論じた別章をつけるつもりだつたが、一応尊氏の死までに筆をとどめた。

一九五二年夏八月

日本政治経済研究所にて
佐野学

足利尊氏目次

Ⅰ 革命時代
小規模革命の時代(2) 革命の課題(4) 尊氏と帝室(11) 尊氏の歴史的事業、その性格分析(16)
Ⅱ 二つの政府
鎌倉武家政権の由来(25) 頼朝(27) 悲劇の帝王後鳥羽上皇(28) 鎌倉政府の自己強化策(29) 鎌倉政府の京都弱化策(33) 北条氏の民本政治(36) 京都政府の内部的頽廃(38) 皇位継承の闘争(41)
Ⅲ 正中の変より元弘の変へ
革命的情勢(44) 正中の変(47) 後醍醐天皇(47) 青年革命貴族(50) 大検挙(51) 元弘の変(第二回の陰謀)(52) 吉田定房の密告(54) 資朝俊基の死(56) 天皇捕わる(57) 天皇配流(58) 大塔宮護良親王(60) 楠正成(62) 宮

方の分析(67)

IIII 尊氏の登場

関東軍弱し(76) 尊氏の出自(77) 尊氏叛す(79) 尊氏の六波羅占領(82) 新田義貞の鎌倉攻陥戦(84) 天皇の凱旋的帰還(86)

V 建武中興渦中の尊氏

龍頭蛇尾、建武中興の悲喜劇(89) 尊氏の二人の強敵(96)

VI 尊氏叛く

武家政権の古都鎌倉で(105) 天下を君と君との御争になさばや(112) 九州の尊氏、その東上(117) 正成の死(119)

VII 尊氏政府成る

南北朝の分裂(125) 尊氏の政治建設(131) 尊氏政府の機構(132) 建武式目(133) 半済法(140) 斜陽の王朝貴族(141)

VIII 南北戦争

本質(149) 後醍醐天皇の死(153) 秋の霧とともに(157) 尊氏の天龍寺建立(159)

尊氏の新強敵北畠親房(163) 尊氏と親房の戦略競争(164) 親房の哲学とその尊氏筆誅(167) 南北戦争の結末(172) 光厳法皇の遍歴(181) 帝室の衰(184)

IX 尊氏一家、血で血を洗う

実力時代(188) 執事高師直(190) 尊氏、師直を利用す(193) 師直の悪業(195) 直義と師直の衝突(197) 師直兄弟の死(200) 狡兎死して良狗烹らる(203) 帝室についての意見の相違(208) 派閥闘争の深刻化(209) 尊氏、直義を毒殺す(213) 子直冬と戦う(214) 尊氏の死(219) 混乱のなかの社会的進歩(222) 天皇制のゆくえ(226)

口絵写真

後醍醐天皇画像（大徳寺所蔵）とその解説
足利尊氏画像とその解説
夢窓国師頂相画像（天龍寺鹿王院所蔵）とその解説
足利高氏自筆軍勢催促状（島津家文書）とその解説
足利高氏自筆軍勢催促状（毛利家文書）とその解説
楠木正成自筆書状（金剛寺文書）とその解説
足利尊氏自筆願文とその解説
足利尊氏自筆書状（小笠原文書）とその解説
足利尊氏自画自賛地蔵尊像とその解説

足利尊氏

足利尊氏畫像

これは尊氏の軍陣御影と傳えられている。圖の上部に書かれた花押は尊氏の子二代將軍義詮のものである。從つて嚴密にいうと、これが果して尊氏の像か、或は義詮の像か定め難い。しかし室町家御内書案に、

等持院殿樣軍陣御影

一幅、青地錦御垂直、淺黄糸御鎧、廿四さしたる御矢、重籐御弓、大クワカタ打タル御甲、栗毛ナル御馬ニ食ル、フサカケラル、御リランチ也、御影ノ上ニホウケウ院殿樣御判居之、

とあるを參考するに、この畫像が尊氏であるとの傳承も由緒があるのであろう。等持院殿は尊氏、寶篋院殿は義詮である。

I、革命時代

小規模革命の時代

民族の長い歴史のなかには革命時代とよぶべきものが時々現れる。歴史は不断の前進、生成、発展であつて、民族が発展をやめないかぎり、古い要素と新しい要素との衝突は必然であるから、社会はいつでも革命要因をふくんでいるわけだが、矛盾が特に烈しくなり、不幸が人民の窮乏のなかに集中され、政治や経済の秩序が普通の手段でなく強力をもつて変革されねばならぬ時期が革命時代である。矛盾解決のためにいくつかの勢力が争い、その一つの勢力が勝利してやや完全か又は不完全にその解決をやり新しい社会的バランスが成立する。日本歴史は今日の段階にこぎつけるまでに幾たびもかような過程をふんできた。

革命時代には根本的革命の時代と小規模革命の時代の区別がある。前者は社会構造を根本的に変えてしまう。後者は現存の社会構造の原理まで変えることはないが、その原理の限界内で約束されたかぎりの進歩をできるだけ迅速に実現しようとする。氏族制度の停滞をうちやぶつて古代的隼権国家を創造した大化改新、怠惰な不労所得者たる王朝貴族の権力を打破し社会の指導権を武士の手

に移すことをはじめた頼朝の封建制度の創設、西欧資本主義の生産方法、観念、制度を導入して日本の近代化の第一歩をつくつた明治維新、これらは根本的革命だつたといえよう。小規模革命の時代も日本史上にいくつかある。

北条幕府の滅亡から建武中興を経て足利政権の樹立にいたる十四世紀の日本は一つの小規模革命の時代である。この時代は後醍醐天皇の北条打倒運動によつて幕をひらくが、しかし歴史の真の課題は王朝政治の復元でなく、それとは逆に、頼朝の事業を一そう推しすすめ、封建制度をもつと仕上げることにあつた。封建制度が完成するためには、権力が武士階級の手に完全に移つてしまうことが必要であつたばかりでなく、それより更にすすんで、全国的にいえば権力の遠心現象、地方的にいえばその求心作用、すなわち中央権力が弱化して、地方的小君主たる大名制の成立が時代の要請であつた。南北朝の争乱時代に日本はしだいにこの型の社会構造に入りこんで行く。

しかし小規模革命であつても、革命にほかならないから、革命時代特有の野性的な力の奔流、対立する両党派たる宮方武家方の極度の意志の緊張、両者がエネルギーを出しつくしてたたかう壮観、情熱、狡智、残忍、マキァヴェリ的詭計の横行、はげしい成長と沒落、首領のもつ絶大な意義、ロマンチシズムと現実主義とのたたかい、原始的な力の進行の内面から時々ひらめく高貴な理念や本源的な人間性、苦痛や悲惨のなかから刻々生れてくる客観的な進歩、こうしたものがこの時代

に生き生きとみられる。この動乱の渦巻きのなかで活動するもろもろの人間像――後醍醐天皇とその諸王子、親房、正成、義貞、尊氏、直義、師直、中央と地方の大小の武士群、僧侶、村落ゲリラ隊の指導者等々――はそれぞれの強い個性をもつており、人間を類型的ならしめる封建社会の常則をやぶつている。かれらは理知人よりも行動人である。革命は教科書のようには進行しない。教科書は論理であるが、革命は論理以上の力の作用である。革命の与うる問題は強烈であり、その答えも強烈でなければならず、それは理知よりも行動が解決する。この簡単な原則のなかに生きぬかねばならなかつた南北朝時代人は平和時代の人々よりもはるかに人間的生彩がある。

革命の課題

歴史は人間の主体的活動の舞台だ。人間意志力による刻々の業績創造がその根本内容である。客観的条件の分析だけに終始する、沒人間性的な、砂をかむような必然論史学は、人間意志の非常に緊張する革命時代の説明には特に適しない。とはいえ、時代の客観的意義や客観的条件を明かにすることはもちろん大切である。南北朝時代はいかなる革命課題をもつていたであろうか。

(1) **この時代の根本要請は王朝政治の復元でなくて封建制度の一そうの展開、確立であつたこと。**

十四世紀の二十年代より半世紀以上つづくこの革命時代の先頭を切つたものは後醍醐天皇を中心とする王朝政治回復の運動で、京都の青年貴族を中心とする非合法運動、その発覚、主動者の処刑、天皇の島流し、楠正成の奇戦々法、新田義貞の鎌倉攻撃、足利尊氏の京都六波羅攻陥等の過程を経ていわゆる建武中興がはじまる。いわゆる宮方もしくは南朝側には有為の人材がそろつている。後醍醐天皇は英明の名に値する。大塔宮護良親王は猛将で、宮方の熱情と勇気を象徴する人物である。思想家にして戦略家たる北畠親房のごとき人は北朝にない。楠正成は渺たる地方豪族の出身であるが、ゲリラ戦や奇襲戦法の天才であるばかりでなく、政治家的な見識や政策構想にもすぐれた能力がある。

しかるに武家方ではひとり尊氏だけが政治にも軍略にも卓越した大首領で、弟直義、子義詮、執事高師直、その他、猛将勇士が少くないが、武士の大部分は知性味の少い、肉体的暴力と利己主義の徒である。しかし歴史の客観的方向は王朝政治の息の根を止め、日本の封建政治を一そう発展せしめることにあつた。頼朝の守護地頭制の設置は荘園貴族たる京都公家を政治経済的に打撃したが、更にかれらを完全に政治権力の座から追わねばならない。又封建制の構造については、北条政府が網の目のように張りめぐらした地頭制のワクは、武士の層が社会的指導者として成熟するためには狭苦しいものとなつた。尊氏は頼朝への復帰を理想としたが、これはかれの主観にとどまる。

地頭制は大名制へ、即ち小規模の地主的領主から地域的小君主への発展が歴史のみちであつた。この大勢をみちびき出すことを担わされた政治家が尊氏である。かれは逆臣だといわれる。後醍醐天皇に叛逆した点からいえば逆臣である。しかし歴史の実利からいえば、徳川氏が鎖国をやつて日本国民を国際的環境からひきはなして畸形ならしめたような損害を与えたものではない。尊氏自身の意志でなくとも、後の自由奔放な戦国時代をみちびき出し、日本歴史における近世を用意したのがかれである。

(2) 生産力の進歩を解放する要請

革命のような活力的現象は経済の衰弱し下向する社会におこることでない。上向する生産力を歯止する障壁をのりこえるために革命がおこるのである。もつとも革命は政治、経済、イデオロギーの三つの力の複合からおこるのであるから、生産力だけが唯一の動力だという説を私は敬遠する。十四世紀の日本では、城下町はまだおこらず、農村が社会の細胞であつたから、その動向が全社会の方向を決定する。鎌倉時代には農業生産力の発達がいちじるしく、これまで生産過程と流通過程は有機的にむすびついていなかつたのに、今や貨幣流通や純粋の商業交換が生産過程とむすびつき、単純商品生産さえ起りつつある。鎌倉時代には、前代からの連続的発展でもあるが、溜池、河

川灌漑、用水管理のような水利工作、開墾による耕地拡張、二毛作、耕作物の種類の増加、農村居住の鍛冶手工業者による農具の発達、役畜、肥料、米作方法の改善などによつて生産力が進歩した。それは農村の構造や階級編成に影響をおよぼす。すなわち第一には自治的な郷村組織が発達し、第二には農民が農奴的な荘民の地位から解放されて剰余生産物を蓄積してそれをその自主性獲得の手段とすることができるようになる。荘園的村落構造や地頭支配では経済のより以上の発展が歯止めせられる。これらの事情から現存の所有関係や支配関係——マルクスのいわゆる生産関係——の変革が要求されるようになる。

(3) 眞の課題は民衆の解放にあつたこと

直接に革命の指導権を争う勢力は尊氏を首領とする武家方と後醍醐天皇を中心とする宮方であつたが、この両党派の下積みになつたかにみえる民衆は、むしろ根本的な革命要因であつた。この時代に生産力の発展や荘園秩序の崩壊に乗じて直接生産者たる農民大衆のイニシアチーヴがわきあがつた。農民は公田や荘園における奴隷から脱して自主性をもつてくる。この時代の文献に出てくる悪党というのは悪人とか犯罪者の意味でなく、貢租の納入を拒絶又は妨害したり、領主の使者や代表者を農村から放逐したりする農村の指導者要素のことで、下級武士や富農の層から成り、かれら

自らも農業生産を営み、農民の生活と直接にむすびついている。村民自身も事あれば鐘をついて集会し、村掟をつくり、村に濠をめぐらし、郷土防衛的なゲリラ活動をする。太平記に出てくる足軽とか野伏とかいうのは応仁乱後に現れる歩兵とか浮浪的暴民のことでなく、生産にいそしむ農民の自主的な活動形態である。それは室町時代の土一揆の先駆である。かれらの本然の要求は搾取者の廃絶であつたろう。尊氏を首領とする武士群は北条幕府や王朝政治にたいしては革命的意味をもつた層であつたが、直接に農民の搾取に依存するかれらは、農民大衆の革命的昂揚に向つては戦慄した。歴史上の多くの革命は、一時的であつてもなにらかの形で民衆の苦痛を柔げる改革をするものであるが、尊氏も、その後継者も、諸国大名も、それをしなかつた。徳川時代を終るまでの長い封建時代を通じて武士は農民にたいしては搾取者として保守的にふるまつた。南北朝時代の初期において農民大衆と結びついたのはむしろ宮方のほうである。尊氏を首領とする武家方は、下からの真の革命力たる農民大衆の要求とむすびつくことなく、むしろそれになにらの同情をもたず、対立し、抑圧を加えたところの搾取者である。武家方にはこれぞという社会的理想やロマンチシズムはない。かれらの大部分は怖るべき我慾の持主で、餓虎のごとく土地の一片をも争う。かれらは農民を搾取せずに生きてゆかれない。直接生産者が搾取者を廃絶して自由になつてゆくことは、上からの恩恵で与えられるものでなく、かれら自身の力を原動力とせねばならない。この問題は今日にいたるまでまだ解決されていない。この現代にまでつらなる問題の発端は南北朝時代にある。

(4) 個性と実力の時代の展開を用意すること

尊氏の主観的理想は、まとまりのよい、静態的な封建制社会をつくつて、頼朝のようにその主人となることにあつたであろう。しかし時代はもはやそんな悠長な注文を許さない。南北朝時代の社会環壊は、悪辣な我慾、神聖な伝統の嘲笑、惨酷な自己中心主義、打算、陰謀、目的のために手段をえらばず、人はつねに危険の中に住むゆえに或る程度不逞漢にならなければ生きてゆかれないというような空気をしだいにかもし出している。しかしそれは同時に形式的な固定化した身分制を打破し、人は生きるために才幹を磨かざるをえず、大胆、機智、計画、勇気など、個人は実力によつてのみ自己の価値や存在を証明せねばならぬという、形式権威の否定、個性伸張の時代をつくりだすものでもあつた。尊氏自身その善良聰明で寛宏な天性にもかかわらず一個の残酷なる権謀術数家として生活せざるをえなかつた。足利政権がすこぶる不安定で、その盛期の義満時代といへども足利氏の実力は大大名といえるくらいのもので、上杉、細川、赤松、大内、山名その他、各地方に独立政権的な大名領地制が成立し、久しからずして応仁の大乱となり、更に群雄割拠の戦国となつてゆき、主君殺しさえ公然行われ、いわゆる下剋上時代を現出するのは、厳重な身分制で縛られた中

世から個性の伸張を脊骨とする近代への過渡として重大な歴史的意味がある。歴史上では乱世になるとしばしば個性が磨かれ、その競争で社会が活気を帯びることがある。中国史の先秦時代の如きもそうであつたが、その時代限りに終つた。足利時代にはじまる下剋上は近代的な個性伸張とつながりがあることにおいて重大な価値をもつ。イタリーのルネッサンス時代の僭主政治が近代的自覚とつながりがあることと性格的にひとしい。下剋上の端をひらいたの尊氏にほかならない。歴史哲学的にいえば歴史の基本内容は自由の増加であるが、その自由は個性の伸張なしには得られないし、そして個性の伸張はしばしば卑しい功利主義を媒介とする。これは皮肉な歴史の摂理である。足利政権の主人たちは宮廷をまねて繁文褥礼的な礼儀作法を作つたりしたが、現実はそんな滑稽なものを蹴とばしてしまう。尊氏の真の意味の一つは、その主観的意志に反して、我慾競争の時代を開いて個性伸張をさまたげる固定化した旧伝統の重荷をとりのぞいたことにある。この意味で尊氏時代は近代とほのかなつながりをもつている。

下剋上とは、下級者が上位者を侵しそれを顚覆し簒奪者となるという意味の言葉である。尊氏じしんがその模範を示し、その為に足利家じしんがその犠牲者を数々だしており、大名の家々にこの風の行われなかつたものはほとんどない。しかし下剋上とは単なる秩序の紊乱を意味しない。個人の価値はその実力によつてのみ証明せられるべきであるという正しい規範的意味をもふくんでいるのだ。更にこの言葉にはもつと重大な意味がある。真の下からの力、すなわち直接生産者大衆の自主性が高まつて搾取者の支配に挑み、後者を恐怖させ動揺させたことがそれである。室町中期以後に頻発する土民一揆、徳政一揆などはこの真の意味の下剋上の表現形態である。この意味の下剋上が成功することはこの時代ではまだ不可能であつた。これは現代にまでつながる問題なのだが、かような問題をふくむ時代のはじまつた時点として尊氏時代が再評価されうる。

尊氏と帝室

尊氏において象徴せられる大きな歴史的課題は、日本の政治と帝室との関係の問題である。帝室を一つの現実的な政治勢力としてみれば、古代では物部其他の大氏族に動かされ、王朝時代では藤原氏に動かされ、武家時代では承久の乱や建武中興の失敗ののちには実際政治からまつたく遊離し、近く大正昭和には軍閥によつて動かされた。天智天皇や後醍醐天皇や明治天皇のような英邁な君主はそうざらに出るものでなく、又これらの諸天皇といえども現実の政治勢力とみれば、他から動かされずに他をうごかすところの自己みずからの力というほどの意義をもたなかつた。

しかし帝室はなにか民族宗教的なふしぎな理念力である。凡そ現実の政治勢力は物質的基礎、武力、理論力の三条件の揃うことによつて最強となるのだが、理念力だけの強さであるならば帝室に

及ぶものはない。現実の政治家はそれを無視することができなかつたし、今もなおできない。功利主義者、現実主義者の群れであつた戦国大名も天下統一の名分をとるために争うて当時窮乏のどん底にあつた帝室に近ずこうとした。外国の戦勝将軍マッカーサーも日本国民を籠絡するために天皇制を破壊せずしてそれを利用した。天皇個人の賢愚、有恥無恥、敏感鈍感、責任心の有無など問うところでない。民主主義の原理から割り切れないものが多々ある。しかも現実政治にかいて決して無視するをゆるされないふしぎな力である。理念力も政治において一つの有力な作用をする。近代的な新しい理念――アメリカ輸入の民主主義からソ連輸入の共産主義にいたるまで――は、千年以上の伝統をもつた帝室の理念ほどの堅固さがない。故に帝室の理念力が歴史の必然の方向と逆行する場合には少からざる国民的不利益が生ずる。反対に両者が適合する場合には歴史の進行がそれだけスムースになる。この理念力は長い歴史生活の伝統や社会生活上の家族主義などに根源するのであろうが、カトリック教徒のローマ法王におけるよりはなお一層強靭性を日本においてもつている。尊氏の場合も現実歴史と帝室理念力の衝突の一つのテスト・ケースだつたのであり、その正面に立たされた尊氏は悲劇的な一人物だつたともいえる。

北條氏は承久の乱ののちに帝室にたいして特に厳しい干渉、監視、分裂政策をとつた。これは王朝政治を骨抜きにして武士の階級政権を確立するための頼朝以来の現実政治的必要からであつた。

しかし王朝政治と帝室とは深くむすびついているが、別々のものである面もある。国民は王朝政治を嫌悪しているが、帝室にたいしてはやはり一種の国民的信仰がある。だから北條氏も帝室そのものを消滅させる意志をもたなかつたし、又できることでもなかつた。関東の濃厚な武家政権的空気のなかに育つた尊氏は特別に帝室にたいする愛着をもたないが、怜悧なかれは帝室との衝突が必至であることを覚悟しながらも、国民の間における帝室の理念力を評価することにおいては人後におちない。後醍醐天皇は尊氏を優遇しすぎるほどに優遇した。かれは個人的感情としては充分それに感激している。とはいえ王朝政治を骨抜きにすることはかれの歴史的使命である。それ故にかれは慎重な態度で帝室問題にのぞまねばならぬ。

尊氏は建武二年十二月、鎌倉で叛旗をひるがえす際に弟直義に三河国矢作川をこえて西に向わないように命じた。三河は自分の分国だからそこでただ王朝軍を防禦するだけで積極的に抵抗しないというかたちをとるためである。更に天皇に抵抗しない意志を明かにするために鎌倉建長寺に入つて髪を削つて僧となるという態度をとり、部下から示された偽の尊氏討伐の綸旨を本物だと信じてやむをえず出軍するというかたちをとつた。これらは恐らく芝居である。しかしそうした芝居をせざるをえないほどに此時のかれは帝室の理念力をまだ恐れていたのである。

しかし京都攻略に失敗して九州に落ちて行かねばならなくなつた後の尊氏は、帝室にたいして露

骨な権謀術数を弄するようになる。かれは後醍醐天皇の対立党派たる持明院統の院宣を申しうけて「天下ヲ君ト君トノ御争ニ成シテ合戦ヲ致サバヤ」（太平記）という苛烈な政策に着手する。延元元年十月には叡山の後醍醐天皇を欺して鄭重なことばで帰洛を乞い、その帰洛とともに花山院に幽し「叡智浅カラズト申セドモ欺クニ安カリケリ」と言つた。天皇の花山院脱出の報にも驚かず、むしろ手数がはぶけてよろしい、承久元弘の際のように天皇を島流しなどにするとあとが面倒である、脱走されても畿内に居られるだろうからいずれ又処置できる、という太々しいことを言つたことが梅松論にある。尊氏が北朝の光明天皇を立てたときに、時人は、天皇は一戦の功なくして皇位を将軍から賜わつたなどと言つた。尊氏の侮慢的態度がかような評言を生ぜしめたのである。尊氏は、十四才の恒良親王、十三才の成良親王を毒殺した。ここではかれは完全な悪魔になつている。直義は兄に劣らぬ大マキアヴェリストだが、南北朝を合一して帝室の争いを終止させようという常識的な考え方をもつていた。尊氏はむしろそうした考えに反対した。

尊氏は後醍醐天皇の崩御の報に接して悲しんだ。北朝の宮廷ではなんら哀悼の意を表しなかつたのに、尊氏は直に七日間政務を停止した。北朝はそれを見てあわてて廃朝を仰せ出したという。（帝室内の党争に人間的な憎悪心がはたらくことは世間と異つたところがない。）尊氏は夢想国師と相談して後醍醐天皇の冥福を祈るために天龍寺を創建し、その工事はじめに尊氏みずから土を運ぶこと

三度であつた。このかれの気もちは嘘ではなかつたであろう。後醍醐天皇の優遇を回想すればかれの心をえぐるものがあつたにちがいない。しかしかようなかれの哀情吐露的な瞬間においてすらなにか偽飾的なもの、権謀的なものがにおうている。

要するに最初帝室にたいしてきわめて慎重であつた尊氏は、九州落ちを契機としてその後はきわめて露骨で苛烈な権謀術数を弄するようになり、南朝の君主をして吉野の険山に窮迫せしむるに至つた。現実政治がかれにそれを迫つたものであるにしても、かれの性格のなかにひそんでいたマキアヴェリスト的要素の発動した結果でもある。藤原氏以来の腐敗せる王朝政治形式に根本的打撃を加えたのはかれの大きな歴史的業蹟であるが、それと共に帝室の理念力にがむしやらに立ち向つたのはかれの大きな失敗である。理念力も一つの政治力として作用する。むしろそれは物質力や武力よりも倒しにくいものである。尊氏は帝室理念力に代るだけの理念力をもたなかつた。かれの子孫は目に見えない帝室理念力からの復讐をうけた。天皇は国民的象徴であるという現在の日本憲法のような好都合の理論は当時では考え出せなかつた。日本の武士階級の歴史のなかで尊氏の時代ほど利己主義の跳梁した時代はない。武士の階級的代表者たつた尊氏が帝室にたいしてとつた態度もその結果である。

とはいえ、このために尊氏が歴史上に演じた大きな役割まで過小評価してならぬ。それは帝室の

理念力が日本国民の政治、経済、文化の現実生活の全体を規定しうるわけでないからである。国民の生活は国民じしんの内部なる力の発揮と綜合によつて築かれる。

尊氏の歴史的事業、その性格分析

社会はときどき古びてかびが生える。すると社会内部から新しい力が湧きだして更新作用をする。この更新作用は人間の創造的活動を通じておこなわれる。客観的条件なしに人間活動はおこらぬが、客観的条件だけで歴史は機械のごとく動いてゆくものでない。歴史の主要内容は人間活動の業蹟の蓄積である。その人間活動は指導者の計画性と大衆の行動性とから成る。どちらが大切かといえば前者のほうである。

尊氏の毀誉褒貶はいかにもあれかれも歴史の古びた因襲を断ち切つて歴史の車を前に押し出し、日本に新しい活気を吹きこみ、一時代の創造を指導した一人である。二十九才のかれが丹波篠村で北條政府にたいする叛旗をかかげてから、かれの一生は戦争と政治にあけくれするようになり、戦場でいくたびか死地に出入し、恩人後醍醐天皇に叛き、叛服常なき虎狼のごとき武士群の駕御に苦しみ、弟を殺し実子と戦う人生の惨をなめ、幾辛酸のなかに天性の善良がゆがめられて苛烈な権謀術数家となる等、波瀾重畳の生活をおくつたが、かれの死んだあとにはすでに新しい日本の骨骼が

夢窓國師頂相（チンソウ）

（天龍寺鹿王院所藏）

夢窓、諱疎石、天龍寺の開山で、當時代に於ける代表的禪僧である。彼は後醍醐天皇や、北朝の諸天皇から篤い歸依を蒙つたが、また足利氏一門からも大いに尊信を受けた。夢窓の頂相で年代確かなものは今に十點近く傳存するが、こゝに掲げたものはその内でも優秀なものである。上部に書かれた賛文は有名な元の渡來僧東陵永璵の筆である。賛文の末に

岩延文二禩秋孟、住圓覺比丘東陵永璵焚香拜賛、

とあり、延文二年は、觀應二年九月三十日夢窓示寂後六年である。

できあがつていた。この時代の歴史的課題は前にのべたが、そのうち、王朝政治形態の息の根をとめ廃頽の公家層を権力の座から去らしめることはほぼ成功しており、封建制度の仕上げとしての大名領地制中心の新社会構造はかれの欲するところでなかつたとしてもかれの事業の結果として生れつつあり、個人は実力によつてのみ自己の価値を証明せねばならぬという実力競争時代もかれの用意したものだといえる。直接生産者たる農民大衆を搾取者から解放するという課題は、搾取者たる武士層に属するかれのよくするところでなかつたが、室町中期からのさかんな民衆運動はかれが古い固定した伝統をとりのぞいたことによつて可能となつたのである。

武士階級が社会の指導権を完全ににぎることは当時の日本社会の必要事であり、進歩であり、新しい活気と発展の条件であつた。尊氏は明確な社会改造の計画や主体的意識や理想主義的情熱をもつた革命家の範疇に入れうる人物でない。しかし武士の社会的指導権を確立するという、当時においては進歩的だつた階級革命が、かれの事業の結果として実現された。非倫理的なものの中から倫理的なものが、無意識的なものの中から意識的なものが、利己的なものの中から利他的なものが往々産出されるのが歴史の皮肉である。尊氏の事業にもそうしたところがある。

戦争と政治についてみると、かれは個々の実戦はむしろ下手で、敗北のために腰刀に手をかけて自殺しようとした場合が九州落の際にも九州の初戦の際にもあつたが、戦略構想力にはすばらしい

ものがある。かれは北條に叛逆した際にも謙倉で後醍醐天皇に叛旗をひるがえした際にも諸国の有力武士に檄を飛ばして全国的蜂起の手を打つた。京都への東からの関門たる近江の佐々木、西から関門たる播磨の赤松と深くむすび九州や中国を牽制する要地たる四国には直系の細川を配置し、慓悍なる九州兵を利用するために少貳、大友、島津と密接な関係を作る。九州落ちの際には追撃を避けるために山陽道の要地に防禦陣地を多数作つておく。それはまた東上の場合にも役立たせるためである。東上後に叡山の戦争に負けたふりをして義貞をひきよせて大打撃を加え王朝軍の死命を制するに至つたのも巧妙であつた。南朝では前に大塔宮、後には北畠親房があつてすぐれた全国的戦略を立てるが、北朝でこれと対抗しうる雄大な戦略を構想しうるのは尊氏だけであつた。

かれの政治的手腕のほうがむしろ戦略的手腕よりもまさつている。六波羅を攻陥したのちにかれが独断で京都で奉行所をひらいて政務を執行したのは突嗟の場合にひらめく機智と見識の産物であつた。泰時の貞永式目のあとを追つた建武式目の制定は暴力や独裁よりも法の生活を重んずる正しい政治家的センスがかれにあつたことを示す。尊氏が開始し義満が完成したところの半済法は、荘園貴族の物質的基礎を完全に葬り去るものであるが、武家政治の完成のためにも経済の新発展のためにも正しい政策であつたということができる。尊氏が旧幕府や旧王朝の文人官吏をどしどし使用したのも一つの見識である。

興味の深いのはかれの性格である。かれは最高級の武門の出身で、たたきあげの英雄でない。武家名門の子らしい寛容、勇気、誇り、指導力、教養などと共に貴族的な保守主義心理もある。天稟は善良で聰明であつたとおもわれる。私はかような資質をもつて生れた尊氏が、環境の試練、生死の出入、特有の使命の自覚、様々の心の苦悩によつて、しだいに一個の有為な権謀術数的政治家に成長してゆく過程に興味を感ずる。更にかれがマキアヴェリの描いたような西欧的な権謀術数家でなくて東洋的風格をそなえたそれであることに興味を感ずる。東洋的と云つても魏曹操のような理知で身をかためた中国型奸雄でなく、詐謀、残酷、叛変の数々のなかにも情感的な日本的ニュアンスを脱しきれない尊氏の姿に更に興味を感ずる。かれにはマキアヴェリストとしてはありそうもない不思議な暖い感情がある。しかもマキアヴェリストとしては第一級の仕事をしている。かれによつて日本的マキアヴェリストの一つの像をうることができる。

夢想国師の尊氏評が梅松論に出ていて人がよく引用する。夢想国師は後醍醐天皇や尊氏直義などの権力の間を走りまわり、権力の甘酸を知つていた禅坊主であつて、国王大臣を礼拝せずという仏教の基本態度からはなれている人間である。だからその尊氏評は、ほめるにきまつているものである。しかし参考にはなる。かれは尊氏の長所三つをあげ、第一に生死に超越していて合戦の際危地に陥いつても微笑を含み恐怖を知らない、第二に天性慈悲であつて人を憎むをしらず、多くの敵を宥した。

した、第三に物惜しみの心がなく金銀、武具、馬その他を将士にどしどし賜与した、と言つている。仁慈は装うことができるし、物惜しみしないのは人を利で誘う場合にもありうる。敵を宥してその能力を能率的に使用することは多くのマキアヴェリストのやることである。しかし私は尊氏が全然狡智から仁慈や物惜しみせざる風を装うたのだとはおもわない。同時にそうしたすぐれた性格だけで終始したともかんがえない。道理や倫理の世界と政治という現実世界との矛盾は尊氏のような人に特にはげしく現れ、且つかれを苦しめ、その結果、善と悪との交錯したふしぎな人格ができあがる。尊氏は頼朝を崇拝するがその罰の辛かつたことを非難している。親近の将士が戦死すれば涙を流して悲しんだ。鎌倉で叛逆した尊氏を攻めてきた王朝軍の一将でかれの和歌の友の京都貴族二条為冬がかれの軍隊のために討たれたとき、かれはその首をとりよせて悲しみの色が深かつた。これは芝居でなくて真情であつたろう。死を怖れないことは武将の最大の資格だが、かれの経てきた様々の人生の悲苦や又禅学の修養などから死に悠々として面する心の境地があつただろう。

かれは芸術を理解し、和歌を詠じ、書画の技をも嗜んだ。九州落ちのまえに、丹波篠村から三草山をこえて兵庫に出るときに詠んだ「今むかふかたはあかしの浦ながらまだ晴やらぬ我おもひ哉」（風雅集雑部）という歌は技巧と心情の一つになつた佳作である。かれは仏学をも好み、夢想国師と虎関和尚を尊敬し、大酒ののちにも数刻の座禅をした。単なる功利主義的政治家でなく教養の

なにものであるかを解し、又それを身につけていたのである。

しかし現実の政治の世界では、道理や教養どころでなく、狡智と詐謀と術策をもつぱらにせざるをえなかつたところにかれの悲劇がある。かれは国を治むる職に居るものは、「朝家を守護し奉る」（梅松論）ものというようなことを道理として考えるけれども、王朝政治形態をうちくだく過程において最も苛酷なる詐謀を帝室にたいして行う。その数々については前項でのべた通りである。後醍醐天皇にたいする背叛と苦肉の計、その諸王子にたいする容赦なき迫害、北朝の天子を小児のごとく取りあつかう態度、そこには徹底したマキアヴェリストの姿がある。歴史を作る者には、世間普通の道徳律をふみにじる権利があり、忘恩もまた許される場合があるという太々しい自信のもとにかれは行動したとおもう。他人の功を奪うとか、敵の陣営を分裂させるとか、敵の有力者の相互衝突を計るとか、自己の権力欲のためには肉親をも犠牲にするとかのごときマキアヴェリスト特有の苛烈さも尊氏に欠けていない。義貞が北条氏を滅亡させた鎌倉攻めには、四才のわが子義詮に数百人をそえて参加させて義貞の功を奪うことを策し而も相当に成功した。強敵大塔宮を陥れるためには天皇の寵妃に贈賄して妃をして天皇に讒言させ、天皇自身に大塔宮捕縛を決意させる手をうつた。弟直義を利用出来るだけ利用した揚句に毒殺した。悪煽動の技術や利をもつて人を誘う技術にも卓越している。建武中興の失敗のため不平不満をいだく武士の層を巧みに煽動して自己をしぜん武士

の大首領であるように思わせることに成功した。叛逆戦争の過程において盛んに将士に賜与して人間の卑しい物質欲に訴える術を巧みに使つた。自分はやるが他人にはやらせない、自分のやることはみないいが他人がやれば悪い、というのは歴史上の多くのマキアヴェリストにみられるところだが、尊氏にもそうしたところがある。しかしかれ自身は貪欲ならず、あまり悪どい執拗さがなく、戦い甲斐のある敵を尊敬する雅量があり、恩讐をこえて敵をとむらう心の余裕もある。要するにかれは権謀術数家としても小技を弄する型でなく、おのずから大技巧の域に達したものである。それは彼の寛宏な天性が基礎にあつたからだろう。山路愛山は尊氏の有情、寛大、教養、勇気などを数えて「政治家たる彼れは日本国民の或は忘るるも可なるものならん、而も此の如き尊貴なる品性に至つては即ち是れ千秋万歳に光ると言うも亦可なり」と評したが、マキアヴェリの言う如く、善良の資質をもち善良の生活を送つた者も一度悪に染まると忽ち悪人となるもので、尊氏の政治生活も一の詐謀をやれば更により大なる詐謀をやらざるをえなくなり、その生涯には善良なる政治家よりも詐謀縦横の権謀術数家たる面の方が強く出ている。かれはいろいろの意味からみて悲劇の人である。ただかれがイタリーのルネッサンス期のチェザル・ボルヂアのごとき悪魔をも恐怖せしめる悪漢的権謀術数家とならなかつたのは、前にあげたごとき良き天禀があつたからである。これかれを日本的マキアヴェリストとなす所以である。

左翼歴史家の一部には尊氏を革命家だと規定する者がある。これはその人たちの現在の天皇制にたいする嫌悪や否定の感情もしくは主張をただちに尊氏に移入した恣意的な歴史理解である。こういう主観的な機械的な態度で、歴史の真相をも又歴史のなかに流れている真理をも捕えることはできない。また尊氏を革命家なりとする子供らしい議論は、その人たちの革命家の概念がいいかげんなたわいないものであることを示す。（そんなことではスターリン賞はもらえない。）革命家には確乎たる主体的意識、進歩的な理想、新しい社会設計の理念、理想に殉ずる勇気などが必要であるのみならず、何よりも民衆にたいして深い愛をもちその利益を第一とする人である。尊氏はたしかにもう役立たなくなつていた王朝政治を終焉させ、封建社会を一歩前進させる役割をした。しかしかれはそれを自覚してやつたのでない。無自覚であつてもその客観的役割が結果的にみて歴史の進行と合致していた者が革命家だとするならば、藤原時平も清盛も岩崎彌太郎もみな革命家だということになる。尊氏はとうてい信長のような革命児でなく、又近代の我々のもつ革命家の概念にあてはまる人でもない。彼の意識する理想は頼朝のように征夷大将軍になり幕府の主人となることにある。しかしこれは一種の反動的理想である。かれの立法した建武式目、同追加は泰時の貞永式目をまねたものだが、とうてい後者の簡素、勇勁、迫力をもつていない。もつとも重大なことは、かれが民衆の幸福を欲求しそれを保障するなにらかの社会構造を考えてみたこともないことである。かれ

には中大兄皇子や泰時や隆盛などのもつていたような、素朴だが本能的な民衆愛などはなかつた。むしろ尊氏をふくめて武家方の連中は、土地になによりも執着する連中である。土地への執着は農民の搾取のためである。それゆえ、かれらは当時の農民の自主的な立ちあがりをなによりも恐れ、それを抑圧した。だから尊氏に革命家などいう高貴な名まえをつけるわけにゆかぬ。真の革命力たる被搾取者にたいするかぎり、尊氏は武家一般と同じく搾取者であり、したがつて保守主義者である。尊氏を革命家だという議論は、かつての尊氏を逆賊呼ばわり一点張りで片づけた議論と類を同じくする主観論である。いずれも歴史の真を認識することに役立たない。

以上が本書の総論である。これから歴史の事実をしらべてゆこう。十四世紀はじめの日本の政治情勢の分析からとりかかる。

Ⅱ、二つの政府

鎌倉武家政権の由来

十四世紀はじめの日本には国内に二つの政府があつた。一方は武士層を代表する鎌倉の北条政府、他方は公家層を基礎とする京都の天皇政府である。封建社会では権力が分裂して地方的小君主の併存することを常則とするが、此時代の封建主義はまだそれほど成熟していない。いずれにしても一国家の中央権力は唯一でなければならず、それが二つあることは矛盾である。どちらかが真の実権者でなければならぬ。そして十四世紀はじめにはそれは北条政府の方であつた。しかし二つの中央政府の併存という矛盾を最終的に解くために両者は一方の存在を否定する激烈な争闘をせねばならぬ宿命を負う。

二つの政府の存在とその相互競争とは十二世紀末の頼朝幕府創設のときからはじまつているのである。

遠い七世紀の半ばに二人の革命家、中大兄王子（後の天智天皇）と藤原鎌足が氏族主義社会原則を打破して古代的集権国家を創造する大化改新という大胆新鮮な革命を断行した。土地国有（班田

制)、郡県制、国司派遣統治、中国法系的な律令制採用などを原則とする新国家ができあがつた。咲く花の匂う如き、国際色ゆたかな奈良朝の盛期を経て、平安朝に入り、その半ばをすぐる頃から王朝政治をほりくずす種々の矛盾が現れるに至る。藤原一門の閥族政治、院政という奇妙な形式、宮廷貴族間の非男性的な権力闘争、源氏物語の描くような宮廷の遊蕩場化、(落窪物語の主人公は一人の女を熱愛する、男らしい清潔な貴族だが、そんなのは少数だつたろう)、陰謀に疲れた貴族たちの末世的な絶望感、かれら自身のさかんな荘園の造出による土地国有制の破壊、これらによつて王朝政治はようやく末路に入る。

政治の根本はいつでも民衆の生活を安定することが第一条件なのだが、王朝政治はもはやそれを保障しえない。公田の国有奴隷的な農民は苦痛に堪えかねて山賊や乞食になつたり、荘園に逃げこんでゆく。しかし次代の社会の指導権をにぎる武士の層が直接に農民や農業生活にむすびついた土豪や荘官のなかから刻々生長している。保元平治の乱は、神聖化されていた王朝秩序がじつはもはや無力となつてしまつている実態を暴露する。清盛は創意逞しかつたがまだ独自の武家政府を立つるまでに時勢は熟しておらず、かれは太政大臣になつたりして自ら公家の仲間に入つた。数百年の伝統をもつ公家文化は靡爛した甘毒をもつて荒くれ武士を誘惑し且つ復讐する。平氏はそれに中毒して武士の政治的代表者の資格を喪失した。

頼朝

京都生れだが関東の流謫地で野生児の逞しい闘魂を与えられ且つ偉大な首領の風格を生れながらにそなえる頼朝が武士層の新しい指導者として現れた。かれは本能的に京都文化とその政治秩序を警戒し、それに対立意識をもつ。その政治家的な構想力や冷静な頭脳や鉄のごとき意思が大化改新に次ぐ我国第二の革命——封建制度創設の大事業を遂行する。王朝文化の毒に中るかぎり弟義経その他の肉親といえども容赦しない。妻政子も冷血な頭脳、強き意志、男子にまさる断行力の持主で、これまた京都の政治と文化を本能的に嫌悪する。

文治元年(一一八五年)は頼朝革命の第一年として絶大の意義がある。前年すでに平氏追討の戦争中に公文所、問註所などの独自の行政司法の機関を創設した頼朝は、此年になつて三月に平家一門をして壇の浦に悲劇的な最後を遂げさせ、十一月には守護地頭の劃期的制度の実行を京都に申入れて公家政治の喉をしめあげることに着手する。それは、一応、平家没官領や平家に味方したものの荘園に限られたけれども、事実上は幕府の基礎をきずいたもので、これによつて臨時革命政府の性格が一掃され、武家政権を確保する実際政府が作りあげられた。文治五年にはかれの鉄腕は奥州平泉文化の主人たる藤原泰衡を葬り去つて一挙にこれまで統制外にあつた奥州を手中に入れてしまう。

翌年十一月及び建久六年上洛の頼朝の行列は畠山重忠はじめ歴戦の猛将勇士を綺羅星のごとく前後に従え堂々たる大示威を行い、公家を威圧し、叡山の悪僧たちをふるえあがらせる。右大将の職を与えられてもすぐに辞して王朝の官位に執着なきことを示す。しかし抜け目なく九条兼実を買収して、これを太政大臣関白たらしめ、京都における鎌倉の手先としておく政治家的用意を忘れない。建久三年（一一九二年）には征夷大将軍となつて名実ともに武家政権の独裁的主権者となる。

悲劇の帝王後鳥羽上皇

鎌倉政権の完成者は北条氏である。政子の父北条時政はあらゆる詭計を弄して頼朝の子孫を根絶やしとなし、頼朝の宿将畠山重忠、和田義盛を鏖殺して競争者を除き、あげくに自らは後妻牧の方にひきずられて小陰謀を弄して伊豆に蟄居させられてしまう。しかし尼将軍とよばれるにいたつた政子、時政の子義時、その子泰時の努力によつて鎌倉政権の実力が充実する。

そこに十三世紀はじめの承久の乱（承久三年――一二二一年）が爆発する。これは北条方から挑発したのでないにしても王朝政府を打撃する機会として十分利用せられた。後鳥羽上皇は悲劇的な英雄君主である。北面の武士のほかにあらたに西面の武士をおき、自ら鍛冶して刀剣を鍛え、宇治で水練を学び、流鏑馬、競馬、笠懸、狩猟を行う勇武の面とともに、詩人、哲人の風格を有し、後

鳥羽院御集その他の歌集、歌道についての識見をのべた後鳥羽院御口伝があり、古今集以後の大勅撰集たる新古今和歌集を撰せしめ、経典、仏典にも造詣深く、琵琶、蹴鞠にも長者の名を博した。和田の党乱や実朝の暗殺によつて幕府の統制力が弱化したと誤認した上皇は義時追討の院宣を下す。泰時を主将として十九万の関東軍が怒濤のごとく西下し、宇治川の防禦軍を一蹴し、京都を占領し、上皇方の武士や公卿を斬り、後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に流す未曾有の処分をした。後鳥羽上皇は孤島流謫十九年、六十歳にして崩ずる。「われこそは新島の守よ隠岐の海のあらき浪風心して吹け」は悲劇の王者らしい絶吟である。

幕府は王朝方の所領や院宣に応じた将士所領三千余所を奪うて有功の将士に分ち又はその地の地頭に任じた。これを新補地頭という。それは十一町毎に免田一町と反別五升の加徴米を収得する特権ある地位で、今や王朝政治の物質的基礎たる荘園の実質的支配権は武士層に握られようとする。武士の土地所有慾は餓虎のごとくで、かれらの無遠慮な実力主義がどしどし荘園を蚕食する。

鎌倉政府の自己強化策

新しい歴史は古い伝統とのたたかい、その荒々しい否定、それへの侮蔑のうえにきずかれてゆく。新歴史の創造者はたくましい構想力や組織性を発揮し、それを制度化してゆくものである。鎌倉政

府の創設者もまたそうであつた。王朝の律令政治は隋唐文化の模倣であり、明治以後の資本主義生産方法は西欧から学んだもので、いずれも日本自生的のものでなかつたから最初より不合理をふくんでいたのだが、鎌倉時代に発明された封建制度は日本独得のもので、頼朝や泰時には模倣すべきモデルが当時の東洋になかつた。東洋社会の社会構造は中国もインドも依然として古代的であつた。日本の封建主義は当時なにらの関係もなかつた西欧の中世社会にのみ類似物がある。どこからも学ばず、日本社会に封建主義原則をつくり、社会の発達段階においてはるかに他の東洋社会を凌駕したのは比類なき業績であり、わが民族のたくましい創造的能力の現れである。

頼朝及びその政権継承者たる北条氏は自己が新興武士階級の代表者でも統制者でもあることを自覚する。その政治は二面ある。一は自己強化政策、他は京都弱化政策である。

鎌倉政府の自己強化政策において特にめざましいのはその組織力である。

第一は御家人制である。御家人は将軍に謁見して名簿をささげ、臣礼をとつて忠誠を誓つた武士である。(この謁見式を見参の式といつた。) 頼朝は源家の祖先以来の譜代相伝御家人と頼朝一代の新附御家人を綜合して直属の能率的な家臣団を作りあげたのである。御家人はいわば選ばれた武士であり、将軍と特別の主従関係にたち、いざ鎌倉というときには佐野源左衛門常世のごとく駆けつけて身命をささげる。将軍はこれに殊恩をほどこし、土地を与え、守護地頭の職に任ずる。御家人はそ

の所領所職にたいして奉公の義務として大番役警固役などの御家人役なるものを負担するが、他の非御家人にはるかにまさつた名誉と富と権力を有する。幕府は御家人の数を厳重に制限し戦功ある勇士といえども容易にこの地位を与えなかつた。御家人制は武士一般に共通する主従関係を高度化して将軍の周囲に集中的に組織化したもので、将軍はこれによつて強力な手足を作り出した。

第二は守護地頭制である。頼朝は平家を殲滅したのちに弟義経、叔父行家を叛逆者として捕縛するという宣旨を獲得し、文治元年十一月、その捕縛のために諸国に守護地頭を補任し並に兵粮を徴収する必要があると奏請して勅許を得、ただちに御家人をそれに任命した。守護は貞永式目では大番催促、謀叛、殺害人、付夜討強盗山賊海賊のいわゆる大犯三ケ条を処理するもので、軍事権、警察権、司法権、刑事裁判権の掌握である。地頭は庄公を論ぜず段別五升の兵粮米を徴収しその収入たらしめるもので、地頭に任ぜられた御家人は王朝、公家、寺社の荘園に乗りこみ、座りこんだ。承久乱後には沒収所領三千余個所に新補地頭をおき所領の十一分の一を領有する権利を与えた。こうして地方地方に網の目のごとく張られた守護地頭制が王朝の政治的経済的基礎をほりくずしてゆく。

第三は執権制である。上に形式的な将軍をおき、その下の執権が実は実権をにぎる仕組みである。実朝のとき時政が政所別当となり執権の職に就き、義時これを継ぎ侍所別当を兼ね後者は必ず執権の兼職たるものとなつた。すなわち執権軍は政権権二つながら掌握する。梅松論には執権は元

日の垸飯(元日の饗応のこと)、弓場始、遅の座(遅参したとき下席に座すること)、貢馬、随兵、以下所役の輩、諸侍共に対しては傍輩の義を存すると書いてあり、諸大名にたいして同輩である態度をとる。将軍には京都貴族の幼年者を迎え、それが成年近くなると遠慮なく京都に追い返し又幼年者を迎える。この狡智は執権が簒奪者の名をまぬかれるためであると共に、あえて名目に捕われずに実権をにぎるためである。京都的形式主義の虚名を憎む武士的心理もある。尤も幼年者を将軍に迎えて成年になれば追い返すことは、帝室において幼年で天皇になり青年になれば退位させられる永年の風(それは藤原氏の発明である)を踏襲したものであろう。

第四は評定衆という民主的な合議制の創設である。評定衆は執権と共に政所で政務を評議し且つ執行する機関で、政所執事、問注所執事などの重職を兼ねる大江、清原、中原、三善などの文筆の士と共に北条の一門や三浦、千葉、安達、結城、宇都宮、小田、佐々木などの武家の名門が任命される。別に引付衆というのがあつて評定衆を補佐し訴訟その他の公事をとりあつかう。北条歴代の執権は独裁者でなかつた。泰時はその範を示した。かれは諸大名を文字通りに傍輩として遇し齢六十になつても他の若年者と共に幕府に宿直した。当時の武士は革新的な階級らしく民主主義者である。大名には家督なるリーダーがあつたが、それは独裁者でなく、一族の有力者をえらんで合議制をつくりその決議によつて一族の進退を定めた。幕府の民主政治は人工的に作為されたものでなく、か

ような武士一般の習俗を高度に組織化したものである。(北条末期になると寄合衆という貴族政治的なものができて評定衆の健全な民主主義が骨抜になる。)

第五は武家法制の創作である。貞永元年(一二三二年)泰時は貞永式目五十一箇条を制定した。これは頼朝以来の不文法を成文化したもので、関東御家人のみに下したものだが、武家一般を支配する法制となり、やがて武家以外の者もこの法によつて裁判されることを願うに至つた。それは冒頭に武士らしい素朴さで神社仏寺を崇拝せよという国民的信仰をのべ、守護地頭の職分、土地所有の規律、主従の恩義、家長権の強化、訴訟手続、国司領家との関係、従者下人のことなどを規定してある。新興階級たる武士の簡純で男らしい倫理がその根底を流れている。貞永式目は武士のしだいに充実してきた実力の表現であると共にかれらはこれによつて改めて自己を意識した。王朝の律令的法制はすでに無力化している。新しい社会は新しい法を要求する。貞永式目が後世にわたつて力本位の武士社会に法の生活、法の権威を教えた功蹟は大きい。

鎌倉政府の京都弱化策

次ぎに京都弱化政策について。

鎌倉幕府は京都政府を対立物として意識する。元来、帝室と王朝政治とは完全に一体をなすも

のでない。王朝政治は公家とよばれる一団の宮廷貴族の独占物であり、天皇は実際的権力者でない。しかし公家は天皇を自己の頭部として巧みに利用してきている。帝室を尊敬する国民感情は、鎌倉時代における日本は神国だという思想の勃興につれて、新たに深まつていても減つていない。山路愛山は承久の乱で三上皇を島流しにしたのは北条氏の大失敗だと言つているが一理ある。そうした国民感情がなかつたならば北条氏は帝室を潰していたであろうし、況んや腐肉のようになつている京都貴族の如きをや。しかし帝室と王朝政治とは完全な一体でなくても切りはなすことができぬ。だから鎌倉政府は次のような監視、干渉、分割政策をとつてその実際的な弱化に努力した。

第一は京都の両六波羅に探題をおき、これをもつて京都政府の一挙一動を厳重に監視したことだ。この機関は承久乱の直後に設置され、北条一門だけの所職であり、京都だけでなく近畿近国及び関西諸国（三河、伊勢、志摩、尾張、美濃、加賀までを含む）の政務を扱い、ほとんど鎌倉の執権に類するようになつたが重大事件はすべて早馬をもつて鎌倉と連絡した。

第二は摂政関白のような重要な廷臣の任免について一々幕府の承認を必要としたことだ。廷臣は猟官のために鎌倉の鼻息を伺う卑屈な状態となる。

第三は皇位継承についても幕府の承認を必要としたことである。天皇は北条氏によつて任免されたとはいわないけれども後者の意志を無視することは事実不可能であつた。

第四は両統交迭の分裂政策をとつたことだ。王朝にはもはや実際の政治はない。それだけに皇位に即くことそれ自体がせめての権力欲の満足なのであり、又それだけにその争いは猛烈となる。持明院統と大覚寺統の両党派の端をひらいたのは帝室自身であるけれども、北条氏はこれを奇貨として両統交迭方式を正式化した。これは継承争いを一そう猛烈にするだけである。後には両党派のそれぞれの内部が又内訌をおこすという有様で、皇位をめぐつて人間的な感情や利害が糸のもつれのようにいりみだれて拾收できぬようになつた。北条氏は公平な審判者のごとくそれを処置することができる。これは北条氏の思うつぼである。

第五は高級宮廷貴族の間にも五摂家分立のごとき分裂政策を弄したことだ。頼朝はすでに藤原の家領を二分して基通、兼実両人の子孫に世襲させ、摂政関白の職を交替せしめることにしたが、時頼執権時代に基通の系統は近衛、鷹司二家となり、兼実の系統は九条、二条、一条の三家となり、これより五摂家が代る代る三四年毎に摂政関白を出すことになり、その任免は北条氏の意志のままで、五家の競争激甚なのは却つて北条氏の分割操縦政策を容易ならしめた。貴族は流石にこの状態に恥辱を感ずる。陰謀術は宮廷貴族の長ずる所である。兼実の孫道家は三浦泰村と通じて北条氏を傾けんとしたが発覚したのちに俄に暴死した。これは時頼が殺したのだといはれる。

第六は宮廷貴族のなかに幕府内通者を作つたことだ。伝統的に幕府のスパイをもつとも多く出し

ているのが西園寺家である。西園寺公経なるものは承久の乱のとき幕府方だとして後鳥羽上皇から幽閉されたが、乱後一そう幕府にとり入つて太政大臣になり豪奢をきわめた。それ以後、西園寺家は北条氏の尻押しで自家の娘を后妃に納れて高位高官を占めた。西園寺公衡なるものは亀山上皇を関東討伐の陰謀ありとして六波羅に押し籠めたことがある。西園寺公宗なるものは北条滅亡後、高時の弟泰家を自宅に隠匿し叛を謀つて出雲に流され名和長年の手にかかつて殺された。足利時代になつてからもスパイ根性は直らない。公宗の子実俊は足利氏に阿諛して立身して北山右大臣と称せられた。王朝の衰に際して宮廷貴族のなかから多くの獅子身中の虫が出たが鎌倉、南北朝、足利の諸時代にかけて西園寺家のように連続してスパイを職業とした貴族は珍しいほうである。こうした存在は鎌倉政府の京都弱化政策にとつてあつらえ向きであつた。

北条氏の民本政治

政治の根本はけつきよく勤労する生産者大衆の生を安んずることにある。天の意志は民衆の意志において現われるという中国易世革命理論には真理がある。北畠親房はその神皇正統記の中で天という言葉を神という言葉に代えて「神は人をやすくすることを本誓とす。天下の万民はみな神物なり。君は尊くましませど、一人をたのしましめ、万民をくるしむることは天もゆるさず、神もさい

はひせぬいはれなれば政の可否にしたがひて御運の通塞あるべくとぞおぼえ侍る」とこの道理を喝破している。古い澱み水のような腐敗貴族はすでに天から見捨てられた。これに代つた鎌倉幕府は武士らしい勇気と単純さをもつて民生安定の使命を果した。武家を敵とする親房すら同じ神皇正統記のなかで「およそ保元平治よりこのかたのみだりがはしさに、頼朝といふ人もなく、泰時といふものなからましかば、日本国の人民いかがなりまし、此いはれをよく知らぬ人は、故もなく皇威のおとろへ武備のかちにけると思へるはあやまちなり」と賞讃を惜しまないでいるのは有名なはなしである。

泰時より時頼を経て時宗に至る北条盛期の政治はすばらしい。これらの執権たちの性格には人間性の醜悪やおろかさがみられなくて、利他、簡純、実事求是、勇気、謙譲、友愛などの美しさがある。泰時は身を持すること謹厳、簡素に甘んじて下に傲らず、傍輩の義を重んずる民主主義者であり、実利を無視せず、断行の勇あり、慧眼の政治家であり、貞永式目の創作者である。時頼の母松下禅尼は破れ障子を切りばりしてつくろうた。時頼が一夜重臣と皿に残つていた味噌をなめて酒を酌んだ話も床しい。引付衆の新置、すぐれた財政々策、武芸の奨励、民政視察の廻国、良吏青砥藤綱の登用などもかれによつてなされた。時宗は胆、斗の如くよく蒙古の襲来をしりぞけた。

北条氏のすぐれた民政の数々については山路愛山がうまくまとめている。今それを借用して摘記

する。北条氏は、武蔵の草莱の地を開くために多摩川の水をひいて灌漑した。西国地頭に百姓にたいして不法の課税をなすことを禁じた。京都の大番役をつとむる将軍家人が路費を百姓に課することを制限した。利息を制限して民間の貸借で債務者の負担を軽からしめた。凶作に際して酒の売買や醸造を禁じた。饑饉に際して適切な救済策をとつた。夜間弓矢を携えることを禁じた。他人の子女を掠奪して奴隷に売る者を厳罰した。駅路の法を定めて大名が故なく多数の駅馬を徴することを禁じた。旅行者のために道側に柳を植えしめた、等々。

しかし世に永遠なるものはない。権力者は腐敗しやすい。新しい社会的発展につれて古い政治機構を変えてゆくこともむづかしい。この腐敗と保守主義がむすびついて権力の末路がくる。北条氏もこの宿命をまぬかれえなかつた。それが南北朝革命時代の導火線となることは次の章でのべる。

京都政府の内部的頽廃

こんどは他方の京都政府について観察しよう。

京都政府が新立の武家政権の圧迫をうけてその形式的な独立さえ危うくされてきたのは、長い間の自己頽廃のために民衆の生活を安定する力を疾くより失つていたからである。

日本と中国とは社会構造を異にするのに後者の律令政治をモデルにした王朝政治は最初から矛盾

を含んでいた。国有土地制は奈良朝養老七年の墾田三世一身法や天平十五年の墾田永世所有の承認などによつて早くも崩壊しはじめ、更に平安朝に入つてから寺院や権門勢家の荘園占有が猛烈となり、それらが国司の手の及ばない不輸租田となり、かくして貴族みずからその政治の基礎をほり崩した。やがて群盗が京畿にも出没するようになり、早くも承平天慶年間に純友将門の叛乱がある。大化改新は世襲的な大氏族の政治を打破するものであつたのに、政権は藤原氏一門に独占され、新たな氏族的世襲政治が現れ、政治は摂政関白によつて行われ、その政所下し文や御教書が天皇の宣旨に代つてしまう。他族を駆逐した藤原氏はこんどは一門内で兄弟叔姪相争うて陰謀にみちた権力闘争をする。天皇に娘を押しつけて外戚となることが権力掌握の常套手段となる。社会をも自分をも腐らすエゴイズムが繁茂する。花山天皇のように陰謀の犠牲となつて退位させられるものがある。宮廷の政治とは恒例臨時の年中行事や儀式を意味するだけとなる。詩歌管絃の遊びは盛んである。天皇は青年になると退位させられる。宮中の女官は娼婦のごとく、貴族は娼家に入りびたる遊治郎の如くこれと戯れること源氏物語の描く通りである。非生産的にして武事に縁なき頽廃文化ができあがる。源氏物語のほか竹取、伊勢、うつぼ、落窪、とりかへばやの物語類のすぐれた文学作品はたくさんできたが、そんな遊びごとで天下は治められない。

地方では剛健なる武士の層が生長しつつある。国司として赴任したもので京都を見かぎつて土着

したもの、皇胤に出でたと誇る清和源氏、桓武平氏、伊勢平氏、摂津源氏、河内源氏などから首領が出る。荘園内の開発地主、荘園領家の下司、荘官、これらの自らも農業を営み生産とむすびつき地方の無政府状態にたいして治安の維持に任ずるものが武士の大衆を構成する。それらは安倍頼時、貞任を討つた八幡太郎義家のような大首領にひきつけられる。氏族原則よりも強者原則が支配する。武士にとつて強者は同時に賢者を意味する。家人や郎等はそれに生命を捧げる。主従関係と剛勇の倫理のむすびついた武士道ができあがる。かような新鮮な道徳は京都貴族にはない。

平安朝末期の白河上皇から院政という変態政治がはじまる。退位した上皇が院庁なるものを開いて実際の政務を執るのだから天皇は虚位となる。これまで政権争奪に伴う血で血を洗うお家騒動は藤原一門にかぎられていたのだが今や皇室内部でそれがはじまる。

かような矛盾が重なり合うて保元平治の乱となつた。それは皇室や貴族の権威を失墜させ、もはや武士なくして社会治安の保たれないことを示し、武士の代表者清盛を実際政権の運営者たらしめた。平家没落後の頼朝の武家政権の樹立、さらに承久の乱は京都政府の勢力を一そう低下する。華麗を競うた王朝政治は今や一片の遠い昔の夢となる。蒙古の来襲の際には宮廷は驚愕、周章狼狽、なすところを知らず、敵国降伏の祈禱修法をもつぱらにしただけである。時宗の鉄腕と新興の武士団がよくこれを撃退したが、もし蒙古の来襲がもう二三百年早い王朝時代だつたならば、遊牧族の

馬蹄が日本をふみにじつていたであろう。

皇位継承の争闘

謙倉幕府の辛辣な対京都政策についてはさきにのべた如くである。皇位の継承も摂政関白の交替もいまや幕府の承認なくしては行われない。幕府の京都出張所たる両六波羅は監視の眼をゆるめない。九条西園寺のような大貴族は幕府のスパイとなつている。幕府の分裂政策は皇室にまで及び、悲惨な醜争が両統交迭のかたちで高潮に達してゆく。泰時の孫時頼の執権第二年のとき後嵯峨天皇は第一皇子後深草に位を譲つたが、第二皇子亀山を愛した故に、後深草に命じてこれに譲位せしめ、更にその皇太子には後深草の王子を以てせず、亀山の王子をもつてした。後者が後宇多天皇である。後深草これを怒つて幕府に訴え、幕府は同情を装うて干渉し後宇多に後深草の皇子伏見天皇に譲らせた。後深草天皇の系統を持明院統といい、亀山天皇の系統を大覚寺統という。これより両統の皇位争奪戦は深刻となり、後に前者が北朝となり後者が南朝となる。老父が同じわが子ながら兄を疎み弟を愛するために家庭悲劇のおこること世上に例が乏しくないが、今やそれが帝室内部で行われ日本の政治全体に大きな影響を及ぼすにいたる。両者は或は互に幕府の好感を得るために秘術をつくして運動し、或は自派の天皇の即位の速かなることを祈るために願文をやたらに諸社寺に

納め、甚しきに至つては持明院側より大覚寺統は討幕の陰謀ありと密告するという浅ましさである。

大覚寺統は皇位争いのためテロ手段さえ辞しない。正応三年に浅原八郎為頼という武士の父子三人郎従二人が未明に乗じ内裏の北門より馬にのりながら乱入して南殿にかけあがり、伏見天皇（持明院統）を殺そうと捜しまわつたが、天皇は素早く遁れたので、為頼等は紫宸殿で腹を切り、腸をつかみ出して賢聖障子に投げつけて死んだことがある。その射た矢に太政大臣為頼と書いてあり、その自殺した刀は大覚寺派の三条実盛の家に伝わつた鯰尾という名刀だつたので実盛は召捕られ、亀山上皇にも嫌疑がかかつたが、上皇より釈明書を鎌倉に送つてようやく事なきを得た。大覚寺統が討幕という党是を伝統的にもつていたのは恐らく事実であろう。また大覚寺統にはテロリズムの伝統もある。この伝統に立つ最も徹底した直接行動主義者が後醍醐天皇である。

大覚寺統の後醍醐天皇は壮年三十四にして即位した。後鳥羽上皇に劣らざる英雄君主である。即位の前年に後伏見上皇（持明院統）と後宇多法皇（後醍醐の父）との間に北条政府の干渉のもとで文和御和談なるものが成立し、後二条天皇（大覚寺統）の皇子邦良親王を皇太子となし、次に後伏見上皇の皇子量仁親王を東宮とし、その系統にて皇位を交迭することを定め、後宇多は後醍醐に汝の子孫に賢才出ずるも臣下として永く仕えよと遺勅した。これでは後醍醐の子孫は皇位の埒外に立

たねばならない。この憤懣が後醍醐の討幕計画の直接原因である。

京都政府はこんなお家騒動だけに終始したのではない。艱難は人間を鍛練する。承久の乱に惨敗してから北条政府の京都政府に加うる侮辱は堪えがたいものがある。幸いにまだ皇室領は残つていて物質的基礎は失われていない。逆に北条政府のほうで末路的矛盾がひどくなる。諸国の不平分子は京都に信頼を寄せはじめる。こうした事情から大覚寺統には亀山、後宇多、後醍醐のように学問と勇気を兼ねた君主が続出する。持明院統は温厚な君主が多いが花園のごときは深い学殖がある。又競争が刺戟となつて両統の宮臣には有為な人物が出てくる。とくに大覚寺統には吉田定房、萬里小路宣房、北畠親房のような人材が出揃う。社会構造の変化、この変化期に必然ともなう各階級の不平不満、生産者大衆の窮乏、天災饑饉、こうした革命情勢の成熟は、先ず北条政府打倒を革命運動の最初の課題たらしめる。この皮切りをするのが後醍醐天皇である。

Ⅲ、正中の変より元弘の変へ

革命的情勢

革命の前提となるのはそれを可能ならしめる情勢の成立である。客観的に成熟してくる危機、大衆が普通以上にひどくなつた困苦と悲惨には堪えきれなくなつて大きくうごき出すこと、支配者がもはや昔どおりの支配をつづける能力をもたないことなどが革命的情勢の特徴である。これらのものなしに革命はおこらない。（革命製造業者は必ず失敗する。）北条の最後の主人高時の執権時代はこうした情勢にみちている。

長く権力的地位に居るものは、一方では保守主義となり、他方では逸楽のために内部的に廃頽してゆくのが歴史の法則である。評定衆引付衆の合議制に現れた北条氏の健全な民主主義が骨抜きになつて執権の私第の権臣の寄合衆の会合が政治の中枢となる。民主政治は今や少数政治となる。かような時に腐敗の象徴として賄路が横行する。慾深い権臣長崎高資が政権を左右し、盛に賄路をとる。かれは津軽の武士の領地訴訟に際して両方から收賄して事件を解決せず、そのため同地方の争乱十年にわたりそれを鎮圧できぬために幕府の鼎の軽重が問われる。

高時は増鏡が「うつつなき人」と評しているような愚君主で田楽や闘犬の逸楽に日を暮らす。かれは新座本座の田楽芸人をよびよせ、宗徒の大名に一人ずつあずけて着飾らせ、宴に臨んで一曲すれば高時はじめ一族の大名が直垂大口を解いて投げ出して賞品とし、默阿彌の「高時」の描いているような狂態を演ずる。闘犬に凝つて諸国にふれて犬を正税として募り、大名が犬を輿にのせて鎌倉に向うときは路次の旅人は馬より下りて跪き、鎌倉の町には犬が充満し、月に十二度闘犬の遊びの大騒ぎをする。家臣も奢侈となる。

かかる時に京都では刻々幕府顚覆の陰謀が進行している。元享元年夏の大飢饉には銭三百をもつて粟一斗を買うほどの大インフレとなり、飢者地に倒るる惨状を呈したが、幕府はもはや有効な救済策をたてることができない。民衆の生活を安定するという泰時以来の政治理想が台なしとなる。関東の兵は天下の兵に敵すといわれた鎌倉武士の武勇はまだ衰えないが、それは理念を失つた単純な肉体的暴力にすぎなくなつている。京都政府にたいする圧力も衰えてゆく。京都の陰謀にたいしてもなかれ主義や、臭いものにフタをする式の臆病な宥和政策がとられるようになる。後醍醐天皇事の第一回の討幕計画の発覚（いわゆる正中の変）に際しては、京都側の詭弁にごまかされ、もしくはごまかされた風を装うてウヤムヤのうちに事件をすませ、後醍醐の攷々撓まざるその後の七年間の陰謀計画をもうかつに見のがした。玉石共に焚く断行の勇なく、危機を一寸のばしにして、一日の安

きをも偸もうとするのは、自信と統制力を失つた末期の政権に特有のことである。

北条末期になると、その政権の基礎であつた御家人制と地頭制が意義薄弱なるものとなつてゆく。御家人は特権的地位でなくなり、非御家人とえらぶところがない。地頭に代つて守護が勢力を拡大して、地方的小君主に成長して中央権力の統制力を弱めそれに対する北条氏の干渉は有力な地方権力の反感を買うだけである。九州探題の設置は、九州の大族たる少弐、大友、島津等を憤らしめ、かれらの心は北条氏から離れてゆく。下級武士は幕府をもはや自分たちの階級的代表者として感じなくなつている。

当時の日本社会の細胞をなす村落は、農業生産力の進歩につれて上からの支配だけの荘園的村落から自治的郷村えと構造的変化をとげつつある。国有奴隷的な農民大衆は、自治的な農民となりはじめ、荘園領主や幕府の手先たる地頭に反抗し出す。事あれば鐘をついて集り、租税不納を決議し実行したりする。支配者から悪党と呼ばれる下級武士や富農層が農村の反抗運動を組織化する。北条幕府の統制力の根源をなす地頭制はもはや崩れ去り、それと共に北条氏の命脈も絶たれることとなるのだが、末期政権はもはやどうしてよいか判らず、成りゆきまかせ、一日の安きをぬすむだけで、こうして革命的情勢は刻々濃厚となつてゆく。

正中の変

革命は客観的情勢だけからずるずるにできあがるものでない。革命の根本問題は権力である。古い権力に代つて新しい権力の成立することによつて革命は現実となる。旧政府はたとえ危急存亡の瀬戸際に立つても、それを倒そうとする力が加わらないかぎり自分でひつくり返るものでない。

北条打倒に立ちあがる主体的勢力が二つある。第一は後醍醐天皇を指導者とする京都勢力であり、第二は尊氏を首領とする武士勢力である。第一のものは早く、第二のものは遅れて自己の姿を現わす。この二つの勢力の争覇戦こそ南北朝革命時代の主題をなすのだが、北条打倒闘争では、そのいずれか一方だけでは力不足であつたので、両者はそれぞれ異つた意志をもちながら、先ず北条打倒において協力する。日一日と衰弱してゆく北条政府にまず先頭を切つて飛びかかるのが京都勢力である。

後醍醐天皇

後醍醐天皇が討幕を決意した直接動機は案外に高遠ではない。王朝政治一般を回復して善美の君主政治を布くという意図を内包していたにしても最初からそうした明確な理想をもつて出発したも

のでない。文治御和談によつて後醍醐の子孫が皇位を継承できぬこととなつたが、天皇としてはその決定をやぶつて自分の王子に皇位を継承させたい。しかるに持明院統はその系統の量仁親王を早く即位せしめたいために後醍醐の退位を北条氏に運動しているから、まごまごすれば自分が退位させられる危険な地位にある。退位すれば皇室領からうける物質的利益をも失う。北条氏の皇位継承に干渉する侮辱的態度、それにたいする憤懣、自己の地位不安感、一挙に継承問題を自己に有利に解決しようとする焦慮、それらが天皇の討幕運動の直接動機であつたことは田中義成、黒板勝美のような官僚大学の先生も指摘している。驚天動地の活劇を演出する南北朝の争乱、王朝と武家との決闘という非常に意義深い一時代が、かような帝室の内輪もめから発端するのは意外の感じがするが、こうした人間的動機が歴史的大事件の爆発の糸口となるのは史上珍らしいことでない。

しかし後醍醐天皇は豪胆、断行力、聰明、学殖をかねた英雄君主で、北条打倒から南朝運動に至るまでの大指導者たるに恥じない。太平記は延喜天暦以来の聖主明君と讃え、最大の敵手尊氏も終生心中に天皇を敬慕する感情をもちつづけた。天皇は玄慧法師その他から当時新流行の宋学（程朱の学）を学んだ。宋学は大義名分論によつて人を志気凛烈ならしめ又その仏教かぶれの哲学によつて激越な空想家を作りだす。持明院統の君主は中国古典については漢唐の古義を守つており、花園天皇のごときはその宸記のなかに後醍醐天皇の宋学陶酔を非難している。後醍醐天皇は大燈国師な

後醍醐天皇御畫像

（大德寺所藏）

後醍醐天皇御畫像の由緒確かなものは二幅傳來している。その一幅はこの大德寺所藏、今一幅は清淨光寺所藏の灌頂御影である。大德寺所藏のものは天皇が御帳臺の前に御袍をつけて座せられた御姿で、前に一老臣が對座している。その老臣は明らかでないが、後三房の一人、萬里小路宣房とも傳えられている。

どについて禪學を学び又真言の学にも通ずる。神道の学にも通暁している。伝統的な宮廷文化たる和歌の道と精神を身につけているのはいうまでもない。かような教養で知性をみがき、自然、人生、歴史、政治についてすぐれた世界観をもつている。いかなる艱難にも屈しない強靱な意志と勇気のあることは、笠置蒙塵、山中跋渉、小袖と帷子のままの姿での被捕、隠岐への島流し、花山院での幽閉とその脱出、吉野の険山での南朝創立など、波瀾重畳の一生に証明せられた。建武中興の際には「古の興廃を改めて、今の例は昔の新儀なり、朕の新儀は未来の先例たるべし」（梅松論）という伝統打破の凛々たる勇気を示す。大塔宮護良親王以下の諸王子が天皇の意志と熱情をそのままうけついで全国に転戦してその大部分が次々に死んでゆく悲壮な歴史は、一人の人間の意志の緊張するときにどんなに周囲に巨大な影響がおよぶか、そこにどんなにすばらしい美しさ、男らしさを生みだすものであるかを我々に感ぜしめる。

大覚寺統の君主にはいくぶんテロリスト的ないし軍力主義者的な傾向がある。これは特に後醍醐天皇においていちじるしい。天皇は、革命の根本的問題が権力であり、北条権力を倒すためには軍力が第一であることを理解する。いわゆる平和革命などは考えられない時代である。天皇の討幕運動は最初から非合法運動をもつてはじまる。

青年革命貴族

天皇は日野資朝、同俊基という二人の青壮年公卿を寵用した。革命の前ぶれにはいつも青年インテリが出てきて陰謀の集団をつくる。天皇の手足となつてこの役割を演じたのが資朝俊基を中心とする青壮年公卿層である。かれらインテリは革命のための真の力をもたないから、いつも悲壮感にあふれて行動してけつきよく非業の最後をとげるのだが、そのがむしやらの勇気と運動に点火する功績は買われてよい。かつて藤原為兼が六波羅の嫌疑をうけて捕縛され、武士がうちかこんで押送してゆく姿を、一条あたりの街上で見ていた資朝は「あな浦山し、世にあらん思出、かくこそあらまほしけれ」と言つたと徒然草が記している。男子と生れたからには革命のためには断頭台も辞するところにあらずという青年らしい感傷である。保暦間記には、天皇の関東誅伐の企ては内裏の近習月卿雲客、依々主上に勧め申したからだとあり、いかにかれらが積極的であつたかが知られる。

太平記には、資朝、俊基がリードして、四条隆資その他の貴族、玄基法眼という僧、足助、多治見などの武士をまじえて無礼講と名づけて、六波羅探題の眼をくらます秘密会合を開く記事がある。男子は烏帽子を脱いで髻を放ち、法師は白衣だけとなり、年十七八の眉目美しい娘にすすしの単衣をきせ雪の膚の見ゆるばかりのものに酌とらせて狂歌乱舞する。しかし「其間ニハ只東夷ヲ滅スヘキ

企ノ外ハ他事ナシ」とある。時々玄慧法師を招いて昌黎文集を講義させてごまかすが、学者であるこの坊さんは謀叛の企など夢にも知らない。この無礼講なるものは花園天皇宸記にも見ゆるそうだから太平記作者の捏造記事でない。

資朝は山伏の真似をして柿の衣にあやは笠をかぶり東国に忍び下り、俊基は紀伊国に湯治に行くと言いなして「田舎ありき」をしたと増鏡にみえているが、これは同志を募るための地下潜行運動で、大覚寺統の伝領や寺社領の武士や、各地のアンチ北条的な武士と連絡をつけて歩いたのである。（太平記では俊基が山伏になつて大和、河内を半年ばかり歩いたとなつている。）土岐頼貞、多治見国長などの武士がこれに応じた。楠正成もこの時に連絡のついた一人であらう。

大検挙

正中元年（一三二四年）六月後醍醐天皇の父後宇多法皇がなくなられた。天皇は悲嘆にくれながら討幕計画を秘密に進行させている。九月突如として陰謀が発覚して大検挙となる。これは内応の武士船木頼春が妻に密謀を語り、妻は六波羅役人の娘であつたから一大事とばかりに六波羅に駈けこんで密告したからである。こんな大事は妻兄弟にも語るべきでないのに、それを破つた故にあえな く婦人のために事が破れたのである。

六波羅から土岐、多治見の宿所に押し寄せた幕府軍は意外に強い抵抗に逢う。しかし衆寡敵せず、両者の一族は悉く壮烈な戦死をする。資朝、俊基は、土岐、多治見が討たれたとき一人残らず戦死して捕縛されたものがなかつたから自分たちは大丈夫だろうと用意しなつたところを襲われ、（そうした悠長さはやはり貴族らしい）。家は焼かれ、身は捕われて関東に送られた。俊基は鎌倉で無礼講は文礼講なりと詭弁を弄していいわけした。天皇は屈辱の涙を呑んで釈明の告文を草し万里小路宣房を使者として鎌倉に持つて行かせた。北条政府は、天皇の責任を問わず、資朝を佐渡に流しただけで、俊基は釈放し、それで事件を落着させた。末路政権らしい自信なき宥和政策である。これを正中の変という。

元弘の変（第二回の陰謀）

第一回の陰謀が発覚してもそれに挫けるような後醍醐天皇ではなく、青年貴族はますます関東にたいする憎悪心に燃え、運動自体は一の必然性をもつて発展してゆく。天皇側の計画は一そう慎重になると共に大胆を増し、その範囲は大寺院や各地の不平武士にまでおよんでゆく。これより元弘の変がはじまるまで約七年の歳月がある。北条政府は此間天皇の陰謀を慢然として見送つた。気がつかなかつたとすれば間抜けであり、うすうす気がついていても手を下しえなかつたとすればそれ

は実力喪失の自白にひとしい。こうして北条は日一日と末期政権の麻痺状態となる。

天皇の第二子にして叡山の座主たる大塔宮尊雲法親王（護良親王）は行学ともに捨てて武芸の稽古をはげみ又兵法書の研究に余念がない。「いまだかかる不思議の法主はおはしまさず」など噂されたが、それは関東討伐の軍司令官たるためであつた。諸寺院の高僧が宮中に召されて北条を呪詛する調伏の法が秘密に行われる。テロ手段も辞するところでない。元徳二年に天皇の重臣の一人でその家業の法曹の学の大家であつた中原章房が清水寺詣での帰り道で瀬尾兵衛太郎という悪党に暗殺された。これは天皇が中原に陰謀をうちあけたところ却て諫言をしたので、口を滅するために暗殺せしめたのだとの世評であつた。目的のために手段を問わざる陰謀団特有の悪情熱がひろがつてゆく。

かようなときにも帝室内部の継承争いは依然として静まらないのみか一そうはげしくなつてゆく。皇太子邦良親王は同じ大覚寺統で、後醍醐の甥でありながら、早く位に即きたいために幕府に内通して天皇の退位をひそかに運動している。嘉暦元年三月邦良親王死す。（その死因も怪しいものだ。）神皇正統記はその死を神罰だというようなきびしい批評をしている。それに代つて持明院統の量仁親王が東宮となつたが、これまた北条に天皇を譲位せしめることを運動している。後醍醐は自己にむけられた陰謀を根本的に打破するには皇位の決定を左右しうる北条を除くほかなしの決意を

ますます強くする。

討幕陰謀は今や宮廷の革新貴族の狭いサークルの運動にとどまらない。諸国の武士（特に伊賀、伊勢、大和、河内）の間に中納言源具行のばらまく秘密の宣旨がゆきわたつてゆく。悪僧とよばれる僧兵団を有する叡山や南都や高野山などの大寺院もうごき出す。

吉田定房の密告

ここで突然妙なことが起つた。後醍醐天皇の重臣で天皇の乳父として天皇の幼少より信任をうけていた大貴族吉田定房が主上に討幕の陰謀ありと密告したことだ。鎌倉年代記はそれを元弘元年四月二十九日の項に記し且つ俊基が主謀者だという訴えだつたことを記す。定房は天皇の笠置落ちにも従わず、天皇が隠岐に流されたときには京都に居り、建武中興の際には又重用されて内大臣となり、更に北朝の光明院に仕え、それから再び吉野に走り後醍醐天皇のもとで一生を終つた。去就の変幻端睨すべからざる怪人物である。弁護する者は彼の密告は勢隠すべからざるを察し天皇と相談の上、先手を打つて罪を俊基一人に負わせるためのものであつたとなす。史徴墨宝考証のごときはその説で官僚学者のそれに同意するものが少くない。もしその説が正しいとするならば、あまりに苛烈な権謀術数であり、終始一貫革命に忠実であつた俊基を売ること甚しきものである。後醍醐天

皇には非合法運動者のおちいりやすいかような深刻な態度があつたようにも思われる。前記の中原章房の路上暗殺、中興の勲功第一の大塔宮を捕縛して尊氏に渡し悲惨の最後を遂げしめたこと、義貞が尊氏の軍と激戦中に尊氏の詭計的な申出に応じて帰京を決定して義貞を茫然たらしめたことなどはそれである。かようなマキアヴェリズムがよい結果をおさめるはずがない。大塔宮は鎌倉幽囚中に尊氏よりも天皇を恨むという言葉をもらしていたと梅松論に出ているが、その惨死によつて天皇は最上級の将軍を失うたのである。尊氏の口車に乗つて帰京した天皇は忽ち花山院に幽せられた。

それはさておき定房の密告の飛脚に接した北条政府はようやく京都への圧迫を決意する　大塔宮の武芸鍛錬や宮中の調伏の法などのたねもあがつてくる。高時は大に怒つて「此君御在位ノ程ハ、天下静マルマシ、所詮君ヲハ承久ノ例ニ任テ遠国ニ遷シ奉リ、大塔宮ヲ死罪ニ処シ奉ルヘキナリ」（太平記）と決心する。まず調伏の法を行うたという円観、文観、忠円の三高僧を捕え鎌倉につれてきて糾問した。幕府方の佐々目僧正というのが証拠品の本尊の形、炉壇の様などを検して調伏の法に相違ないと証言する。（僧侶もまた宮方武家に分裂する。）最初に文観を侍所で水火の拷問で責めると、はじめはこらえていたが苦痛に堪えかねて終に白状する。忠円は天性臆病だつたのでふるえあがつて拷問にかからぬ前からありもせぬ余計なことまで白状してしまう。円観は後伏見、後二

条、花園、後醍醐、光厳の五代にわたる国師だつたから幕府も遠慮して拷問しない。文観は硫黄島へ、忠円は越後へ流され、円観は奥州の結城宗廣のところに預けられた。（文観は建武中興の際は功に傲つて奢りをきわめた。）

資朝俊基の死

しかし北条氏は疾風迅雷の処置に出ることを知らない。三僧処分ののちは又慢々的である。催促はむしろ持明院統からきた。天皇は近日中に事を発する予定である、早く退位させねば北条氏の命とりになるという恐るべき密告である。高時の面前の評議にも優柔な反対論があつて中々決定しなかつたが、ついに強硬処置をとることに決定した。まず資朝俊基の処分を決めた。翌年になつて実行されたのだが、資朝をその流謫地佐渡の守護本間山城入道に命じて切らせた。（資朝の一子、十三才の少年阿新丸が父を斬首した本間三郎を殺し旅の山伏に助けられて佐渡を脱する物語は有名だ。）次いで俊基を鎌倉に拉致した。俊基の関東下りの一節「旅館ノ燈幽ニシテ、鶏鳴暁ヲ催セハ、匹馬風ニ嘶ヒテ、天龍川ヲ打渡リ、小夜ノ中山越行ケハ、白雲路ヲ埋来テ」云々の文章は太平記中の名文で、我々も少年のころ朗誦したことがある。俊基刑死の間際に京都の夫人からの来書あり、かれは髪を切つて記念として使いの者に渡し、筆を執つて「古来一句、無死無生、万里雲盡、長江水」

清の辞世の頌を記し、首さしのべて従容として斬られた。堂々たる男性的な死である。（関東の女子は雄々しさを失わず、夫をも辟易させ、家亡ぶれば自らも刄に伏す風があつたが、京都の女子はなよなよと美しく、一夫多妻の風に屈従し、人形のごとく男子に弄ばれ、惨風悲雨の運命に抵抗する力などはもたなかつた。南北朝の争乱期に京都の女子、殊に貴族の女子の逢うた運命は悲惨であつた。俊基の遺髪を手にした夫人は四十九日の仏事ののちに髪を削つて尼となり高野山で一生を終つた。）

天皇捕わる

これより舞台は急速に大展開する。八月になると、北条氏は実力をもつて廃立を行うため二階堂貞藤に兵を率いて京都に向わせる。急を知つた天皇は京都を脱出して南都に蒙塵する。幕府軍が宮中を襲うたときはすでに、もぬけの殻である。ここで天皇は又小細工を弄して花山院師賢を天皇に扮して叡山に上らせ衆徒の心を打診せしめる。衆徒は一致して天皇側に立ち、僧兵隊が押しよせた幕府軍を破つたが、にせの天皇であることが発覚して衆心離散して大塔宮も尊澄法親王（宗良親王）も逃げ出さざるをえなくなる。南都には幕府に心を寄せる僧侶がいたので、天皇は更に峻険な笠置山へ蒙塵し、そこに籠城する。叡山を脱出した大塔宮、師賢なども集つてくる。この時すでに楠正

成が河内で行動をおこしている。幕府軍が笠置城を攻め立てる。この攻囲軍の一将に足利高氏（のちの尊氏）が居る。籠城一ヶ月弱、城中に内応者があつたため九月二十九日に陥落した。

天皇は藤房、具行、師賢の三人のみを従えて脱出し正成のこもる赤坂城をこころざしたが、ついに途中で捕えられる。田夫野人に身をやつした、小袖帷子のみという悲惨な姿で、従者はすでに数日食を口にしていなかつた。幕府軍は一時天皇を宇治平等院に入れたが、更に十月四日、網代輿にのせ六波羅に連行して鬼が出ると噂される荒れた一室に監禁した。

幕府は天皇に迫つて皇太子量仁（持明院統、光厳天皇）に譲位せしめた。このとき譲位の象徴として渡した三種の神器は偽物であつたという説があるがその真偽はわからない。田中義成氏は、突嗟の場合に偽器を与うるようなことは不可能に近く、北朝に渡した真器を南朝で偽器と宣伝したのかもわからず、又その真偽如何に拘らず譲位は事実として成立したのだと言つているのは公平の論である。

天皇配流

翌元弘二年の春まだ浅い三月七日、北条氏は後醍醐天皇を隠岐に流すことにした。あやしい網代車にのせられて六波羅より七条を西へ、大宮を西に折れて東寺の門前へとゆく天皇の一行を街上一

杯に立ちつくした群衆が涙で見送つている。増鏡はその光景を「若きも老いたるも、尼法師、あやしき山がつまで立ちこみたるさま、竹の林にことならず。おのおの目押し拭い、鼻すすりあへるけしきども、げにうき世のきはめは、今につくしつる心地ぞする」「岩木ならねば、武士の鎧の袖どもも、しほれりとぞ見ゆる」と描いている。かの北宋の徽宗欽宗両皇帝が金のために満洲へ拉送される途上で民衆が我不関焉と一顧だにしなかつたことに比べると日本と中国の民衆の君主観念には大きなひらきがある。

天皇の一行は四月一日に隠岐に到着したが、この一箇月の旅行は流謫者を送るというきびしさ、険しさがなく、むしろ悠々としており、警戒護送の武士たちはしだいにひそかに天皇に心を寄せはじめるし、路々ではねんごろに迎えられるし、承久の後鳥羽上皇の流謫の有様を伝聞している故老たちは「いにしへの御幸どもには、かうはあらざりけり」と噂し合つた。天下の人心がすでに北条氏を離れ去つた時の勢いと共に、後醍醐にはなにか人をひきつける帝王的風格があつたとおもわれる。孤島の生活は必ずしも寂寥でない。警固の武士の一人佐々木義綱が変心してひそかに天皇の味方となる。対岸の山陰の豪族中にも名和一家のごとくひそかに天皇に心を寄せるものができる。近畿で大活動をしている大塔宮からは絶えず秘密連絡がある。各地の宮方蜂起のレポは天皇の壮心をいやが上にも掻きたてる。

北条氏は天皇配流と共に、尊良親王を土佐に、尊澄親王を讃岐に流し、天皇親近の公卿僧侶を処分した。数年間秘密の宣旨を諸国に配つてあるいた好オルグ源具行は鎌倉護送の途中、近江柏原で斬られた。敷皮に座し、閑々として筆をとり「逍遙生死、四十二年、山河一草、天地洞然」と辞世の頌をしるした後に首うち落された。これも男性的な死に様である。烏丸成朝も相模早川で斬られた。師賢は下総に流されたが不幸にも此年に死んだ。いずれも壮年の貴族たちである。

大塔宮護良親王

反北条闘争はいまや陰謀の城を脱して両者の真正面からの軍事的衝突となつた。これより天下大乱となる。元弘元年のくれから同三年のはじめにかけて最もめざましい軍事活動者は大塔宮と楠正成である。落城の笠置をのがれて正成のこもる赤坂城に入つた大塔宮は、十月二十一日同城陥つたのち、吉野を経て紀州熊野に落ち、熊野より大峰を伝うて吉野や高野山に往返し、これより勇猛な将軍であるばかりでなく、政治家的手腕をそなえた偉大な戦略家の能力を発揮するに至る。かれは大和十津川の奥で豪族竹原八郎の家にかくれ（八郎は娘を親王にさしあげるほどに熱心な味方となる）そこで髪を蓄え、尊雲法親王の名を護良親王と改め、宮方の総指導者としてたちあがる。その戦略構想は全国的である。先ず令旨を各方面に下す。熊野、伊勢の武士が参加する。高野山、粉河

寺、播磨大山寺の僧徒も令旨でうごき出す。播磨の赤松円心は梟雄型の一英雄漢であるが、その子律師則祐が叡山以来大塔宮の忠実な従者として随従し艱苦を共にしている縁故もあり、これも令旨を奉じて立ちあがる。令旨のおよんだ範囲は伊豫の土居、得能、同国三島の神主祝氏、奥州の結城宗廣、関東の三浦和田三郎、又は九州の豪族にも及んでいる。新田義貞は千早攻撃軍に加わつていた際にひそかに令旨を請うたと太平記に見える。義貞の鎌倉攻陥に際して西は河内、東は奥羽の軍までが参加しており、それらがほとんど同時に鎌倉附近に集合して義貞の主戦隊に合したことなどは大塔宮の戦略によつたものであり、近畿の兵で六波羅を、四国の兵で長州探題を、九州の豪族をもつて九州探題を、奥羽関東の兵で鎌倉に向わせることが大塔宮の計画であつたと推測できる（田中義成、南北朝時代史）。

後醍醐の諸王子のうち大塔宮一人のみ捕われずに神出鬼没、軍事的にも政治的にも卓越した指導力を発揮するので「いとかしこき大将軍にておはすべし」と附きしたがうものがますます多くなつて行つたと増鏡に書いてある。

北条氏は大塔宮と正成に最も手こずつた。大塔宮を殺せば近江麻生庄、正成を殺せば丹後船井庄を与うという懸賞の全文が楠木合戦注文に出ている。元弘三年閏二月一日大塔宮のこもつていた吉野が陥落した。太平記の描くこのときの光景は僧形をすてて全く武将の姿となつた大塔宮をほうふつ

たらしめる。宮は赤地の錦の鎧直垂に、火威の鎧、龍頭の兜、三尺五寸の小長刀を脇にはさみ、今は戦死と蔵王堂の大庭に部下と共に最後の酒宴をする。宮の鎧に立つ矢七筋、頬先二個所に負傷して血が流れるが拭いもせず、敷皮の上に立ちながら大杯を三度傾ける。このとき村上彦四郎義光、馳せ来つて、宮の錦の鎧直垂物具を賜つて敵をあざむき身代りに死ぬことを申出る。宮は死なばもろともと言つて承知しない。義光は声を荒らげて「是程ニ云甲斐ナキ御所存ニテ、天下ノ大事ヲ思召立ケル事コソウタテケレ、ハヤ其御物具ヲ脱セ給ヒ候ヘ」と自ら手をかけ鎧の上帯をとく。宮は涙ながらにこれを許し、義光は二の木戸の高櫓にかけ上つて、我こそ一品兵部卿親王と名乗つて自害するそのひまに宮は天河さして落ちていつたが、義光の子義隆が追撃し来る敵勢をふせいで、これも戦死する。この悲壮な父子物語を坪内逍遙博士が琵琶歌に作つたことがある。大塔宮は高野山に落ちのびた。幕府軍は高野山に行つて宮を捜索したが、一山の衆徒が心を合せてこれをかくした。其後大塔宮は葛城山を根拠地とし、後方より千早城と連絡して正成と通じてますます活動した。

楠正成

河内金剛山下の豪族の一人楠木正成は、すでに俊基の非合法運動時代に連絡がついていたらしいが、天皇笠置籠城と前後して赤坂城を根拠地として兵をあげた。笠置城を陥した関東軍が赤坂城に

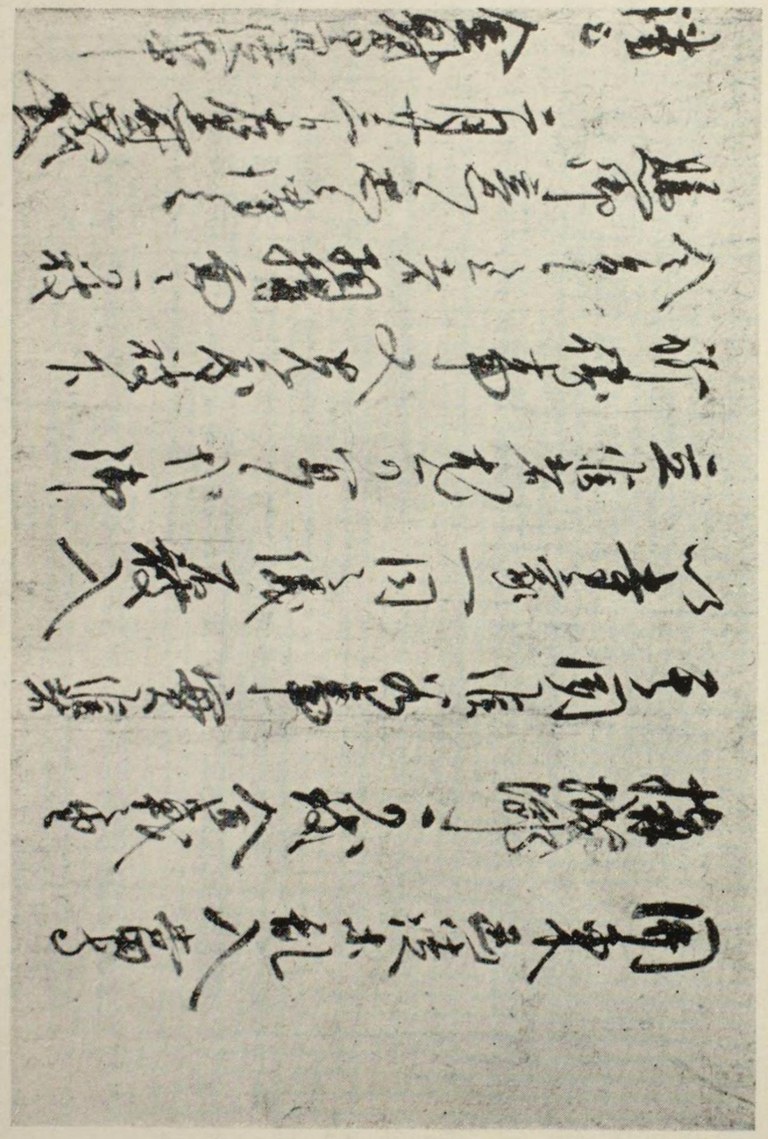
殺倒したためにここも十月二十二日に陥落した。しかし翌元弘二年春になると大塔宮と連絡して活動し天王寺に進出して六波羅軍の五千人を全滅した。この戦いで正成は兵士に掠奪を禁じたので民衆の支持が大きくなつた。さらに秋には赤坂城を奪還し金剛山の中腹に爪城（詰城、最後の決戦をなす城郭の意味）を築いた。二月一日に大塔宮の籠る吉野を陥落させた関東の大軍がことごとく千早城に殺倒した。しかるに正成の必死の防禦によつて容易に陥落しない。正成のゲリラ戦争の天才はこの時遺憾なく発揮された。関東の大軍を蕞爾たる千早の孤城に釘付けにし、全国におけるアンチ北条の諸勢力を勃興させ、北条をして拾收にいとまなからしめた功績は絶大である。北条打倒戦争の決定力となつたものは千早籠城である。

正成の先祖は奈良朝の大貴族橘氏の流れだというが、しかしそれは伝承にすぎない。彼は河内の一豪族に外ならない。当時の豪族は、自ら農業生活を営み、生産から遊離しておらず、荘園の奴隷的生活に反逆せんとする農民層の味方となつており、荘園領主に反抗するいわゆる悪党の指導者要素である。彼らは当時の社会において一の自由人的な層であり、これより自主的活動を開始しようとする農民層と心理的にも生活的にも結びついているのが非常な強みである。正成の父は播磨の大部庄にいた悪党の張本人であつたとの説がある。元享二年には紀伊有田郡保田荘々司湯浅某が乱をなしたときに正成が幕府の命令によつてこれを討伐し功によつてその地を得たこと、正成が御料所

で乱暴したこと等が高野春秋、臨川寺文書等にみえているという。いわゆる悪党は荘園領主に反抗すると同時にまたその土地慾によつて幕府の手先になることもあつたのである。正成の出身層はかようのものであつた。これは少しも恥しいことではない。

正成が軍事上の天才であることは疑いを入れない。彼は悪党層本来のゲリラ戦術に卓越しているのみならず、またそれまで経験のなかつた大会戦に当面すると、たちまちその戦術をのみ込み渡辺の一戦におけるがごとく敵の大集団を殲滅する。当時北条の軍隊は、その組織が旧式の武士軍隊で、その戦術も頼朝や泰時の当時と大差がないに反し、正成の軍隊は民衆軍隊であり、新鮮な機動性があつて重々しい甲冑で一騎打の勇を頼みにする武士軍隊には苦手である。正成は巧妙に彼の一族より成るいわば正規軍に農民ゲリラ部隊を結合する。いわゆる野伏というのは農民軍である。渡辺の一戦には和田、楠木、和泉、河内の野伏四、五千人が六波羅軍を馳け悩ました。正成の奮戦と成功とは大和、河内、伊賀、伊勢等の土豪や農民に勇気を与え、それらがだんだんアンチ北条闘争にたち上つた。正成が戦場において略奪を禁じたのは彼が民衆の生活や心理を知り又彼自身が民衆的意識をもつていたからであり、それがまた一層彼の影響力を大きくした。

正成は性格的にも一個の英雄である。戦術だけでなく明敏な政治的把握力がある。太平記の作者が不敵の心と表現しているような精神の逞しさがある。一たび天皇方に参加してから初心を変え



楠木正成自筆書狀

（金剛寺文書）

關東凶徒等亂二入當寺一、構二城塀一、可レ致二合戰一之由其聞候、若事實候者、以二寺家一同之儀一、不レ被二入立一候者尤可レ宜候哉、御祈禱事、又先度被レ下二令旨一候之上者、相構面々可レ被レ懸二御意一候、恐々謹言、

二月廿三日　　左衞門尉正成（花押）

謹上　金剛寺衆徒御中

正成の自筆文書は金剛・觀心兩寺に十點近く傳つているが、これは金剛寺文書中の一通である。年代は恐らく元弘三年であつて、關東凶徒卽ち鎌倉幕府軍が金剛寺内に亂入して城塀を構築し、官軍に抗戰するという噂があつたので、寺家一同が心を合せてこれを拒否するようにと命じ、併せて護良親王の令旨にしたがつて御祈禱を勵むよう傳えたのである。

ず、終始一貫忠誠であつたことも人間としての強さである。後に彼が湊川で壯烈な戰死をすることは周知のごとくであるが、梅松論には次のような記事がある。建武三年尊氏が九州に逃亡して宮廷ではこれを喜んでいた際に正成が「義貞を誅伐せられて、尊氏卿を召返されて、君臣和睦候へかし。御使に於ては、正成仕らむ」と奏上したので、宮廷の者たちは不思議なことをいう男だと嘲笑してこれを理解しない。正成は「君の先代を亡されしは併ち尊氏卿の忠功なり、義貞関東を落す事は仔細なしと雖も、天下の諸侍、悉く以て彼將に屬す。其証拠は、敗軍の武家には、元より在京の輩も扈從して遠行せしめ、君の勝軍をば捨て奉る。爰を以て徳のなき御事知食さるべし。倩事の心を案ずるに、両將西国を打靡かして、季月の中に攻上り給ふべし。其時は更に禦ぎ戦ふ術あるべからず、上に千慮ありと雖も、武略の道に於ては、賤しき正成が申条違ふべからず。唯今思召合はすべし」と涙を流して述べたが、採用されなかつた。これは、一見不思議な言い方であるのに相違ない。しかし大局からみれば卓越した政治的見識を含む。さらに尊氏の九州よりの東上に際しては一旦尊氏を京都に入れて持久包囲作戦をとる構想をたててこれを進言したが、長袖の貴族によつて容れられなかつたことが太平記にみえている。それも卓見である。梅松論では正成が湊川で迎え伐つ戦いが必ず破れることを予見し更にその理由として「今度は正成、和泉河内両国の守護として、勅命を蒙り、軍勢を催するに、親類一族猶以て難渋の色あり、斯の如し。況や国人土民等に於てをや。是

れ即ち天下君を背ける事明らけし、然る間正成存命無益なり。最前に命を落すべき由」を覚悟したと記している。ここには王朝政治に絶望した正成の心理、土豪の身が王朝政治家の群に入つて民衆の生活や心理から離れたことに対する悔恨の情、死を以て一切に終止符をうつ武士らしい人生観等がみえる。足利方の梅松論の著者さえ正成の死を「敵も味方も惜しまぬ人ぞなかりけり」と賞讃している。建武中興の際は摂津河内の守護や検非違使左衛門尉に任ぜられ、名和長年と共に決断所で訴訟を処理したが、頼山陽が日本外史のなかで、「正成以下は駆使に充つるのみ」と言つているように、当時の身分制度からいえば卑しい出身で足利、新田のような名門の出身でない彼は、その偉功やすぐれた能力に拘らず下積みにされたのである。革命は古い伝統的身分など一蹴するはずであるのにそうしたことがなかつた。

それは後のことだからさておいて、元弘三年の初めには近畿の正成、播磨の赤松、四国の土居、得能、九州の菊地その他が蜂起する。革命の勢いはおそろしい。「宮方ハ負クレドモ勢彌重リ、武家ハ勝トモ兵日々ニ減セリ」と太平記が書いているような光景が至るところに現れる。革命軍は野火のように拡がつてゆき、ついに後醍醐天皇の隠岐脱出となる。天皇は二月二十三日暁霧に乗じ漁舟に身を托して隠岐を脱出して出雲に上陸した。伯耆の名和長年がこれを迎え、船上山を根拠として旗あげする。山陰山陽の豪族がぞくぞくこれに参加した。やがて五月中に六波羅と鎌倉が陥落し

て北条氏の滅亡する五月が目の先に迫りつつある。この革命のクライマックスの直前の四月に突然尊氏が登場して革命の勝利を一気に決定するのである。

宮方の分析

ここで宮方を分析しておく。宮方という言葉の最初の意味は後醍醐天皇を中心として北条政府に対立する要素をさしたが、後には南朝を中心として足利政権に対立する要素を意味するものとなる。抽象的にいえば王朝政治を支持するものと武家政治を支持する者との分類があるわけであるが、しかし宮方には武士階級の要素がたくさん入つており、その実力的基礎をなしている。ここでは後醍醐天皇の北条打倒過程においてそれに参加しもしくはそれを支持した要素という意味の宮方を分析しておく。それは種々の社会要素の混成団であつて、それだけ弱身があり、北条打倒闘争にはそれで充分であつたが、一の階級勢力—武士階級—を統一する尊氏的な武家方には対抗しえないものであつた。

(1) 後醍醐天皇及びその諸王子

大覚寺統の君主は大体において反北条的であり、承久の旧怨を忘れず、ひそかに関東誅伐の意志

をもつていたらしいが、後醍醐天皇はそれを最も激しく集中的に表現した人格である。反北条運動ひいて反武家運動の大指導者としての天皇の風格については先に述べた。天皇を中心としてその諸王子が元弘より建武中興を経て南北朝の争乱のうずまきのなかで奮闘を続けた姿は悲壮である。後醍醐天皇の諸王子は太平記によると十六人、本朝皇胤紹運録によると男女合せて三十六人となつているが、その多くは兵馬倥偬のなかに駆逐し武家方の毒手にかかる者四人、多くは流離のなかに死んでゆく。善悪の批判を超えて人間悲劇的なものをそこに感ずる。第一王子尊良親王は元弘二年北条氏によつて土佐に流され、それを脱出して九州に航して肥前で兵を挙げ、北条の九州探題を討伐した。尊氏反逆後には越前金崎城で新田義貞の嫡子義顕と共に戦いやぶれて自殺した。第二王子護良親王については前にも述べたが後にも述べる。宗良親王は、護良親王の後を受けて天台座主となり、元弘の変には大塔宮と共に叡山で行動し、捕われた後には讃岐に流され、建武中興で帰還後は、また天台座主となつたが、尊氏反逆後は東海信越の軍を統卒する征東将軍となり、遠江井伊城を根拠地として長年に亘つて活動した。親王は詩人であつて勅撰新葉集を編集し又李花集の作者である。李花集の一首に、遠国に久しく住んで今は都の手ぶりも忘れはて、ひたすら弓馬の道にのみたずさわることをわれながら不思議に覚えて「思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我身なれんものとは」と詠じたとある。詩人的将軍の感懐を托した絶唱というべきである。恒良親王は十四才、成

良親王は十三才にして同時に尊氏によつて毒殺された。両親王は金崎城陥落の際に捕われ都に送られた。路上の人々はそのいたましい姿をみて涙を流した。

金崎城で義貞の死骸が発見されなかつたので尊氏らがこれを両王子に問うと、両王子は怜悧にも義貞は戦死し其の部下が火葬したとだました。間もなく杣山城で義貞が再び活動をはじめたので、尊氏は子供にだまされたと怒つて毒殺したのである。弟の成良親王は毒薬を飲むことを欲しなかつたが、兄の恒良親王が弟をさとしていさぎよくそれを仰いで二人ながら死んだのである。幼少ながら父を恥かしめざるけなげな態度である。尊氏が逆上して平常の寛濶な心を失うて幼き王子二人を手に掛けたのは何といつても残忍で弁解の辞がありえない。この逆上的態度はいかに彼がスターリンのトロッキイに対する如くに義貞を強敵として恐れていたかをも示す。義良親王は八、九才にして北畠顕家にともなわれて奥州に下りその大守となつたが、幾艱難の後に吉野で即位した。後村上天皇である。懐良親王は征西将軍となり薩摩、肥後、肥前、豊後に転戦し、博多を占領して殆ど九州を席捲した。後醍醐天皇は親王に手厚い遺書を書いている。弘和元年明国が威嚇の書をよせて来たのに対して、親王が汝に興戦の策あらば我に禦敵の図あり、いささか以て博戯せんという勇気凛々たる返書を送つたことが明史日本伝にみえている。その他の王子については略す。

(2) 公卿層

公卿層は帝室にもつとも親近してきた支配者層で、年久しく王朝政治のなかに巣食うてきたが、王朝政治はもはや権力形態として無価値となつており、武士による荘園の蚕食は公卿層の不労所得者的な経済基礎をほりくずし、武力はもちろん彼等の手中になく、ただ帝室の伝統的なイデオロギー力のかげにかくれてその貴族的地位を保つている。全体としてみてかれらは反動的な社会層である。しかし思想する力とか教養とかはすぐれている。かれらのなかからインテリ革命家が飛び出す。正中の変より元弘の変に至る過程において資朝、俊基の二人の青年貴族が他の師賢、具行らの青壮年貴族と共に果敢な北条打倒闘争をやつた。南北朝交闘期になると北畠親房が思想家にして戦略家をかねた巨人として活動する。又貴族にして劍をにぎつて立ち武将ぶりを発揮したものもある。親房の長子顕家は鎮守府将軍陸奥守となり、尊氏の叛するや奥羽の兵を率いて戦い屢々勝利を博したが、延元三年正月和泉石津で壮烈な戦死をとげた。次子顕信は兄を継いで奥羽の宮方の指導者として奮闘し、その子孫は奥羽の一勢力となり浪岡御所と称せられた。三子顕能四子顕雄は伊勢に拠りその居域は多芸御所と称せられ子孫永く宮方であつた。千種忠顕は後醍醐天皇の隱岐流謫に従い、同嶋脱出ののち山陽山陰両道の兵を率い六波羅攻めの大将となつたが、この公卿は軽卒かつ

臆病で児嶋高徳から「かかる臆病の人を大将と憑みけること越度なれ」「あはれ此大将、如何なる堀がけへも墮ち入つて死に給えかし」と罵倒された。（忠顕は建武中興になつてからは恩寵に誇つて贅沢に耽り世間のつまはじきとなつた。）この他、軍旅に従うた公卿は少くない。

しかし九条西園寺のごとき大貴族は徹頭徹尾反動的である。北条来ればこれに媚び、足利来ればこれに媚び、老獪、背信、エゴイズム、一身の栄達を計るに汲々たる醜態ぶりである。後醍醐天皇の頼みにしたのはいうまでもなく、革命的な青年公卿たちであつた。要するに公卿層は、そのなかから少数の果敢な思想家や実行者を出す可能性をもつものであつたが、全体としては権力の座からすべり落ちてゆく社会層であつた。

(3) 寺社勢力

寺院や神社、殊に叡山、東大寺、高野山等々の大寺院は多くの荘園を有する巨大地主で、農民の憎悪の対象であり、王朝政治ともふかくむすびついているところの保守的な勢力である。帝室とも因縁が深い。大寺院は僧兵団を有しおり、太平記には豪快な悪僧たちの武勇ぶりと共に、六波羅攻めの叡山僧兵団が我れ先きにと京に乱入して財宝を掠奪しようとしたことをも記している。大寺院は伝教弘法の教誡をふみにじつた非宗教的な武装した大名的存在になつていた。後醍醐天皇は正中

の変に土岐多治見などの武士の力をかりて失敗したので、寺院の武装力に目をつけ、尊良世良両親王のほか護良宗良その他の諸王子を悉く延暦寺三井寺等に入れ、南都北嶺に度々にぎやかな行幸をして僧徒の心をとりむすんだ。かつて承久の乱にも大寺院は宮廷に味方した。寺社は宮廷といわば階級的利害を共通にするから大体王朝のほうに加担した。当時の迷信にしたがつて高僧たちが宮中で関東調伏の呪法を行つたりした。しかし武家政権の勢力は寺院内にも及んでおり、内部分裂をすることが屢々ある。又六波羅攻防戦の最中に北条方より叡山に大きな荘園十三個所を賄路として寄進すると衆徒のなかで武家に心を寄せる者も多く出たという有様で、とうてい信念的な宮方ではなかつた。

(4) 武　士

後醍醐天皇は権力の奪取に軍力がなによりも必要であることを熟知する。しかるに軍力は武士階級の手にある。武士は王朝にとつていはば階級敵である。しかし何よりも欲しい軍力については武士を利用せねばならぬ矛盾がある。幸いに武士のなかには反北条的なものが少くない。守護のような大物はおのずから保守的であり、又多くの御家人はなお北条側に立つているが、北条の統制力や利益を与える力の弱まつてゆくにつれて、武士の各層にわたつて不平分子がふえてゆく。宮方とな

つた武士には次の要素がある。第一は皇室領に住んでいる武士である。正中の変で戦死した土岐、多治見はそうである。第二は源平の争覇戦のさいに平氏方であつたために鎌倉時代に沈淪せざるをえなかつた不平分子で、たとえば備前の児嶋高徳の祖先は平氏を助けたために佐々木盛綱に討たれ、子孫屈辱に甘んじてきたものである。第三は承久の乱に後鳥羽上皇の側に立ち、所領を奪われたりしたもので、たとえば伯耆の名和長年の祖先は承久の乱で王朝軍に従うために邑を失つたものであり、四国の土居得能両家の祖先河野氏は承久の際に王朝軍に属して戦死した。第四は楠正成のごとく土豪の来り投ずるものである。第五は御家人にして北条を見限るもので、太平記には六波羅攻めの以前には備前国地頭御家人も大略宮方となつたとある。これらのものの間には投機分子も少くなかつたであろう。第六に奥州の結城宗廣のごとき大名的存在で宮方になるものもできた。

以上のようにみてくれば、後醍醐天皇の側に立つ武士は雑軍みたいである。これに筋金の入つた組織を与え一の統一的意志をもつたものにまとめあげたのが大塔宮である。増鏡は「さて大塔宮の令旨とて、国々の兵をかたらひければ、世にうらみあるものなど、ここかしこにかくろへばみてをるかぎりは聚りつどひけり」と記す。世を恨んでここかしこに潜んでいたものが大塔宮を「いとかしこき大将軍」と尊敬して忽ち集り出したのである。

太平記は六波羅攻めの戦闘記事のなかで興味ある人物を描いている。宮方の陣中から頓宮又次郎

大道ほか三人が飛び出して敵をさしまねいて戦闘を挑み「我等父子兄弟、少年ノ昔ヨリ、勅勘武敵ノ身トナリシ間、山賊海賊ヲ業トシテ、一生ヲ楽メリ、然ニ今、幸ニ此乱出来シテ、忝クモ万乗ノ君ノ御方ニ参ス」と名乗り、力闘して勇ましい戦死をする。少年の頃より山賊海賊をして一生を楽しんだとか、今幸いに此乱が出来たなど言うているところはおもしろい。かれらも一の不平分子であつたと共に又型の変つた自由人でもあつた。こうした要素も味方に参加したのである。

こうして宮方に集つたのは最初は下級武士、ついで中級武士、最後に九州の大友少弐、尊氏、義貞のごとき高級の名門の武士が加わつてくるのである。投機的分子や日和見主義者が少からず含まれている。かれらは王朝政治を讃美するから集つたというよりも、むしろ北条の統制力の弱化や、北条的社会秩序の崩壊からして、一時の連合軍となつて王朝に属したのである。元弘三年春にはその勢いは巨石の山上より転がり落つるが如くに悽まじく、天下まさに鼎の沸く如くになつた。

(5) 農民

この時代の農民がいちじるしい自主的活動力をもつてきたのは前述した。被搾取者であるかれらが直接に対立するのは荘園領主や新興の大名的領主や幕府の権威を笠に着る地頭たちである。下層の武士はむしろ農民の味方である。王朝方には搾取者たる荘園領主もいる。しかし下層の武士や農

村の大衆が実際的もしくは心理的にむすびついたのが宮方のほうであつたのは興味がある。西欧の歴史にもみられたことだが、実権のない帝王と下層の労働大衆が中間の領主層をとびこえて心理的にむすびつくのは封建社会における一つの法則である。それがこの時代の日本にもみられた。領主層は帝王の権力を無力化せねばならぬし、又労働大衆の自由をできるだけ剝奪せねば安全に搾取をおこなうことができない。帝室は民族宗教的な、もしくはローマ法王的な理念力をもつている。歴代の天皇は抽象的なきまり文句であつても民のかまどの賑うようにという意味の和歌をつくりつづけている。領主の搾取になやむ大衆は家族主義によつて養われた感情からも何か帝室に救済力がありそうな気になる。実際上、南朝が交通不便な吉野の山奥から半世紀に亘つて反足利軍を動員して武家方を奔命に疲らしたのは、利害関係から帝室にむすびつく武士要素や大土地所有者たる寺院の僧兵よりも、下層の農民の意識的無意識的の支持や、農民層から遊離していない下級武士の層であつた。正成などもそうした出身者である。さりとて宮方もまた革命的要素ではない。その背後にはあまりに過去がありすぎ、古くなつた伝統の重荷がある。かれらもまた農民の救済者ではなかつた。

Ⅳ、尊氏の登場

関東軍弱し

元弘三年春になると、宮方に参加する武士が諸国に蜂起して手のつけられない状態となる。大塔宮は二月に吉野城に破れたが、吉野十津川のほとりで農民ゲリラ隊の野伏七千余人を集めて千早城を攻囲する関東軍の補給路を攪乱する。それだけでなく宮は令旨を全国に飛ばして有力武士の蜂起をうながし、各所の散発的な運動を統一的な全国的戦略の下で綜合して革命軍の総指揮官ぶりを発揮している。三月には後醍醐天皇が隠岐を脱して船上山に根拠地をきずくと山陰山陽の豪族がぞくぞく参加する。四国の土居、得能が行動をおこす。三月には九州の菊池武時が蜂起する。播磨の赤松円心も果敢に行動しはじめる。正成は関東の大軍を千早の孤城にひきつけ釘付けにして奇兵戦術でそれを翻弄している。

高時は北条一族と坂東八ヶ国の大名や北陸道七ヶ国の兵で大討伐軍を編制して近畿地方にさしむけた。しかし関東の兵は天下の兵に敵すという昔風のうぬぼれは今はもう通用しない。その高級武士的戦法は下級武士や農民ゲリラ隊をまじえた王朝軍のまえには却つて右往左往させられるのみな

らず、関東武士の武勇は今は精神力をかいた単純な肉体的暴力になりさがつている。軍律も弛緩している。千早を攻めあぐんだ関東諸大将の陣中では江口神崎の遊君どもを呼びよせて酒宴にふける有様である。名越遠江入道という大将とその甥兵庫助が遊君のまえに雙六を打ち骰子の争いから喧嘩となつて刺し違えて死し、両人の郎従どもが又意趣もないのに互に討ち合つて一時に死者二百人を出すなどいう馬鹿らしい事件も発生する。かつて承久の乱に泰時が疾風迅雷のごとく事を五十余日で解決したような能力はもう関東武士になくなつている。

尊氏の出身

かかる瞬間に、高時から懇切に討伐出動を依嘱された関東の大名のなかから一大叛逆者が現れて忽ち北条の天下をひつくり返すに至る。而もその人は北条滅後の政治の決定的な指導権をにぎつてしまう。大塔宮や正成が苦心惨胆して作り出した成果を鳶が油揚をさらうようによこどりする。その人物こそ足利尊氏である。かれは北条の外様大名のうちの大族で、元弘元年九月には後醍醐天皇のこもる笠置城攻めに参加し更に赤坂城攻陥にも参加したことがある。元弘三年二月に高時から再出陣の懇命をうけ、故郷下野を出立したのだが、途中より密使を後醍醐天皇に送つてその綸旨を申しうけ、四月に至つて叛旗をひるがえし、京都における北条の牙城たる六波羅を攻め落し北条の運命の

石を一挙に谷底に蹴落した。革命のクライマックスの瞬間に彗星のごとく登場する狡智、水も洩らさぬ細密の計画、眼前の成功に酔わず冷静に而も自己中心に事態を処理する能力、容易に見すかされない利己主義、将来の事態を展望する直感力や政治家的な構想力、こういう才能が人間の意志や感情の極度に沸騰した北条滅亡直前の情勢のなかで二十九才の尊氏によつて遺憾なく発揮された。

尊氏の出身を一瞥する。当時の社会構造は封建社会特有の身分制を根幹とし上下関係がきびしい。古代的な大氏族制の伝統も残つている。又武士特有の強者崇拝の原則が支配する。だから武士の名門は、全国の武士から自己の階級的代表者として尊敬される。尊氏はかような名門に生れた。かれの遠祖は、武士の崇敬を一身に集めた清和源氏八幡太郎源義家である。義家の子義国に二人の子があつて、長男義重は新田氏の祖となり、次子義康は、下野国足利に住んで足利氏の祖となつた。新田氏は頼朝の旗挙に観望的態度をとつたため頼朝に冷遇され、鎌倉時代を通じて不遇であつたのに反し、足利義康の子義兼以下は世々北条氏と通婚し、畠山、和田、三浦などの頼朝直属の名族が北条氏によつて殲滅されたに反し、足利氏だけは源氏の流れであつたに拘らず好遇された。それだけ足利氏は北条氏の意を損せざるように慎重な要領よい態度をとつていたのだが、実は足利家には北条氏を打倒して天下を握るという伝統的な野心があつた。足利氏の家に先祖義兼の置文（遺書）なるものがあつて、我れ七代の後に再び生れて天下の権を執らんと記してあつたといわれ、尊氏の祖父家

時は時未だ到らざるを嘆き八幡宮に願文を捧げ、我命を縮めて子孫三代の間に大願成就せしめ給えと禱つて自殺した。

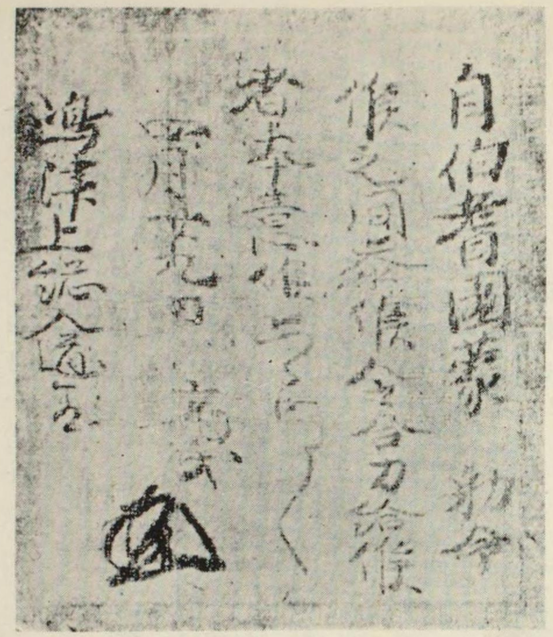
尊氏も一家の伝統をひそかにうけついで「我は源家累葉の貴族なり、王氏を出でて遠からず」という誇りをもち、頼朝の家人にすぎなかつた北条氏の下風に立つことを不快とする。しかし足利氏の伝統的政策にしたがつて北条の一族でその重臣たる赤橋守時（時政七政の孫）の妹登子と結婚して嫡子義詮を生ませている。一家伝来の野心があつても、太平の続く世であつたならば、かれは家庭の幸福、一族の尊敬、農民から搾取する物質的富のうえにねむつて平凡にして満ちたりた生活を終る一貴族であつたろうに、天下の騒乱はこれよりかれを野心の鬼たらしめ、その天禀の明敏、高貴、寛活なる心性は権謀術数主義のためにゆがめられ、叛変に叛変を重ね、人を売り、天皇をペテンにかけ、王子を毒殺し、実子と戦争し、弟殺しまで敢てせねばならなくなる。しかもかれは此間に客観的にみて当時の何人も肩をならべることができない巨大な歴史的役割を果たす。

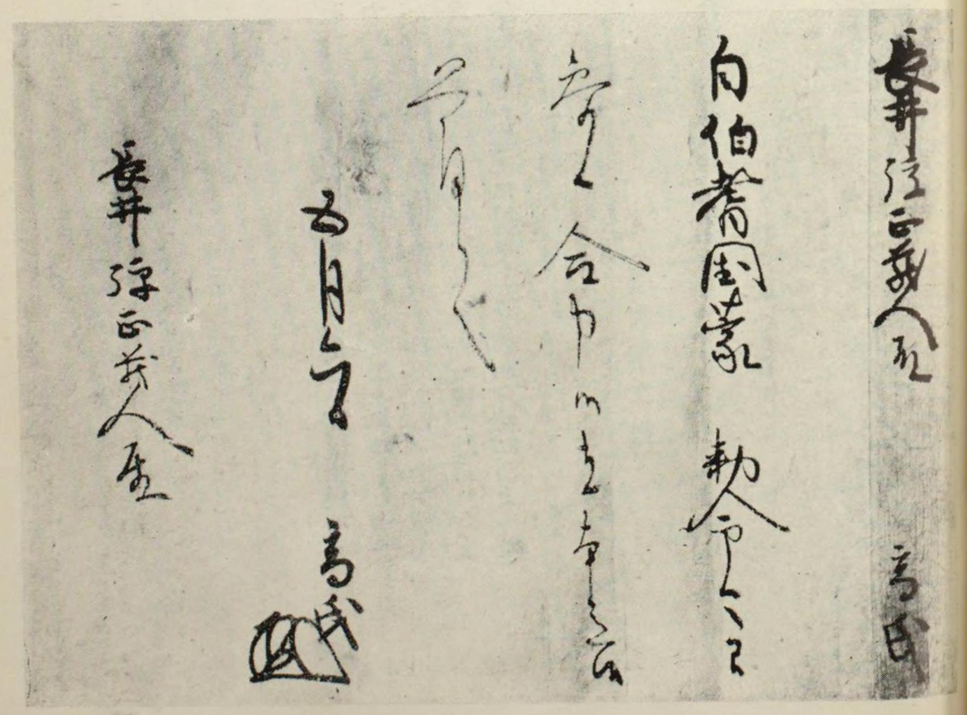
尊氏叛す

高時は京都急なりとの報をうけて元弘三年三月、尊氏に出兵を命じ名越高家と連合して伯耆船上山の後醍醐天皇の行在所を襲うことを指令した。時あだかも尊氏の父死して未だ三月の喪をすぎな

いのに高時はやたらに催促して尊氏を心中深く憤らせる。天下の情勢から察して北条滅亡のほかなしと判断した尊氏は此時からすでに叛変を決心し、母の兄上杉憲房と弟直義とひそかに相談する。天成のマキアヴェリストたる直義は大賛成である。憲房又然り。この時かれは一族郎等のみならず幼稚な子女まで同伴して出立しようとしたので幕府から怪しまれて人質を残してゆくように要求される。かれはこれをも深く憤るが、遠謀と冷血をかねる直義に勧められて、平然を装うて誓紙を与え、妻と嫡子千寿王（義詮、四才）を妻の実家赤橋守時のもとに人質としてあずける。愚かな高時は大に喜んで源家重代の白旗のほか、馬、鎧太刀などを尊氏に与えた。（これより以後二十年、冷酷な策謀は常に弟直義が立案し、尊氏これに従うというかたちが多い。しかし尊氏はそういう形を装うたのである。直義も深酷したたかな性格をもつ一英雄であるが、尊氏の方がうわ手である。最後に直義が尊氏から毒殺されたのは、弟が兄を種々手こずらせたからであつたにしても、もう直義に用がなくなり却つて邪魔物になつたからである。）

尊氏は途中三河の矢作から腹心の細川和氏、上杉重能を後醍醐天皇のもとに密行させて北条討伐の綸旨を請うた。天皇は将来この男から苦しめられることになるのだが、最高級の大物の帰順だから大喜びする。密使は近江の鏡宿で尊氏とおちあうて綸旨を渡す。尊氏は何食わぬ顔で京都に入り、久我縄手の戦いに味方の大手の大将名越高家が赤松円心の軍に苦しめられ、高家はついにゲリ





足利高氏自筆軍勢催促狀

（島津家文書）

自二伯耆國一蒙二　勅命一候之間參候、令二合力一給候者、本意候、恐々謹言、

四月廿九日　　高　氏（花押）

嶋津上總入道殿

元弘三年四月高氏は隱岐から伯耆に歸られた後醍醐天皇に歸順した。そこで彼は諸國の武將等に宛てゝ右の次第を告げ、自分に合力して鎌倉幕府討伐の戰に從うよう勸誘した。その文書は數通傳つているが、こゝにあげたのは薩摩の島津貞久宛のものである。全文高氏の自筆であつて、布地に書かれている。寫眞は原寸大であるから、當時一般に行われた文書から見ると極めて小形である。これは戰陣の間を隱密に携行する必要から特にかような形を用いたのである。（寫眞上）

足利高氏自筆軍勢催促狀

（毛利家文書）

自二伯耆國一蒙二　勅命一候之間參候、合力候者本意候、恐々謹言、

五月六日　　高　氏（花押）

長井彈正藏人殿

これも元弘三年高氏が歸順後、その次第を諸將に告げ協力を求めた一通である。同じく全文高氏の自筆である。（寫眞下）

ラ隊の一弓手から射殺されたのに、軍馬の煙り、鬨の声の響きわたる最中に、搦手の大將たる尊氏の一行は桂河のほとりに腰をおろして悠々と酒盛りをして傍觀し高家を見殺しにする。六波羅ではこの報を得て水魚の思をなせる足利殿すら敵となつたかと喪心自失する。

尊氏は軍を率いて丹波に入り、篠村八幡宮の社頭に立つてはじめて公然叛旗をひるがえし、柳の大木に旗を懸け、願文を納め、ここで乾坤一擲の大賭博に着手する態度をあきらかにした。丹波にはかれの領地があり、京都攻擊に都合よき地勢であり、又同國に集團する千種忠顯の率いる山陰軍の指導權に手を出すことも彼の計画である。この八幡宮は今は村社で寂れているが、鎌倉時代以來源氏緣故の神社として栄えていた。尊氏は自ら願文に判をすえ、上差の鏑矢一筋をとつて宝殿に捧げると、弟直義をはじめ、吉良、石堂、仁木、細川、今川、荒、高、上杉などの叛骨隆々たる將士どもが我も我もと上矢一つずつを献じて謀反を誓い合つた。武士特有の信仰心と非常の謀反心理がむすびあうて熱狂的な行動慾が軍中に燃えあがつた。尊氏は抜け目なく其場から密書を諸国の豪族に送つて北条打倒運動に引きいれる工作をする。田中義成氏の南北朝時代史によると、此時の密書は東は奥州より西は九州に至るまでも今も諸家の文書に散見し、その実物は方三、四寸位、紙又は絹に書かれ、なかには方一寸くらいの小さいものがあり、使者が髪や衣服の縫目に入れたものだという。尊氏の遠大な志、政治家的機敏、周到な計画性が早くもここに現れている。北条打倒の大業

が尊氏一人の力で成しとげられたような印象を与へ、全国の武士はよろしく尊氏を中心とすべきだとの要請をふくんでいるのである。

尊氏の六波羅占領

五月七日、北条勢は尊氏、千種忠顕、赤松円心の連合軍に散々に打ち破られ、泰時以来の王朝監視機関たる両六波羅がここに亡ぶことになる。両六波羅の探題北条仲時及び時益は七日の夜半に持明院統の後伏見花園二上皇、光厳天皇を強制的に伴うて鎌倉へ向つて脱走を企て、時益は早くも途中で殺され、一行は勢多の橋を渡るころに夜が明けたが、前途をみれば守山あたりから野伏が充満し、その射かけた矢が天皇の肱に立つたりした。太平記では「鈴鹿川のほとりの山立強盗盗者共二三千人」、梅松論では「近江、美濃、伊賀、伊勢の悪党ども」が一夜のうちに馳せ集つて旗をあげ、楯を突きならべて、この地方に流遇していた亀山天皇の王子五辻宮守良親王を大将として一行の道の前に立ちふさがつた。これらは下級武士や農民ゲリラ隊のことで、それを当時の支配階級の言葉使いにしたがつて太平記や梅松論の作者が盗者とか悪党とか呼んだのである。かれらが大覚寺統に好意をもつていたことが知られる。五月九日、ついに近江番場宿で仲時以下四百三十二人が切腹してしまう。その氏名は蓮華寺過去帳にある。天皇や上皇は、忽ちできたこの死人の山を目の前にして

心も身にそわず、呆然としてふるえているところをゲリラ隊に捕えられた。ゲリラ隊は三種の神器をとりあげて五辻宮に渡し、天皇や上皇の身柄を京都に送り返した。

「一旦叛旗をひるがえしたのちの尊氏は、頭脳明敏、思慮周到、絶倫の精力をもつて活動した。かれは六波羅を攻陥するや、ただちに奉行所を設置して、みずから政務の執行者となり、北条氏に代つて京都の治安行政の主人として振舞つた。彼はそこで諸国の武士の着到を受け、訴訟を受理し、地方武士に与うる自己の軍令書を御教書と称し、各地から戦況報告書を提出させ、捕虜の処分を命ずるようなことをやつた。既存の政治機関が瓦解すると必然に一時無政府状態が発生する。京都めがけて集つてきた武士団は宮方といえども掠奪や凌辱をはたらく乱暴者どもである。尊氏はきびしい態度で市中の治安を維持した。大塔宮の股肱たる候人殿法印良忠の手の者が市中の土蔵を破つて財宝を運び出そうとするのを捕えて死刑に処した。それは大塔宮を怒らせたが、尊氏の威風と降服者を濫殺せざる寛宏な首領タイプは、武勇逞しいが智恵の足りない荒武者どもから忽ち崇拝され出す。名門ということも武士どもにとつて一つの魅力である。それだけでなく丹波篠村挙兵以来のかれの計画的活動と此間に示した風格はかれを忽ち動かすべからざる隠然たる大勢力とした。賭博の第一石は今や大当りである。

元来尊氏は王朝政治に特別の興味をもつものでない。かれの理想は頼朝のごとく征夷大将軍とな

り、いわゆる武家の棟梁、すなわち武士の階級的代表者となつて、王朝とかかわりのない武家政治を復活するにある。政治は民の生を安んずるにあるという北条氏の理想やよき経験を学ぶ意識も尊氏にある。かれが六波羅の旧官吏長井氏小国氏等を採用して刀筆の吏として使つたことも政治家らしい用意である。（後にかれの作らせた建武式目の巻尾に署名している八人の明法家や学者には前王朝系のものを含み、又八人のうち四人までが旧北条政府の評定衆たりしものであつた。後出。）

新田義貞の鎌倉攻陷戦

京都六波羅の陷落と相前後して関東方面にも大変がおこつている。すなわち新田義貞を中心とする鎌倉襲撃計画が着々と進行した。義貞は元弘三年三月、千早城攻めの寄手に加わつていた際に執事船田入道と相談して大塔宮方の野伏数人を捕え、これをわざと放つてひそかに宮の令旨を請わしめたが宮は義貞が大物であるゆえに令旨でなく綸旨形式の命令を与えた。おそらくこのさい鎌倉攻略の秘密の打ち合せもあつたであろう。義貞は千早より撤兵して故郷に帰りその準備を整えていたが、五月八日になつて挙兵した。しかし天下の覇府たる鎌倉を攻陷し北条氏の息の根をとめてしまうことは新田一族いかに勇なりといえどもそれだけでできることでない。鎌倉攻撃軍に奥州や関西の武士が加わり而も同時に鎌倉附近に攻撃軍の集結の行われたのは大塔宮の戦略指導のために外な

らない。

この時も尊氏は抜け目なく振舞う。すなわち鎌倉の人質から脱出した長子義詮を足利軍の大将として攻撃軍に参加せしめている。鎌倉は五月二十二日に至つてついに陷落した。北条氏の最後は大体において男らしかつたといつてよい。尊氏の妻の兄赤橋守時は先んじて十八日に戦死して北条氏に謝罪した。長崎次郎其他の勇士の最後の奮戦や高時と共に八百余人が葛西谷で切腹する光景は鎌倉武士の名を恥かしめない。京都の婦人が夫の国事に死するや、たいてい尼となるのに反し、鎌倉の婦人は或は夫の与えた刀をもつて胸を刺して死し或は幼児を抱いて入水するなど悲壮である。

北条の本拠たる鎌倉を一挙攻陷した武勲の第一は、なんと云つても一族全滅を賭して体当りの勇を奮つた義貞である。しかるに攻陷直後に妙な現象がおこつた。攻撃軍の諸将士が武勲赫々たる義貞に属すると思いきや、そうでなくて、四才の義詮のもとに続々集つたのである。そのため新田軍と足利軍との衝突がおころうとした。足利方の細川和氏、頼春、師氏の三人兄弟が義貞の陣所にのりこんで勝負を決せんと申入れたが、義貞の譲歩によつて事なきを得た。尊氏はスターリンの如く慎重なる布置をする　かれは軍略だけでなく政略によつて他人の功を奪うこともする。鎌倉攻囲軍に義詮を派遣して発言権を確保しておこうとした尊氏の政策は予期以上の効果を收めた。後に尊氏と義貞とが恰もスターリンとトロツキイの如く争い、そして尊氏がスターリンのトロツキイを圧倒

した如くに義貞を圧倒したのは、スターリン同様にマキアヴェリ的政治手腕においてはるかに義貞にまさつていたからである。尊氏と義貞が死闘する宿命は鎌倉攻陷の際よりはじまるのである。

天皇の凱旋的帰還

船上山の後醍醐天皇の根拠地には尊氏、千種忠顕、赤松円心らの早馬の六波羅占領の報が到着して歓声があがつた。長袖の公卿連中はまだ帰るのは早いと躊躇したが天皇は断乎として帰京を決定した。塩冶高貞は千騎を率いて前陣、名和長年は帯剣の役　金持大和守が錦旗の旗手、朝山太郎が五百騎で後陣、堂々たる武装で五月二十三日船上山から出発した。五月二十七日播磨書写山で赤松円心父子四人の出迎をうけている際に、鎌倉陥落を報ずる義貞の早馬が到着する。六月二日兵庫で正成が七千の兵をもつて出迎える。天皇の感謝の言葉に正成が感激する。

六月六日に天皇は京都に入つた。尊氏、直義、正成、長年、円心、土居、得能、結城、長沼、塩冶などの殊勲の将士が数千の軍兵をもつてつきしたがう。堂々たる示威運動、花やかな観兵式のようである。増鏡は「先陣は二条富小路内裏に著せ給ひぬれど、後陣の兵は東寺の門迄続控へたるとぞ聞へし」とその光景を伝えている。天皇の得意想うべきも、行列の将軍連中はそれぞれちがつた打算をしている。なかんずく尊氏は虎視眈々として早くも次ぎに展開する闘争を頭に描いている。

多くの諸将は目の前にぶらさがつている恩賞のことを先ず思い浮べたであろうが、尊氏の心中に往来するものは武士勢力と王朝勢力との決戦という困難な歴史的課題であつたろう。もう一人、この困難な問題を直視して深憂を感ずる聰明の人がある。それは正成だ。尊氏の意志は武士大衆一般の支持をうけるに足るものではある。しかしその前途は決して平かでなく無数の敵がいる。

ところが革命の大指導者であつて勲功ならびなき大塔宮は帰つてこない。宮は志貴の毘沙門堂に腰を据えて諸国の兵を集め武器を磨き新しい合戦の用意をしているという報道が伝わつてくる。赤松円心はじめ諸国の武士の馳せ参ずるものが多い。成功に酔うている天皇はこの報に驚いて宰相清忠をつかわして呼び戻し且つ再び僧形に返つて天台座主になれとの意を伝える。大塔宮これを笑うて、尊氏こそ今後の大患をなすものである故にこれを誅伐するつもりであり且つ再び坊主になるのは御免であり、軍力をもつて王朝を守るのだと答える。天皇は尊氏誅伐のことは堅く禁じ、宮を征夷大将軍に任ずることになつた。そこで大塔宮は前陣後陣数千の武士を従えて堂々として入京する。後醍醐天皇の配流、光厳天皇らの捕われ姿の入京、さまざまの光景に見なれた京都市民も、天台座主たりし大塔宮が将軍宣旨を蒙つて甲冑を帯し隨兵を具して入京する姿を「珍らしかりし壮観」として目を見張つた。尊氏の前面には最大の強敵が現れた。大塔宮との対決こそ尊氏の第一に解決せねばならぬものとなる。

革命の勢いは全くすさまじい。尊氏が丹波篠村で叛変したのが元弘三年四月下旬、義貞が挙兵したのが五月八日、そして早くも五月七日に六波羅が陥落し、五月二十二日に鎌倉が陥落した。五月二十五日には九州探題北条英時が少貳大友の兵に攻められて一族郎従三百四十人と共に切腹して滅亡した。長門探題北条時直は同じ頃に降服した。北陸方面の北条代表者も亡びてしまう。北条氏のもとに猛将勇卒の少くなかつたに拘らず、尊氏義貞の挙兵と共に櫛の歯の欠けるようにあつという間に滅亡してしまつた。知性なき単純の軍力がいかにはかないものか、軍力の裏づけにいかに正しい政治が必要であるかの教訓がここにもある。しかし北条氏の迅速な滅亡はそれに先立つ長い革命運動の賜物にほかならない。これで社会発展の邪魔物になつていた北条政府はとりのぞかれた。これより南北朝革命時代の真の課題―王朝勢力と武家勢力との決闘がはじまつてくるのである。

V、建武中興渦中の尊氏

龍頭蛇尾、建武中興の悲喜劇

元弘三年六月六日、後醍醐天皇は得意満面、威風堂々として帰洛し、諸国の武士もぞくぞく京都に集つた。平和の回復をよろこぶ市民や他国から入りこむ商人のために急激に人口が増加し、富もまた集つてこの古い都に生気がみなぎつてくる。これからどんな新しい政治がはじまるかと人々は期待と好奇心で見まもつた。天皇親政のいわゆる建武中興がはじまつてくる。

しかし正中の変（一三二四年）から元弘三年（一三三三年）までのほぼ十年の歳月の間に多くの人々の言語に絶した辛苦と数しれぬ流血であがなわれたこの建武中興の内容の何と貧弱なことか。うずまく物質慾と利己主義、浅はかな思いあがり、瞬間的な快楽主義、わがままな不平と驕慢との衝突、人民の倍加された苦痛、そして又新しい戦争。それは何よりも他人の責任でなく、表面の勝利者たる公家貴族の内部の弱さ、政治能力の完全な喪失、不謹慎、エゴイズムにもとづくものであつた。豪邁な後醍醐天皇も本質においては長い王朝政治の腐敗の泥沼から抜けきれないことが示された。何よりも悲しむべきは政治家的な構想力の欠乏と、これまでのながい非合法運動時代の権謀術

数的な小手先き芸から脱却していないことであつた。

建武中興には大化改新の中大兄王子や明治維新の当事者のもつていたような社会的綱領や若々しい健康さが見当らない。おほらかさよりもむしろ陰影の方が多い。天皇の思想的教師であつた北畠親房の神皇正統記をみても民を安んずるを政治の根本とすという抽象論はのべられているが、建武中興そのものにおける具体的な革命的綱領や現実計画の一片の記述もない。天皇は、朕の新儀は未来の先例たるべしとの盛んな意気ごみを示したが、貴族や武士の搾取にくるしむ廣大な農民大衆の要求に耳を傾けたりそれに応ずるというところは少しもない。大衆は論理的に思考しないが本能的に本源的なものを知る能力をもつており、たいていその判断は外れない。反北条闘争のなかでこれまで帝室を支持してきた民衆はもはやそれが頼みにならぬことを知るようになる。これは武士の心を失うよりももつと恐ろしいことであつた。真の革命力とむすびあいえなかつた建武中興はとうぜん真の革命でなかつた。だから二年にもみたぬうちに龍頭は蛇尾となり、やがて消滅してしまう。

天皇が新政第一歩にまず手をつけたのは恩賞事項であつた。このことは、建武中興の本質が理想主義よりも利益主義を本位とするものであつたことを示唆する。土地は当時の最も重な生産手段であるから、それを所有するものは富だけでなく権力をも所有することを意味した。それはまた当然に農民搾取者たることをも意味する。公家層も武士に劣らず土地にたいして貪欲である。天皇は新

政早々、持明院統をもふくんで帝室の所領の拡大や安定を計つた。北条高時（即ち北条本家これを徳宗といつた）の所領は帝室御料に、高時舎弟四郎の所領は大塔宮のものに、大仏堂陸奥守のそれは准后のものになつた。太平記は「五十箇国ノ守護、国司、国々ノ闕所、大庄ヲハ、悉ク公家被官ノ人々拝領シケル間、陶朱カ富貴ニ誇リ鄭白ガ衣食ニ飽ケリ」と記し、又関東の所領を「サセル事ナキ郢曲妓女ノ輩、蹴鞠伎芸ノ者トモ、乃至衛府諸司官女僧マテ一跡二跡ヲ内奏ヨリ申賜ハル」という無秩序ぶりである。

天皇は論功行賞として尊氏を武蔵常陸下総、直義を遠江、正成を摂津河内、長年を因幡伯耆のそれぞれの守護に任命した。新政早々に恩賞方という政治機関が設けられ、将士の勲功に応じて土地を賜与する仕事をはじめたが、一向はかどらず、不公平が多くて紛糾する。諸国の武士の大部分が帝室に附いたのは、自己の階級代表者北条政府をもはや恃むに足らずとして見限つたからで、王朝への忠誠よりも土地慾をみたすことが本来の目的であつた。軍忠を申立てて恩賞を請うもの数知れず、ほんとうに軍忠ある者が詔わないでいると賞せられず、軍忠なきも後宮に賄路をおくつてうまく運動する者は賞を得る乱雑さであつた。軍功のずばらしかつた赤松円心は僧体だからというので今までの播磨守護職をとりあげられ僅に同国佐用庄を与えられた。（円心怒つて後に尊氏方となつたのもむりでない。）偽の綸旨を作つて土地を欺きとるものも出てくる。梅松論に「記録所決断所を

置るるといえども、近臣臨時に内奏を経て非義を申行間、綸旨朝に変じ暮に改りしほどに、諸人の浮沈、掌を返すが如し」という拾收すべからざる状態が現われる。

新酒は旧嚢に盛りえないように、新しい国家には新しい政治機構が要る。それは革命当事者の政治手腕のテストとなるもので、又革命の成否を決定する。しかるに王朝貴族は、久しく政治の実際から離れ政治とは宮廷の儀式や叙位叙勳のことだとしか心得ていなかつたのだから、俄に能率的な政治機構を考案する力がない。天皇は記録所、雑訴決断所、侍所などの設置、国司制度の復活などやつたが、それらは旧王朝政治の復元が根本になつている。尊氏は恩賞第一とされているに拘らずそれらの機関から注意ぶかく除かれている。決断所には正成等が実務をとり、侍所の長官は義貞である。尊氏の心中おだやかならぬことが察せられる。国司制度の復活も事実上しだいに成立してきている大名領地制を無視することができず、国司と守護をつきまぜた変態的なものであつた。

天皇は元弘三年のくれから内裏建設の大土木工事を命じ諸国の正税二十分の一をその費用に徴收した。戦乱に苦んだ民衆のために税を軽減することこそ必要であるのに逆に重税を課した。成金が大邸宅を新築する心理に似ている。又天皇は紙幣を発行した。それは元をまねたのであろうが、元の紙幣発行は兌換を一切考慮にいれず、ただ紙きれを強制通用させたのだから大インフレをひきおこし、民間の経済を大混乱におとしいれ、その衰亡を早めたものである。天皇はその真似をしたの

である。

武家政治の急激な浚落と王朝政治形式の復旧とは当然大きな社会的混乱をまきおこした。公家は我こそ新支配者だという錯覚をもつて傲慢の振舞が多かつた。千種忠顕は高級貴族の生れながら少年時代から博奕にふけつたりする不良児であつたが、六波羅の討手に上つた功労のため大国三個国　闕所数十個所を賜与されたので俄成金となり、家人共と毎日大酒を呑み、数百騎をひきつれて内野北山辺を狩りしてまわる。硫黄嶋の配流から呼び戻された文観僧正は、功を誇つて財宝を倉に積み、武具を集め、文観僧正の手の者と称する五六百人のあばれ者を養い、参内のときには輿のまわりを数百騎で警固させて路次を横行する。公家のなかには俄に武芸の練習をはじめるものがあるが、かれらの犬追物は弓もひきえず、落馬の数は矢数よりも多いなどと市民の落首で嘲笑されたことが建武年間記に見えている。天皇の寵愛を一身に集めた淮后新待賢門院蔵原廉子は盛に賄路をとつて恩賞の秩序を乱して武士を怒らせ、親近の召使に土地を濫与し、尊氏から收賄して大塔宮を天皇に讒言したりした。天皇の奢侈を諫めて不興を買つた万里小路藤房は絶望して遁世し家を捨てて踪跡をくらました。天皇は驚いて捜索させたがついに行方が判らなかつた。

この有様のために武士の間に不平と憤懣がひろがつてゆく。武士には、自分たちの実力があつたればこそ北条打倒をなしとげえたのだという自信があり、又莫大の恩賞があるものと期待して天皇

の軍に加わり且つ戦後に京都に集つてきたのである。しかるに思いあがつた公家たちは武士を奴僕扱いにして青侍のごとくこき使う。恩賞の訴訟については、或は決断所が本主の所有権を認めたかとおもうと、内奏がそれをくつがえして他人に与え或は所領一所に四五人の所有者があるような判決が下つたり、或は偽綸旨が現れたり、建武年間記の二条河原の落首に「本領離る訴訟人、文書入たる細葛、追従讒人禅律僧、下剋上する成出者、器用の堪否沙汰もなく、洩るる人なき決断所」とあるように、決断所の権威は地に落ち、てんやわんやの騒ぎである。武士は不安にかられ、憤怒が一般となり、「今ノ如クニテ公家一統ノ天下ナラバ、諸国ノ地頭御家人ハ、皆奴婢雑人の如クニテアルヘシ」と恐れ、そこで「アハレ如何ナル不思議モ出来テ、武家四海ノ権ヲ執ル世ニ又成カシ」（太平記）と切望するようになつた。

かれらは新しい首領を求めた。そして尊氏を発見した。尊氏もとより頼朝復興を最大の念願としている者である。武士大衆の間の不平不満こそ彼の幸運をみちびき出す。彼は武士の間に潮の満つるように不平不満の高まつてゆくのを待つた。又それを挑発し煽動した。新しい首領としての自覚が野心の焔を燃やす。しかし大塔宮や義貞のような強敵が居る。建武中興のてんやわんやの渦中で彼は静かに時の熟するのを待つた。

ここで後醍醐天皇の失政を改めて数えあげるのも忍びないことだが、次のことがあげられる。第

一は尊氏をあまり信任しすぎたことである。尊氏はもと高氏といつたが、天皇は諱の尊の一字を与えて尊氏としたほどである。それほど好遇したに拘らず、後に尊氏によつて吉野の山奥まで追いこめられた。第二は大塔宮を疎外したことである。大塔宮も思いあがつて帰洛後は盛に私兵を養い部下のなかで辻斬のような乱暴をはたらくものもあつたらしいが、実際上、宮は王朝方の最大の指導者であつたのに、これをむざむざ尊氏に渡し、直義から殺される破目におちいらせた。第三は恩賞の混乱である。前記の赤松円心事件にそれが典型的に現れている。第四は内謁即ち後宮の婦人の口出しによつて政治を左右したことである。第五は不急の土木工事や紙幣発行のような無思慮なことをして人心を失つたことである。第六は公卿や僧侶の放埒を制御しなかつたことである。第七は奢侈に耽り遊宴を好んだことである。以上のような弱点は新権力の成立期にその指導者のすることでない。

新政府は成立したが戦乱の余燼は静まつていたわけでない。北条の残党は建武元年からすでに蜂起している。九州では北条の一族が筑前筑後に蜂起し、少弐大友が七月までかかつてようやく鎮定した。十月には北条の一族佐々目僧正が紀伊飯盛山に拠つて暴動し正成がこれを伐つた。建武二年正月二日には長門や伊豫でも北条一門の反乱があつた。京都では西園寺公宗が高時の弟をかくまつて反乱を企てたが未前に発覚して公宗は殺された。最後に七月には高時の次男時行が信濃で兵を起

して鎌倉に攻め入つてこれを占領し、当時鎌倉に駐屯した直義が三河国まで敗走し、直義はそのどさくさまぎれに鎌倉幽囚中の大塔宮を殺して立退いた。尊氏はこの時行征伐を名として鎌倉に向い時行を追うた後についに叛旗をひるがえすに至るのである。

尊氏の二人の強敵

尊氏の逆心のきざし

後醍醐は誰れよりも尊氏を寵した。太平記に「尊氏卿、君ニ咫尺シ給フ」の語がある。日夜天皇の側を離れなかつたの意味である。これは尊氏が武家のなかの大物だだから特に寵用したという功利主義からばかりでなく、天皇は尊氏を人間的にも愛したように思われる。尊氏は武事一辺倒の人間でなく、教養もあり、人をひきつけるところがある。天皇はそれを珍重したのであろう。しかしかれはそれに感激するが、もともと帝室理念によつて動かされる男でなく、当時の武士らしい現実主義者であり、その理想は頼朝の如くに征夷大将軍となり武家政権たる幕府を再建してその主人となることである。又丹波篠村八幡宮への願文にも「我家再栄」を禱る言葉がある。天皇はかれのこうした野心を察知できるし、又長い間の非合法生活のなかで容易に人を信頼しないくせもついているか

ら、尊氏を寵愛するけれども全面的に信用せず、小細工に類することもする。建武中興の最中に尊氏を大国の守護たらしめ、参議として昇殿を許し、諱の一字を与えたりするけれども記録所や決断所のごとき政府機関にはなるべく尊氏をタッチせしめないようにしている。大塔宮がひたむきにかれを除くことを計画し進言すると、天皇はそれもそうだなという気になつて密かにその計画を支持したりする。俊敏な尊氏の頭脳には天皇のかような心理のうごきがよくわかる。

武士大衆は新政の混乱に絶望してむしろ武家政権を再建した方がよいという気もちになりつつある。建武元年はじめから北条余党の反乱が各地方の武士の参加をえて意外に廣範囲にひろがつたのは、なにも北条氏の復活を求めたからでなく新しい武家政治へのあこがれからである。（その証拠には尊氏が反逆するや、忽ち北条余党の騒ぎが止み、反乱者が尊氏のもとに集つた）。武士の眼はしだいに尊氏に集つてくる。かれもまた決断所の無原則と混乱によつてしだいに増大する武士の不平にたいして、かれ自身の安堵状を発行して、「元弘以来牧公所領不可有相違」という恰も主権者のごときロ吻を弄し、武士の心理を機微のうちにつかんでゆく。

しかし尊氏の前途は坦々たるものでない。強敵が二人いる。一は大塔宮、他は新田義貞である。

大塔宮護良親王

反北条闘争の成功と共に天皇はいち早く帰洛したのに、大塔宮は帰洛せず志貴に腰を据えて兵を集めていたのが尊氏と決戦するためであつたことは既述した。宮は天皇からなだめられて帰洛した後もスキさえあれば尊氏を討たうと秘密に正成長年等と計画して一時麾下の軍隊を動かそうとしたことさえある。尊氏の方もそれを感知し、有力な軍力で身を衞つているから中々手が出せない。征夷大将軍に任ぜられた大塔宮は今は完全に武人型となつている。これまでの武勲は赫々としており、天皇の子たる権威だけでなく、その胆略や勇気には武士でさえ心を寄せる者が多い。帝室に好意を寄せる南禅寺の明極和尚は同寺に詣でた大塔宮に兵仏一致の説を講釈して天台座主たりし宮の決心に理論づけを与えている。宮は軍力の価値を熟知しており、それに荒くれ武士どもに欠けているすぐれた知能がある。尊氏にとつて単なる競争者というよりもいつ襲撃してくるかわからぬ強敵である。

尊氏はこの苦手を片づけるために、天皇の寵妃准后新待賢門院を利用する。彼女は皇太子成良親王の母で、大塔宮がその子をもつて太子たらしめんとしているという浮説に動揺する。尊氏はこの美しいが愚かで欲深い婦人にとり入つて、大塔宮が令旨を諸国の兵に下して叛逆を企てるというデマを天皇に吹きこませる。同時に尊氏は正面より大塔宮を天皇に訴えてその身柄を預りたいと堂々として要求する。天皇は寵妃のデマに迷い尊氏の威嚇的要求に屈して宮を宮中に呼びよせ、待ち伏

せの結城判官、伯耆守二人をして宮を捕縛させて一室に監禁し、二三年来宮につき従うて辛苦を共にした候人三十余人を捕えて殺し、宮の身柄を尊氏の弟直義に渡した。時人はこれ朝廷の再び傾く兆かと噂し合つた。太平記では直義が宮を鎌倉に押送し穴を堀つて土牢を作りそこに監禁したとなつているが、二階堂の薬師堂谷の東光寺という寺に軟禁したというのが事実らしい。大塔宮は尊氏よりも天皇を恨むの言葉をしばしば洩らしたという。天皇が陰謀の主でありながらそれが発覚すれば親近者に責任を転嫁する態度は、正中の変の資朝後基の事件以来珍らしくないことである。

元弘の変以来、身を地下運動の危険におき、木の下に眠り岩が根におき伏して辛苦を重ね、今は宮方の一大中心人物となり、身辺少しの油断もないが父天皇を信じすぎて安々と捕われた大塔宮、これを捕縛する非情は義経を追捕する頼朝と似るが経世の才においては頼朝に及ばざる天皇、最大の敵が大塔宮であることを直感して天皇に宮を捕縛させその生殺を一挙に自己の手中に入れてしまつた尊氏、この三者の勝負では尊氏が勝ちである。

元弘二年七月、相模次郎時行（高時の次子）が信濃から兵をおこして鎌倉を襲撃して占領し同地を守備していた直義が脱走した。これを中先代の乱という。直義は「当家ノ為ニ始終讐トナルベキハ兵部卿親王ナリ」と部下に命じて混乱に乗じて幽閉中の大塔宮を刺殺させた。太平記はこの時の宮の最後について、暗殺者淵辺伊賀守と格闘し、その刀のさきをしかと口にくわえ、淵辺が力をき

わめて手もとにひくうち刄先一寸あまりをかみ折つたので淵辺はその刀を投げすて腰刀を抜いて宮を刺して首を切つたが、口中にかみ折つた刀のさきを含み、眼はなお生ける人の如く睨んでいたという悲壮な光景を叙している。直義は尊氏と一心同体である。直義は兄の公然果たしえないことを、兄の心を知つて、先きまわりしてやつてしまう男である。やりすぎて困らせることもあるが、わざとせつぱつまつた状態をつくり出したり、又はそれを打開して兄が悠々と積極的行動にうつる機会を与える。大塔宮の刺殺は、尊氏と相談の上でなく、突嗟に直義が打算してやつたことである。そしてそれは尊氏のひそかに喜ぶこと、かれにとつて有利なことなのである。尊氏の最も恐れていた敵はかくして除かれた。しかし宮を殺したことは王朝に向つて手切れと決闘の手袋を投げ、後醍醐天皇に叛逆を宣言したにひとしい。直義はこうして尊氏の行動の機会を早める。

新田義貞

尊氏の今一人の強敵は新田義貞である。八幡太郎義家の孫義重は新田氏の祖、義重の弟は足利氏の祖であるから両家は同族であり、鎌倉時代には通婚もしていたのだが、新田の家風は朴訥だつたらしく北条氏から冷遇されたに反し、足利の家風は外交手腕が巧みなので北条氏の優遇をうけていた。増鏡には「高氏の末の一族なる新田義貞なるもの」と安く扱われている。義貞は尊氏の教書

278976

をうけて挙兵したのだとの説さえあるが、大塔宮の令旨又は天皇の綸旨をうけたという方が真であろう。その軍事力は、関東から越後にかけて新田一族がはびこり、義貞の弟脇屋義助、越前金崎城で戦死する長子義顕、武蔵矢口渡で殺される次子義興、関東平野に転戦して死ぬる三子義宗、執事船田入道、堀口、金谷、江田、大館、大井田、里見、一井など猛将勇卒少からず、頼山陽が日本外史で「新田氏の将帥材武にして部属の精勁なるは足利氏の企て及ぶ所にあらず」と言うているのは少しは過褒であつても、軍事力において尊氏に劣つていない。

義貞が鎌倉を攻陥した勲功はたとえ大塔宮の巧妙な戦略指導があつたにせよ無条件に大きい。尊氏の六波羅攻めは慎重な狡智的な冒険であつたに反し、義貞の鎌倉攻めは一族全滅を期しての体当りであり、且つ北条氏の出先機関たる六波羅を落すよりもその本拠たる鎌倉を落す方がはるかにむずかしいことであつた。遠大な志をもつ尊氏は自己と同等の能力あるものの存在をゆるしえない。両者の衝突がすでに鎌倉占領直後に現われたことはさきにのべた。

義貞は尊氏のような政治家的能力や教養はない。性格単純な武将型の人間である。後醍醐天皇は尊氏の魅力にひかれつつも、実は義貞の方をたのもしく感じていたのであろうことは、侍所の長官を尊氏とせずに義貞としたことでもわかる。後に義貞が戦死したときにその肌の守り袋から「朝敵征伐事、叡慮所向、偏在義貞、選未求他、殊可運早速之計略者也」という天皇の親筆が発見された。

義貞はその恋慕した宮中の女官勾当内侍を天皇から与えられて感激した。王朝の女子は柔媚で、数百年の閑暇生活のなかで訓練されたなよなよとした美は関東の荒武者をわけもなく参らせてしまう。王朝はその女子を人形使いのごとく巧みに武士籠絡の道具に使う。弱いものの一つの逆襲手段である。義貞の正妻は北条の重臣安東入道聖秀の姪で、鎌倉陥落の数日前に安東にひそかに文をおくり、身に易えても御命を申し宥めるからこちらに来るようにと申しおくつた。安東はこれは我れを恥かしむるものと怒つて自殺した。義貞の妻も安東も健気である。今や義貞は勾当内侍に夢中である。内侍は巧みに王朝イデオロギーを義貞に吹き込んだであろう。かれは完全な王朝マニヤとなる。

尊氏と義貞は同一タイプの人間で、前者が叛変しなかつたならば後者が叛変しただろうという説がある。どちらも武士の名門であり、両者とも北条氏の息の根をとめた功があるとはいえ、わずか一個月ほどの参加にすぎず、あだかも中国革命での将軍連の寝返りに似ていることも両者同一である。しかし義貞には頼朝ルネッサンスを目的とするというような大志はない。かれのような単純な頭脳は帝室イデオロギーの魅力にかかりやすい。同じ名門、同じほどの軍事勢力、同じほどの軍功であるのに、武士大衆が義貞よりも尊氏についたのは、後者ほどの才能や首領的風格がなかつたからであるのみならず、尊氏が武士階級の代表者として行動するのに反し、義貞が帝室イデオロギーに

とりつかれて、武士一般の利害を疎外すると思われ出したからである。現実主義的な武士たちはこれではしようがないと見捨てたのである。しかしいかに同じ階級のものから見捨てられても、一以て貫いて帝室への忠誠という一つのイデオロギーを抱いてそれを守り通したのは人間として一つの尊敬すべき生き方である。

建武中興の崩壊の直接原因は尊氏義貞の衝突からであり、その後数年間の南北交闘も両者の軍事衝突を中心としている。尊氏は義貞討伐を名として鎌倉で叛逆した。義貞は延元元年六月の京都の戦いに単身尊氏の陣営の前におしよせ、天下乱れて人民苦しむのは汝と我との争いのためである。多くの人を苦しめんよりはここで二人で決闘して結末をつけるから出てこい、と叫んだ。頭脳単純なる人間のやりそうなことである。尊氏も、我れ此軍を起したのは君を傾け奉らん故にあらず、義貞に逢うて憤りを晴らすためである、二人で決闘することは我れも望むところ、その門開け、と言つたが、部下にとめられて出て行かなかつた。拳闘試合のように勝負すれば尊氏の方が負けたかもしれない。しかし尊氏の周囲には直義や高師直のような利巧者がいる。尊氏の叛逆が拳闘試合のようなものでないことを熟知している。尊氏は義貞にたいして本能的な憤怒や嫌悪や競争心をもつているが二人だけの決闘なぞは滑稽だとおもつていたであろう。かれは留められるのを承知の上で、門を開け、打つて出んなどと叫んだのである。これからもかれはかような芝居をしばしばやる。

けつきよく最後に尊氏は義貞に勝つた。その事実は後にのべるが、それは政治力が単純武力に勝つたことを意味する。又客観的には武士の階級勢力とその現実主義が王朝の公家勢力とそのロマンチシズムを圧倒したことを意味する。

Ⅵ、尊氏叛く

武家政権の故都鎌倉で

建武中興のさわぎの中で公家の政治はますます無原則で、武士層の不平不満が増大してゆく。武士がその階級的な首領として尊氏をえらぶ空気が濃くなつてゆく。かれの叛逆の機会がしだいに成熟する。北条時行の反乱とその鎌倉占領はその糸口となつた。かれは叛逆を条件もないのにムリにそれを製造しようとするような小児病者でない。陰惨な積極性のない小陰謀にふけつて身を亡ぼすたぐいの愚者でない。かれは小野心家でないが、目の前にぶらさがる権力の機会を見のがす遅鈍漢でもない。幾百万の人々を跪かせ、その人々の運命を左右するところの権力、一度それを握れば無限の快楽を約束する魔法杖のごとき権力、その誘惑にかかれば清浄な魂を有する人間も卑しい権謀術数家に変化する。尊氏は権力がおのれに近ずいていることを感知する。自分でそれに近ずく努力をしなければ、権力は他の人をえらぶに至るだろう。自分の権力奪取の闘争は殺伐と悲惨の無数の出来事をもたらすであろうが、しかもそれによつて世界は自分に向つてほほえむように一変するであろう。尊氏にはしだいに叛逆の覚悟ができてゆく。

盲動は破綻をみちびくが、しかし機会がくれば、愼重と僞飾をなげすてて鷲のごとく敏速に行動せねばならない。人が行動で応じなければ機会は矢のように去つてしまう。時行の反乱の報道が京都に達するや、尊氏は猛然天皇に迫つて自分を征夷大将軍に任命して征討軍の指導者にすることを要求した。かれを征夷大将軍とすることはかれを武士階級の代表者としてみとめ、軍権に対する最高指導者たるをみとめるのみでなく、頼朝型の武家政権の再建をみとめるという政治的意味を有する。尊氏は許されないことを知りながら叛逆の一つの口実を得るために居直り的にこの要求を出したのである。天皇は尊氏の願いを許さず、八月一日、却て成良親王を征夷大将軍に任命した。尊氏はその翌日に鎌倉攻撃は私のためのものでなく「天下の御為め」の由を申捨てて無断で京都を出発した。梅松論は「此頃公家を背き奉る人々、その数を知らずありしが、皆喜悅の眉を開きて御供申しけり」とある。武士には冒険家、投機者、貪慾漢、動物的勇気だけの所有者が多い。これはいつの世でも叛逆者の道ずれであり、恰好の道具として利用される。尊氏は一家一族の武士を中心としこれらの雑然たる諸要素を吸収し、一定の組織性を具えた軍隊に編制して出発した。かれは三河国矢作で直義の軍と合し、それより鎌倉攻撃に着手し、八月十九日に同所を占領して時行軍を潰走させた。

尊氏はそのまま鎌倉に居すわつた。若宮小路の旧幕府跡に新館を作り、自ら征夷大将軍と称し、

高師直以下の諸大名の屋形が軒を並べ、宛として旧幕府を再現した。尊氏は物惜しみせぬ大将で、金銀武具、手のふれるままに諸人に賜与したと夢想国師が評した通りに尊氏は寛厚であつた。しかしかれは又餓虎を釣るには肉片が最も有効であるのを知つていた政治家である。武士は土地さえ与えられるならばただちに感激して生命をさし出す気になる。かれはこの心理を熟知している故に、叛逆の門途にさかんに従軍の将士に恩賞を与えた。時行の反乱に加担したものの領地であつた信濃常陸の土地を沒收して従軍将士に賜与し、斯波家長を奥州管領たらしめ、義貞の分国上野の守護職に上杉憲房を任じた。又反乱に加わつた北条方の将士を宥して寛大に扱つたので、頭脳簡単なるかれらは感激して尊氏に忠節を誓うものが続出するありさまである。

宮廷では尊氏の無断出発後にかれを征東将軍に任命するなどむしろかれの軽侮を買うようなことをやつたが、かれが鎌倉に腰を据えたのをみて数度の召還の使者を出した。尊氏は上洛する態度を装うたが、ここでも直義が兄の心中にあることを公然強引に代弁する。すなわち直義はじめ上杉憲房、細川和氏、佐々木高氏らは口を揃えて次のごとく言う。京都は敵中と異らず、たまたま大敵の中をのがれて鎌倉にいるのは天の与うるところである、これまで武士は指導者なき故に心ならずも青白い公家どもに従つていたのである、今日、心を決して叛旗をひるがえすならば誰か馳せ参じないものがあろうと。ここでもなお尊氏は愼重である。かれは帝室イデオロギーが国民の間にもつふ

しぎな力を軽視しない。かれは違勅の名を避けて実際政務を直義にやらせ自分は浄光明寺に屏居する態度をとつた。宮廷ではかれのこの態度に不安となり、猜疑を生じ、かれを叛逆者として討伐すべきだとの方針にだんだん傾いてゆく。

尊氏はここでも巧妙な手をうつ。すなわちかれは義貞との確執を叛逆の口実とした。両者の対立憎悪は、元治二年五月に義貞が鎌倉を攻陥した時に諸軍が殊勲者の自分よりも四才の幼児なる尊氏の子義詮についた事件から発端しており、今は妥協の余地がなくなり、いずれか一方が倒れねばならぬ宿命的なものになつている。尊氏はこんど鎌倉を占領してから、既記のごとく義貞の分国上野の守護職を上杉憲房に与えたのみでなく、さきごろ新田一族に賜与された関東の多くの所領を奪うて部下に与えた。これは部下の歓心を買うと共に義貞にたいする挑発行為である。義貞も安からぬ事に思うて、その仕返しに、自分の分国越後上野駿河播磨にある足利一族の知行の庄園を押えて家人たちに分与する。

尊氏はこうした挑発をやつておいたのち宮廷に向つて長文の義貞弾劾状を提出した。次の意味が書かれてある。義貞の鎌倉攻陥は真の忠誠のためでなく北条氏の忌諱にふれたため窮鼠反つて猫を噛んだにすぎない、攻陥の功は我が子義詮の方にある、近日佞臣が自分を讒言しているそうであるが、それは義貞の派閥のやることである、願くば勅許を得て義貞を討ち海内の安静を計りたい、

と。義貞も負けずに尊氏弾劾状を提出した。それには、尊氏は革命成功疑いなしという最後の瞬間になつて功利的に参加したオツポチユニストにすぎない、義詮の鎌倉攻撃参加は僅か数百人でやつてきたにすぎない、尊氏は六波羅攻陥後に勅許を得ずに奉行所をひらく僭越行為をした、大塔宮を弑殺したのは人面獣心行為である、願くば逆賊尊氏を誅罰する宣旨を賜りたい、と書いてある。五十歩百歩の観なきにあらざるも、尊氏の奏状には詭弁があるに反し、義貞の奏状の方が筋が通つている。天皇は尊氏誅罰を決心して尊良親王を上将軍とし義貞を主将として東海東山両道より討伐軍をさしむけた。

尊氏の義貞弾劾奏状（十一月十八日に京都に到着）は一の婉曲な、しかし脅迫的な叛逆宣言である。尊氏はこの奏状以前すでに機敏に十一月二日付で直義の名をもつて関東、畿内、中国、四国、九州の重立つた将士に義貞討伐の檄を飛ばした。かれが全国的戦略構想のもとで叛逆戦争をやる準備を着々やつたことがわかる。尊氏の叛逆が明かになると、京都にいる尊氏方のものは急いで東下し、宮方のものは京都に急ぎ、海道上下の輩はあやぎぬを織るごとく頻繁であつたと梅松論は形容している。

しかし尊氏のうつ芝居は中々手がこんでいる。かれは違勅の名をとることの不利であるのを熟知する。かれは帝室に一定の尊敬を払うけれども、現実政治にはそれが無価値でむしろ反動的でさえ

あると考えている。しかし国民の間にしめるそのイデオロギー的力を無視するのは損である。だからかれは直義に三河国矢作川をこえて西下してならぬと命ずる。それは三河国は自分の分国だから、そこでただ防衛戦争をするだけで王朝軍に積極的抵抗をするのでないという形をとるためである。戦況は最初王朝軍に有利に展開し、義貞は直義の軍を破つて箱根に肉迫するに至つた。

この危機に際して尊氏は又芝居をする。かれはあくまで違勅の名をさけるため建長寺に入つて髪を切つて遁世するというのである。直義等は、たとえ尊氏が僧となつても誅罰は容赦しないという偽の綸旨を作つて、それを尊氏に見せる。尊氏はそれが偽書であると知らずに、さらば力なし、今は弓矢をとつて義貞と争う外なし、と決心し忽ち道服を脱ぎ錦の直垂を身につけて、将士を激励したというのである。かれの軍隊の士気が忽ちあがつた。これが深刻な芝居でないといえない。

戦況は逆転した。尊氏は箱根竹下の迂回戦で義貞軍に大打撃を加えた。尊氏軍はこれを追うて京都に迫つて行く。今やかれの公然たる叛逆の火ぶたが切られた。シーザーがルビコンを渡るの概がある。王朝に反抗するのでないのを示すためにはすでにあらゆる手段をつくした、今はもうやむをえぬ、やるところまでやるというわけである。しかし名目はあくまで義貞を討つというにあるところに注意するがよい。本質は叛逆であり、王朝政治を否定して武家独占政権を作ることが根本目的でありながら、名目は一義貞との決闘ということにおいている。深酷政治家らしい謀略である。

この戦争で滑稽でも悲惨でもあるのは、義貞尊氏の主力軍（それは一族郎従から成つている）以外の武士の去就である。義貞が勝てば尊氏についていたものが義貞の軍に加わり、義貞が敗ければ脱走して尊氏につき、この東海道筋の戦いであつちについたり、こつちについたりを数回くり返したものが少からずある。源平合戦の際のような古典的な律義な武士の風がなくなつて、利益主義一辺倒がかれらの大部分を支配した。数年前の北条打倒闘争にもこれほどのことはなかつたのである。叛逆戦争の生む悲喜劇である。尊氏の軍が優勢となつたのも王朝側の大友貞載や塩冶高貞が俄に変心して尊氏側についたからである。武士の土地慾、一般的には人間性の卑しい一面―物質慾の利用が、いかに生きるか死ぬかの戦争の間際にもすばらしい効果をあげるものであるかを熟知する大心理学者のごとき尊氏は、義貞軍との一戦毎に将士に功労あればその場でどしどし土地を賞賜する。

梅松論は「之を見聞く輩命を忘れ死を争ひて、勇み進みて戦はんことを思はぬ者ぞなかりける。香餌の下には懸魚あり、重賞の所には勇士ありという本文是なりけりと覚えし」と書いている。この本文というのは中国の軍書三略のなかの文句「香餌之下必有死魚」云々を指す。こうして戦争は懸賞つきのものとなる、この尊氏の叛逆から戦争の性格が一変して利益本位のものとなる。

しかし尊氏の檄は十二月になつて忽ち効果を現わしてきた。四国讃岐で足利の一族細川定禅、備

前福山の佐々木、田井、丹波の久下寺、播磨の赤松円心、越中守護普門、加賀の富樫、越前の尾張守高経の家人、伊豫の河野入道、長門の厚東の一族、安芸の熊谷、周防の大内、備後の江田寺、出雲の富田、伊勢の波多野、因幡の矢部等が蜂起してそれぞれの地方の王朝方の襲撃を開始した。これは単に十一月二日の檄だけでなく、前以つて尊氏が秘密のオルグをもつて細密に打ち合せておいたからであろう。尊氏は表面で違勅の名を恐れるという態度をつづけながら、その数カ月前から全国一齊蜂起の手筈はちやんとやつておいたのである。宮廷では義貞の敗軍と諸国の頻々たる蜂起の報をきいて色を失い大混乱状態となる。

天下を君と君との御争になさばや

一三三六年（建武三年、延元々年）一月早々、尊氏の大軍迫るの報に京都は震駭し宮廷は朝拜や節会の儀式どころではない。天皇はよく賊を拒ぐ者には重賞を与うと朝堂に榜示したけれども応ずる者がない。一月十日、天皇は三種の神器を抱いて叡山に落ちのびる。尊氏軍は山崎大渡で防衛軍を破つて京都に乱入して諸所に放火し、内裏も火につつまれて焼け亡ぶ。尊氏はここでも抜け目なく叡山と園城寺との対立関係に目をつけて、後者を利をもつて誘うて味方にひきいれる。

しかし戦況は尊氏に有利でない。北畠顯家が奥州五十四郡の大兵団を率いて背後から迫つてく

る。尊良親王も東山道より軍勢をつれて叡山と合する。義貞の執事船田入道は戦死したが、その軍は以外に手強く、それと協力する農民ゲリラ隊が尊氏の陣中に紛れ入つて突如として中黒の旗（義貞の軍旗）をさしあげて乱戦したりする。元来尊氏は実戦は拙劣で、この時期は特にまずく、一月十六日より三十日までの間に園城寺、神楽岡の戦いで敗北続きで、一月三十日の紀河原に完敗し、追兵急なるため自殺せんとしたほどであり、吉良、石堂、仁木、細川などの僅かの親近者と共に丹波篠村に向つて敗走した。かれは逆撃して京都を襲う計画をたてたが直にとりやめて三草山を越えて兵庫に出てここを根拠地とした。兵庫は四国九州との交通の要路である。三草山をこゆるときに例の「いまむかうかたはあかしの浦ながらまだ晴れやらぬ我がおもひ哉」という秀歌を詠んだ。

二月十日、十一日、正成の軍が迫つて打出、西宮、豐島河原で尊氏軍を破つた。たまたま尊氏の檄に応じて周防の大内、長門の厚東が兵船五百隻をもつて到着した。二月十三日尊氏兄弟はこれに乗つて九州へ向つて逃れ去つた。去年十二月八日、叛軍を率いて鎌倉を出発してから約二カ月、関東生れの尊氏兄弟はここに早くもまだ見ぬ九州の地に落ちねばならなくなる。しかし叛逆軍の将領は恐怖を知らず古の頼義家の奥州征伐に七騎となつた例をひいて「始の負は御当家の佳例なり」などと傲語する者がある。尊氏は九州落ちに際して播磨、丹波、石見、備前、美作、備中、安芸、周防、長門、四国にそれぞれ腹心を配置して追撃軍を阻止する拠点を作らせ、かねて再挙東上の際の

足がかりとする布置を忘れない。実戦は下手だがすぐれた戦略家であるかれの面目がここに現れている。

尊氏はここでとつておきの巧妙な手をうつ。帝室内部の党争を利用して後醍醐天皇の敵党たる持明院統から院宣をもらいうけて自分の行動を正当化そうというのである。後醍醐天皇にたいする持明院統の憎悪はますます烈しい。権力争奪に心を焦がす者は敗者となればなるほど理性を失い眼前の利益のために将来の自分の命を断つようなこともする。尊氏は持明院統のこの心理を巧みに利用する。太平記によると、尊氏は兵庫で熊野山別当法橋なる者をひそかに呼んで、今度の敗軍の原因は自分が朝敵の名を負うているからだ、ついては天下を「君ト君トノ御争ニ成シテ合戦ヲ致サバヤ」とおもう。汝は汝のゆかりのある日野中納言をたよつて上京し院宣を申し受けてこいと命じたとある。梅松論によると、赤松円心が尊氏に「凡そ合戦には旗を以て本とす、官軍は錦の御旗を先立つ、此方は是れに対向の旗なき故に朝敵に相似たり、所詮持明院殿は、天子の正統にて御座あれば、先代滅亡以後、定めて叡慮心よくも有るべからず、急に院宣を申下されて、錦の御旗を先立てらるべきなり」と進言したとなつている。ここで「先代滅亡」というのは北条氏の滅亡のことである。持明院統がつねに北条氏と声息を通じていたことやその滅亡後に不遇を嘆じていたことなどは武士の間にまで周知であつたと見える。敵の内部分裂を促進するのみならず、その一方を自己に有利な

るように逆用しようというのである。以上の太平記や梅松論の記事は恐らく事実であろう。そうでなくとも、天下を君と君との争いとなし合戦するという尊氏の真意の指摘が右の記事の眼目である。

後醍醐天皇は今はいわば帝室一般を代表して尊氏と戦うているのである。持明院統も帝室一般の利益を思つたならば後醍醐天皇と協力すべきであつた。しかし党争で盲目になつていると、唇ほろびて歯寒しの譬えも理解できなくなる。北条滅亡以来の不遇つづきであるから気も腐つている。又北条との狎れ合いの経験を足利氏との関係で再現できるというはかない希望にもうごかされる。持明院統の光厳上皇は三宝院僧正日野賢俊に院宣を渡して尊氏を追いかけさせ賢俊は備後の鞆の津で尊氏に追いついてそれを渡した。これによつて尊氏の立場はいわば大義名分をえて強力なものとなつた。日野は貴族中の名門で、賢俊はこれより尊氏のために犬馬をとるようになり、後に尊氏の推挙で僧正となり、室町幕府成立の際は謀議に参加した。その家は足利家と通婚し、義政の妻にして好賄、妬婦、政治容嘴、応仁大乱の一原因をなしたところの日野富子もその家の出である。

尊氏は院宣を手にして先ずこれでよろしいと微笑すると共に、今日自分の敵対する後醍醐天皇に今も心中感じているような尊敬をとうてい持明院統には払えないと思うたことであろう。後年かれが北朝の君主を小児扱い、人形扱いにする心理的根拠はこういうところにある。尊氏は早速院宣を

利用して得意の檄文工作に着手し、わが軍事行動は新院（光厳上皇）の意志によるもので無名の師でないからよろしく頼むという自筆の御教書を各地の豪族にばらまいた。

われわれはここで尊氏の政治家的力量がどしどし成長しつつあるのを発見する。かれは恐らく京都の戦争中にひそかに光厳上皇と連絡し院宣獲得工作をしていたのであろう。そうでなければ敗軍の将が安々と院宣をもらえるわけがない。又鎌倉を打ち立つ際から、京都攻撃第一回戦で必勝するとはうぬぼれておらず、敗軍の際は九州に落ちのびて兵を養い再挙するという計画を立てていたとおもわれる。九州の豪族と密接に気脈を通じておいたはこの用意のためである。かれの九州落ちは風の音にも心をおどろかす落人の姿でなかつた。四国中国には追撃軍をくいとめるがつちりしたトーチカができている。院宣は懐にある。九州の田舎豪族どもは将軍が辺疆の地を訪れてくれると光栄に感じてまちうけてくれている。かれは弟直義らをひきつれて堂々として九州に向う。丹波篠村に旗上げしてから僅かに二年半余、むらがりおこる事件に試煉されて尊氏は成長してゆく。大局を洞察する力、将来の布置についての直観力、武士の層を心理的に捕える技術、全国的規模における自己陣営の軍力の結束計画、こうしたもろもろの力を養うてかれは大首領らしく成長してゆく。

京都のほうでは尊氏の九州落で安心してしまう。後醍醐天皇は二月二日に叡山から帰洛して義貞を左近衛中将、弟義助を右近衛門佐に任命したりして又太平がきたという気分である。正成は二月六

日に豊島河原で尊氏軍を散々苦しめたが何と思つたか急に兵をひきあげて帰つてしまつた。正成が王朝貴族を見限る心のきざしが此時から見えている。急追するものがないから尊氏は安々とのがれてしまう。義貞は勾当内侍の色香に迷つて彼女のそばにへばりつき三月まで腰をあげようとせぬ。

もし此時義貞が神速に西国にむかつて行動したならば、方向に迷うていた武士群が大挙して味方になつていたであろうに、右の京をんなとの暫しの別れを惜しんでへばりついていたのは、これこそ傾城傾国というべきものだと時人が噂した。此間に尊氏は刻々に再挙の準備に心を砕いている。

九州の尊氏、その東上

尊氏は武士階級の代表者を以て任ずるが、かれは群小の土豪的武士よりも高級の大物の領主的豪族と結びあう。かれ自身がそうした出身であるばかりでなく、またその方が大戦争に能率的であるからである。かれは元弘の始めから九州に目をつけてその三大豪族たる少貳、大友、島津と完全に連絡している。ただ肥後の菊池のみはもつとも忠実な南朝方で、少貳らの貴族風に反して野生的な慓悍さがある。

尊氏の一行は二月末に筑前の国多々良浜に到着した。宰府の少貳の根拠地に行こうというのである。手兵わずかに五百人余である。菊池武敏が数万騎をもつて多々良浜で尊氏を迎え撃つた。尊氏

の軍は一時敗色濃厚で、かれは自殺を覚悟したほどであつたが、松浦、神田の者共が変心して尊氏方に加わつたので、激戦の末かえつて大勝した。戦闘のはじめに少貳頼尚が、敵は多勢であるけれどもみな味方にまいるべき者共で、菊池は三百騎ぐらいに過ぎないと言つたが、そのとおりに菊池の軍から尊氏の方に加わる者が多かつたため勝つことができたのである。箱崎の松原から博多の洲浜まで追いつめられた菊地方は多くの死傷者を出し武敏は身をもつて逃れた。多々良浜の一戦は尊氏の九州における地位を確立したもので、九州の将士はぞくぞく彼の許に集つた。彼は筑後、肥後、豐後、大隅、日向の宮方を攻めて大体三月中に九州を平定してしまう。

多々良浜の戦いの後に尊氏は得意の二つの技巧をおこなう。第一は買收と寛宥の政策である。戦功ある者には旧領堵のほか不次の賞をおこなうとか、尊氏に抵抗した者も罪に問わないと布告した彼は降参の者をもつて門を守らせるという大胆な寛宥ぶりを示した。第二はいわば落涙政策であつて、彼は菊池と戦つて死んだ小貳貞経のために盛大な慰霊祭を行つて、御身は尊氏に代つて死んだのであるからその恩を生涯忘れないという意味の弔文を読んで、単純な九州人を感激させる。しかし彼は警戒をわすれない。杉浦、神田の輩が降服した時に、彼は高、上杉等の親近者に向つて「言ノ下ニ骨ヲ銷シ、笑ノ中ニ刀ヲ礪クハ、比此ノ人ノ心ナリ(中略)相構ヘテ面々心許シアルベカラズ」と言つた。寛大と政策技巧と猜疑心とが入り交つてどれが本当だかわからなくなつている。梅松論

の作者のように、以上のことを尊氏の寛大を証明するものとのみ見ることは、一つの御用的議論である。

尊氏はわずか一ヶ月の間で九州を手に入れた。彼は神速にも四月三日船隊を組織して博多を出発して東に向つた。秋の兵糧の熟するを待つて出発するという議論もあつたが、赤松円心の方から急を告げる情報があつたので、東上を断行したのである。彼は一色範氏を九州探題として博多に残した。彼は四月末までなにゆえか長門の府中に滞在し、五月一日に安芸厳島着、五日に備後尾ノ道で和歌の会をもよおし、その清書一巻に尊氏が袖判して浄土寺に奉納した(現在国宝)。尊氏の軍はその日に鞆津に着しここから海陸別れて進むことになつた。尊氏は海路、直義が陸路を進む。途中福山にこもる宮方を攻略した。五月二十三日には尊氏の船隊は摂津大蔵谷沖、直義の陸軍は一谷に到着し、ここで兵庫合戦の軍議をした。そして五月二十五日にはいよいよ湊川合戦となる。

正成の死

これより先き、勾当内侍におぼれていた義貞はようやく三月四日に京都を立つて播磨に向い赤松円心のこもる白旗城をとり囲んだ。円心はひそかに子の則祐(大塔宮の第一の腹心であつた)を九州の尊氏に派遣して急を告げその東上をうながしておきながら、義貞に向つて播磨守護職を賜わる

綸旨を周旋してくれるならば降参すると申入れた。義貞がこの手に乗つて攻撃をゆるめ、飛脚を京都に往反している十日あまりの間に円心は城の防備を堅めてしまい。使者が到着したときには「当国ノ守護国司ヲバ将軍ヨリ賜リテ候間手ノ裏ヲ返ス様ナル綸旨ヲハ、何カハ仕候ヘキ」と嘲笑してつき返した。義貞怒つて力攻めにしたが抜くことができず、他の小城を攻めても一つも落せなかつた。義貞が焦慮しているうちに刻々に尊氏の東上軍が迫つてきたのである。（赤松円心父子は元弘の変のはじめから最も功労の多い忠実な宮方だつたもので、頭脳敏活、勇気あり、果敢な戦士だつたが、功ありて賞せられず、怒つて尊氏に走つたものである。建武中興が味噌をつけるにつれて有能な武士にして王朝恃むに足らずと見かぎるものが多くなつていたのである。）

湊川合戦は正成兄弟の戦死によつて名高い。これはたしかに日本史における一つの悲劇的シーンである。正成の人物についてはさきにものべたが、かれは戦闘に巧みであつたばかりでなく、すぐれた政治的機略家であつたことが特筆されねばならぬ。かれは建武中興のはじめに大塔宮の尊氏を討つ計画に参加した。それは尊氏が将来の禍であることを明察したからである。尊氏が九州に落ちたので宮廷が大喜びで安心した際に、かれは、むしろ義貞を誅して尊氏を呼び返せ、尊氏への使者は自分にやらせてもらいたいと進言して、不思議なことをいう奴かなと嘲笑された。九州に落つる前の尊氏を兵庫で深追いしなかつたのも深い考慮から出たのであろう。尊氏召還の提案は突飛に似

ているがよく考えると天下の形勢を洞察し危機を静める一つの奇手を案出したもので、政治家的な設想力をここにみることができるし、それも帝室の利益を考えてのことである。正成はそれが容れられないとなると、こんどは尊氏を倒す手段に熱中した。これもかれの頭脳の自由なはたらきを示す。かれは尊氏の東上軍の迫つたときには次の提言をした。曰く、味方の疲れた小勢では新鋭の尊氏軍に必ず敗けるであろう、義貞をも呼びもどし、天皇は叡山に幸し、京都をわざと尊氏に渡し、自分は河内を根拠地とし畿内の勢を以て義貞の軍と協力して兵粮にしだいに困つてくる尊氏軍を挾み討にしたならば必ず勝利するであろうと。坊門清忠という長袖貴族がこれに反対し、天皇それに同意して正成に兵庫出戦を命令したのは周知の如くである。正成の心中撫然たるものがあつたであろう。しかしかれは「正成此上ハ異議ヲ申スニ及ハス、且ハ恐アリ、サテハ、大敵ヲ随ヘ、勝戦ヲ全フセントノ知謀、叡慮ニテハナク、只ニ心ナキノ戦死ヲ、大軍ニ当ラレント計ノ仰ナレハ討死セヨトノ勅定コサンナレ、義ヲ重シ、身ヲ顧ミヌハ、忠臣勇士ノ所存ナリ」となして兵庫に向つた。もうここが死に所だという涼しい決意である。その思い切つた心境は同情に値する。

ある民主々義者らしい人の歴史の本に正成を田舎侍だと罵倒してある。田舎侍出身ならばなぜ悪いのか、まことにふしぎである。高い身分の出身であれば尊敬し低い身分の出身であればそれだけで卑しむという事大主義が知らず知らず露出している。そんな事大主義は民主々義でない。正成は尊

氏のような鋤鍬をとつたこともない名門の貴公子とはちがい、農業生産にも農民生活にも直接の関係をもつた土豪の出身であり、青年時代は荘園領主にたいする農民ゲリラ暴動の指導者でもあつた人である。したがつて民衆の心のなかの感情も切望もよく理解している。この健全な生い立ちや健康な人民的感覚があるからこそ、正成は建武中興の有頂天さわぎのなかで、おろかな思いあがりをしたり、わがままな不平の徒になることがなかつたのである。帝室への忠誠ということも従来の古びた、公式主義的な理念からでなく、帝室と民衆との結合という、かれ自身の解釈があつたのであろう。しかしかれは王朝政治における抜きがたい腐敗や因襲を目撃し、不労所得者たる公家貴族の頽廃文化が民衆の幸福に何の関係もないことを今さらに知り、武士の層にも牢乎たる身分制があつて名門出身者が正成のごときを卑しい身分のものと見くだす固陋さなどに幻滅を感じてきていたのだろう。かれの直感力は帝室乃至王朝政治が真実の革命力たる民衆からも見放されるであろうことを予感して苦んだらしい。前に引用した湊川出戦前のかれの言葉(一二一頁)のなかに天下の士民は今やあきらかに君に背いており、さる上は正成存命しても無益である、最先に命を落すべし、と言い切つていることでもわかる。民衆のなかから出た、軍事とともに政治的にも鋭い才能をもつたこの天才の心のなかこそあわれである。さきにあげた通俗歴史の本には正成の兵庫出撃を特攻隊精神のごとしと茶化しているが、戦後民主々義者らしい放恣な言草ではある。過去の日本史を冒瀆するこ

とを進歩的だとする風が戦後に流行した。なにか積極的なものがその人たちにあるかといえば何もない。空虚なニヒリズムだけがある。過去のなかに新しいものを発見する積極的態度はかれらにない。私は従来の解釈とはちがうけれども正成をやはり一個の英雄として尊敬する。利己主義の毒草の茂つたあの時代に、人間性の弱さも知り、それを超克しえて、微笑して死に当面することを知つていたかれは一のすぐれた人間像である。

正成は湊川合戦の前日に義貞に面会して軍事の打合せをやつた。義貞は、去年関東で箱根竹ノ下の一戦で破れ尊氏軍の京都浸入を阻止しえなかつたばかりでなく、今また赤松円心に翻弄されて一城も落しえず、さぞ自分の評判の悪いことだろうと沈んでいるのを、正成は色々の言葉で慰めたので義貞の顔色もようやく明るくなつたと太平記にある。義貞の失策つづきを今更責めてもしかたがない。慰めた正成は苦労人という感じである。

五月二十五日、湊川合戦は午前十時頃から午後四時ごろまでつづいた。尊氏の海陸の九州、中国、四国の兵より成る新鋭軍隊の勢いは圧倒的で、尊氏の作戦は巧妙をきわめ、斯波高経の一隊は須磨口、少弐頼尚は浜手、細川定禅は和田岬を東進して生田森に上陸して義貞の退路を断つ、この作戦図に当り兵庫堺の防禦線も突破された。義貞は血路をひらいて丹波路から京都さして逃げ帰つた。正成は太平記が「打破リテ落ハ落ヘカリケルヲ」というているように最初は脱出の機会があつたが義

貞の敗走によつて前後を大軍で囲まれて退路がなくなつた。しかし退路がなくなつたため自殺のやむなきに至つたのでない。かれは最初から死を決しており、七百騎の手兵だけで血戦して直義の本陣への突入を企て幾度か直義を討ちとろうとした後、力つきて弟正季と共に一族全員戦死した。

敵も味方も正成のいさぎよい死を尊敬した。尊氏は正成の首をねんごろに河内の正成夫人のもとに送りとどけた。これは尊氏の例のごとき芝居ではなかつたであろう。好漢、好漢を識るの情景がそこにある。十一才の正行が父の首をみて慟哭し持仏堂に走り入つて腹を切ろうとするのを正成夫人が押しとどめ、スパルタの婦人のごとく健気に我子に将来の復讐を誓わせたという説話はわれわれの六百年前の祖先たちの精神生活の一面をしのばせるものがある。

Ⅶ、尊氏政府成る

南北朝の分裂

尊氏の叛逆軍は五月二十五日の兵庫上陸作戦に成功し防禦軍の義貞を敗走させ、正成を討ちとり、怒濤の勢いをもつて京都に迫つた。京都市中は又もや大恐慌である。後醍醐天皇はあわただしく五月二十七日に叡山に幸する。度々の戦禍に懲りて公家だけでなく、官僧、官女、医師のたぐい、一般市民まで逃げ出して、叡山の山上や坂本まで避難民でごつた返し食糧も追々不足するありさまである。

尊氏は八幡山を本陣として叡山攻撃に着手し六月中は又戦争であけくれする。この時、美濃、尾張、伊賀、志摩の足利方の東国軍が勢多のあたりに到着して東坂本方面から叡山を攻撃した。これは尊氏の例のごとき動員戦略に出たもので、東西挾撃の態勢ができあがつた。しかし宮方も敗けてばかりいるわけではない。義貞は発奮してしばしば逆襲に成功し、四条隆邦の一隊は桂川のほとりに出動して牽制作戦をする。北畠顯家の率いる奥州勢が大挙上京して尊氏を襲うてくるかもしれないという情報もある。六月二十日には西坂本で尊氏の主軍が大敗して京都にひきあげた。この時に

捨身の追撃をしたならば義貞軍は決定的勝利をえたかもしれないのに、それをしなかつた。

尊氏軍の京都への引上げは或は尊氏の偽装敗北であつたかもしれない。山上に居る軍を攻めるのはどうしても犠牲が多く出る。敗北を偽装して山上軍を平地におびき出して決定的打撃を加うるを有利とする。そうしないでいるうちに諸国の官軍が蜂起して形勢逆転の危険もある。山上軍がいさか心傲つて三十日にほとんど全軍をもつて京都に攻めよせたのは、この尊氏の詭計にかかつて釣り出されたのかもしれない。官軍のなかには形勢次第で尊氏方に寝返ろうとする連中もいるし、尊氏のスパイ網もあつて官軍の作戦が手にとるようにわかる。鳴りをひそめていた尊氏軍が逆襲に転じて官軍に決定的打撃を加えた。名和長年も戦死し、義貞はようやく危地を脱して叡山に逃げ帰つた。天皇以下、色を失う。官軍はこの敗北を境として振わざるに至る。

尊氏はこの期間に戦争ばかりしていたのでなく着々として政治工作をする。持明院の光厳上皇は後醍醐天皇の脱出に際して病気だと称して同行せず、ひそかに尊氏軍の到着をまちうけた。尊氏はこの光厳上皇の院旨をうけて自分の方でも錦旗をかかげることができたのであり、両者の間に秘密の連絡があつたであろう。帝室内部の党争が深刻であればあるほど尊氏はほくそ笑む。五月末に山陰方面から入京した今川仁木らの尊氏の先鋒隊はいち早く上皇を迎えとり、尊氏は六月三日に八幡山の本陣に上皇とその王子豊仁親王を迎えた。これは奉載であるけれども軟禁的意味もある。ここで持明

院統を手離してはあぶ蜂とらずになる。後に尊氏から人形のように扱われるに至るのであるけれども、内部党争に心のくらんだ持明院統はほつとした気もち、将来が明くなつた気もちになる。八月十五日になつて尊氏の奏請によつて豊仁親王が即位した。光明天皇これである。現に天皇の位にある後醍醐を公然無視するわけであり、同時に二人の天皇ができたわけである。

光明天皇の即位するや、京に集つた田舎武士たちは茶会や酒宴のみぎりに「哀此持明院殿ホト、大果報ノ人ハオハセサリケリ、軍ノ一度ヲモシ給ハスシテ、将軍ヨリ、王位ヲ給ハラセ給ヒタリ」などと放言した。かれらの眼中には尊氏のみあつて天皇はない。尊氏のやり方もまた北条氏よりも苛烈である。北条氏は朝廷のしきたりの政治慣習には黙認して手をふれなかつたのに、尊氏はそれにも干渉して公武両政を自己の手中に集めてしまう。天皇は単なる装飾物となる。

光明天皇は尊氏の擁立で即位し、尊氏は立派な楯ができたわけだが、帝位を表徴する三種の神器は、後醍醐天皇のほうににぎられている。ここでまた尊氏は狡猾な詭計を弄する。かれは叡山の後醍醐天皇に使を出して言う、此乱は君に反逆を企てたのでなくただ義貞のごとき讒臣を除くためであつた、もし御帰洛になるならば供奉の諸卿や武士の罪を問わず、悉く本官本領に復し、天下の成敗を公家に任せ奉るであろうと。そしてていねいにも大師勧請の起請状まで添えた。敗戦つづきに気をくさらしていた天皇はこの申入れに動揺した。そしてついに帰洛を決定した。尊氏は笑つて「サ

テハ叡智浅カラスト申セトモ、欺クニ安カリケリ」との言を吐いた。天皇の一行の叡山出発の直前に義貞父子兄弟三人、兵三千余とともに馳せつける。その面色みな怒れる心ありというのは尤もなことである。義貞には帰洛のことを秘密にしておいたのである。これまで義貞を信任して散々犬馬の労をつくさせながら、それを出し抜いて讐敵尊氏の勧誘に応じて義貞の知らぬ間に帰洛しようとしたのだから義貞が茫然となり士卒みな怒つたというのはむりでない。こうしたところに後醍醐天皇の性格の欠陥がある。堀口美濃守貞満は天皇の車の轅にとりつき涙を流して、義貞の一族、節を守つて屍を戦場をさらすもの百三十三人、郎従の戦死者八千余人に及ぶ、当家累年の忠義を捨て尊氏の許に帰られるならば先ず義貞はじめ当家の氏族五十余人の首を刎ねて御帰洛あれとつめよる。流石に天皇は青ざめる。天皇は義貞を近くによびよせ、涙を浮べて、今度の帰洛は表面和睦である、けれども実は時の来るのを待つためである、汝はこれより皇太子恒良親王を伴うて北国に下つて再挙せよ、此君をとりたて天下の事大小となく汝の成敗に任かせる、と言つた。このとき天皇が恒良親王に内々譲位したとおもわれる文書もある。これで義貞の面子もたつこととなつた。かれは日吉権現に参拝して家重代の鬼切という太刀を奉納して心静かに武運を祈り、皇太子を伴うて越後に向つた。途中降雪のため多くの凍死者を出した。

ところが十月十日後醍醐天皇の一行が京都に近づくと、忽ち直義が五百余騎をひきつれて現れ、

先ず三種の神器をお渡しあれとの挨拶である。その態度は高圧的で傲慢である。天皇はかかることもあらんかと兼ねて用意していた偽器を与えたといわれる。偽器であつたか真物であつたか、真器を与えたのをあとで南朝が偽物だと言いふらしたのか、真相は判明しない。鏡余のこととわいえ、義貞を売り尊氏の甘言に乗つたむくいがてき面に現れた。尊氏は天皇をそのまま花山院に幽閉し、供奉の公卿の官を剝ぎ、宮方の多数の武士を河原にひきだして斬つた。尊氏は武士同士の戦争では、降服者を赦して配下にとりいれ寛大の名を博したが、後醍醐天皇に直属した武士にたいしては処分苛酷で生命をも宥さなかつた。かれの売りものの寛大が功利主義的であることや、帝室の力をあくまで骨抜きにする意図であることなどがありありとみえる。

しかし後醍醐天皇はさすがに豪邁である。逆境のどん底になると、ふしぎなほど不撓不屈となり戦闘的となる。地下工作的な秘密運動は手慣れており、まもなく秘密のレポによつて諸国の宮方蜂起の事実を知り、外部連絡者に馬の用意をさせ、十二月二十一日夜、築地の崩れより女房の姿で忍び出た。まだ夜の間に大和路にかかり、それより吉野に入り、そこで行宮をいとなみ、いわゆる南朝の朝廷を建設した。吉野は大和、紀伊、伊勢を勢力範囲とすることができ、その地勢は山を擁し海に臨み、攻むるに難く、守るに易く、伊勢の大湊の港湾は東国との連絡に便であり、紀伊熊野の海賊衆は九州との連絡者となる。山間の僻地であるけれども東国、九州をつらぬる作戦計画に必ず

しも不便でない。これより後醍醐天皇は、南朝こそ正統なる天皇家の継承者であると主張し、北畠親房が謀主となり、かつて北条と戦つた如く足利と戦つて王朝政治を回復しようとする。これより五十余年南北両朝が対立して流血の戦争がくり返される。しかし後に述ぶるごとく帝室の両系統たる南北朝の争いは実質的には、時と共に武士内部の諸分派の敵対闘争となり、いつしか帝室は単なる看板となるに至る。武士を完全な支配階級に成りきらせようとする歴史的大勢がそうした結果を生みだしてゆくのである。

後醍醐天皇脱出の報をきいた尊氏は、少しも驚く気色がなく「此度、君、花山院に御座の故に、警固申す事其期なきに依て、以の外武家の煩なり、先代の沙汰の如く、遠国に遷り奉らば、恐れあるべき間、迷惑の所に、今御出は太儀の中の吉事なり、定めて潜に畿内の中に御座あるべき歟、御進退を叡慮に任せられて、自然に落居せば、然るべき事なり、運は天道の定むる所なり、浅智の強弱に依るべからず」と言つたので、大敵の君を逃し奉りて御驚きもなきは大したものだと家来共の感服したことが梅松論に出ている。もはや後醍醐天皇を恩人として感ずるどころか、手数がはぶけてよいと、なめ切つているのである。かれの冷血なるマキアヴェリストの本性が時々こうして現れる。政治が善人をも悪人たらしめる一面の作用は、その人が大首領であればあるほど一そう強く現れる。尊氏はその例である。

尊氏は北朝の天子を好遇したかといえば、そうでない。後醍醐天皇を弱力化するために、自分も帝室イデオロギーを利用することが必要であり、そのために持明院統をもちあげ、その院宣を獲得せねばならなかつたのだが、その用の大体すんだ後では、王朝政治そのものを完全に骨抜きするために、これまで帝室の執行した政治事務のなかで玩具に類せざる、現実的意味ある部分はすべて自分の方にとりあげねばならぬ。そして尊氏はそれを実行したのである。それ故に光厳上皇は院政の有名無実となつたに憤慨し、洞院公賢も不平で辞表を出すというさわぎもあつた。しかし時すでに遅し。尊氏の実際的な力はもはやてこでも動かすことができぬ。尊氏は此年、上首十三人を超えて正三位に上り大納言となり、直義も五人を超えて四位に叙せられ左兵衛督となる。朝廷がこれらの優遇をしたとて、尊氏の方では特に朝廷優遇をしようとするわけでない。その後の北朝の天子の足利氏にたいする卑屈な態度は見るに忍びざるものがある。これは尊氏を王朝の共同の敵とみることなく、帝室内部の党争に盲目となり、後醍醐天皇を売つたことからおこつたのである。人を売ればいつかはそのむくいがめぐつてくる。尊氏とてもそれをまぬかれなかつたが、北朝天子はあまりに早くこの応報の理を味わされた。

尊氏政府の機構

太平記の湊川合戦のくだりに「新田足利ノ国ノ争ヒ、今ヲ限トソ見ヘタリケル」という言葉がある。尊氏の叛逆は王朝政治の顚覆を内在目的としているのだが、その名目は義貞を除くためというのであつた。これは全然口実であつたわけでない。実質上、宮方と足利方との戦争は武士首領間のヘゲモニー争いであつた。南北朝抗争時代になつてから、戦争の実質はますます武士内部の党派的闘争という性格のものとなり、更にその闘争過程において大名的領主の自主性もしくは我がままが増大し尊氏の威令すら行われなくなる。これらは客観的には武士階級の支配者的地位が動かすべからざるものに成長してゆくことを意味する。

尊氏は建武三年六月後醍醐天皇の軍隊に根本的打撃を加え、八月に光明天皇を立て、十月に後醍醐天皇を花山院に幽するなど、寧日なき有様だが、本来の意味の政治建設もどしどし実行してかれの組織的な政治家的才能を発揮した。かれは頼朝復帰を理想とするから、その政治構造は大体鎌倉幕府の骨組をそのままとりいれており、且つ北条氏のごとく執権の名のもとで権力を行使するのでなく、みずから将軍として政権の中枢をにぎる。頼朝よりも独裁者的性格が強い。将軍のもとに首相ともいうべき執事をおき高師直を任命した。師直はこの年より六個年在任して辣腕をふるい、大

名も高級公家もこれに媚びた。（執事はのちに管領となる。）執事の下に問注所執事をおき二階堂時連を任命した。問注所は鎌倉幕府にもあつたもので、財貨貸借、領地の訟論、刑事々件等の訴訟を取扱う重職で、その執事は政府の重要会議にも列席する。尊氏は此年に直義を関東十個国の管領に任じた。直義は斯波家長を管領として鎌倉においたところ、家長は北畠顕家に攻められて自殺した記事が鎌倉大日記にあるが、家長は管領代官だつたのであろう。直義を関東十国の管領としたことは後の鎌倉公方の起源である。又足利幕府の内談衆、恩賞奉行、評定衆、引付衆、政所、侍所などの機構の原形も尊氏が此頃に作つた。これらは鎌倉幕府の機構の踏襲が多いけれどもその権限が小さくなり事務機関化している。尊氏は形式を模倣しつつ実質的には独裁的将軍たる自己を中心とする政府組織に改造する。

建武式目

尊氏は建武三年十一月七日付で建武式目十七条を制定した。これはかれが鎌倉幕府の遺老や王朝の法律家に諮問しその答申書として提出されたものだが、そのまま法令となつたのだからかれの制定した成文法といつてよい。かれは馬上、天下を治むべからざるを知つており、法の生活の意義を理解する。北条滅亡以来の戦乱つづき、社会秩序の崩壊、我慾の恐るべき横行、民衆の苦悩、この

状態を整理するには武力一辺倒では解決できない。建武三年はかれの九州よりの東上、湊川合戦、京都攻防戦、北朝君主擁立、後醍醐天皇の幽閉とその脱走などのあわただしい空気につつまれている。この環境のなかでかれが政治の基準としての法の意義を把握しこれをいち早く成文法としたのは、すぐれた政治家的見識といわねばならない。建武式目の主要起草者は鎌倉評定衆の遺老たる二階堂道昭（是円）とその弟真恵で、この二人とともに前民部郷（九条光経）、玄慧法師、太宰少貳、明石民部大夫、大田七郎左衛門尉、布施彦三郎入道、都合八人が署名しているが太宰少貳以下は鎌倉評定衆の家である。

この建武式目は泰時の貞永式目にならつたものだが、後者のような簡純さや迫力はない。しかし理想と現実とのいりまじつた、興味多い法律である。まず前文に居所の興廃は政道の善悪に依ると記し、武家政権であつても必ずしも鎌倉に居を定むる必要なく京都でもよろしいのだという意を寓している。実際上、足利氏は南朝と対抗する必要からその幕府を京都に置かざるをえなかつた。前文につづいて政道の事と題した本文十七個条は当時の社会的現実に知る上に興味があるから摘記してみる。

一、可被行倹約事

この条では近来奢侈に耽ける者が多く、美服や精巧の刀飾りに凝るなどほとんど「物狂い」に類

しており、富者はますます傲り貧者は及ばざるを恥ずる風があるから倹約を奨励せよとある。当時の成上り武士の驕奢や、富者の瞬間的快楽主義や、貧者の苦痛など、当時の戦乱のなかでかもし出される無拘束的な世情が目に見えるようである。

一、可被止群飲佚遊事

この条は、好色あさり、博奕、茶の寄合や連歌の会での賭けの流行などをあげて厳重に所罰せよとある。これは主として足利方の戦勝武士の間の放恣な状態をみるに忍びないとするものである。

一、可被鎮狼籍事

昼の打入、夜の強盗、辻々の追剝のため叫喚の声絶えず、厳重に警戒せよと言つている。戦乱渦中で治安の崩壊している状態を想察することができる。

一、可被止私宅点定事

これは足利方でない貴族や商人や庶民の家に押しかけてお前は敵方だと難題をつけて其邸宅を奪いとることを禁止せよというのである。多数の武士が一時に京都に集つたのだから住宅難もあつたろうが白昼邸宅の強奪が行われた。高師直は護良親王の母の故宅に占拠した。米軍の日本占領中に頻々行われた邸宅接収のごときことがあつたのである。

一、京中空地可被返本主事

本条では、現在京都市中の過半は空地になつているが早く原所有者に返すべきで、今回後醍醐天皇に随行して叡山に赴いた者は上下を問わずその所有地を沒収されるという巷説があるが、単に駈落ちに類する者を謀反罪と同じに扱つて所有地を沒収するならば公家被官のともがらは生活にも窮迫するに至るだろうと言つている。これは起草者たちが同類意識をもつて尊氏に婉曲に抗議したものであろう。しかし尊氏は実際において後醍醐天皇随従の公家や武士の所領沒収又は死刑などのひどい目に逢わせたことは前述のごとくである。

一、可被興行無盡土倉事

ここに無盡とは頼母子講のことで金融のためのもの、土倉は質屋だがやはり金融業をやるもので、本条は、それに対する過重の課税や強盗を制御しなければ、貴賤とも金づまりに苦しみ生活の道を失うものが出るだろうとのべている。土倉や無盡は室町時代の経済生活の重要な要素となり、特に土倉は権力者と結合し民衆に対立するなど社会関係にも大きな役割を演ずる。本条は当時の経済がすでに純粋の農業本位の自然物経済や自足自給体制を脱し少くとも都市において商業と貨幣流通が経済の基本要素となりつつあつたことを示す。

一、諸国守護人被殊択政務器用事

諸国の守護職は軍忠ある者に与え、恩賞は庄園を以てすべしとなしている。今や地頭制が弱化し

て大名領地制の進行しつつある情勢がこの条文からも看取できる。

一、可被止権貴竝女性禅律僧口入事

権力者の左右のもの、後宮の婦人、僧侶などが政治に容喙するのを禁ぜよというのである。これは今までも弊害の少くなかつたところである。しかしこの条文にもかかわらず、足利政府では夢想国師、三宝院賢俊、満済准后などの坊主がさかんに政治の口入をしたし、義教夫人日野富子のごとき女性は政治をひきかきみだした。

一、可被誡公人緩怠竝可有精撰事

良吏を選べというのである。

一、固可被止賄路事

たとえ百文であつても賄路をとる者は免職し、ひどい奴は死刑にせよとある。しかしこれは当時にあつては理想をかかげたものにとどまる。

一、殿中付内外可被返諸方進物事

これも賄路的なものやあまりに珍奇に走る進物を禁じて清廉の政治をなせというのであるが、その説明のなかに「唐物巳下珍奇なるもの」の語がある。唐物とは、中国よりの渡来物で、中国貿易の行われていたことを示唆する。

一、可被撰近習者事

この条文の説明もおもしろい。党類を結び互に毀誉を成すものを禁ぜよと言つているのは、尊氏側近の武士の間に派閥競争のあつたことを示す。事実上、直義と師直の齟争をはじめ上杉、佐々木、細川、斯波、赤松等々の勢力争いは尊氏を困惑させたし、又足利氏の全体を通じての禍根は武士間の派閥齟争であつた。この条文には衣裳或は能芸以下好翫のものを近習に使つてならないという文句もある。高時かつて田楽の芸人を溺愛したが、尊氏の子孫はおおむね芸術好きで、芸人の近習として寵用せられるもの少からず、日本のシエクスピアともいうべき観阿彌世阿彌父子は尊氏の孫義満の寵愛のもとで能楽芸術を完成した。政治では極端な現実主義者として平然非倫理をあえてするが、才芸の士を才芸の故に愛し、みずからも芸術の恍惚境にひたる瞬間をもとうとする足利歴代の多くの主人の習癖はじつは尊氏からはじまつているのである。

一、可尊礼節事

一、有廉義名譽者殊可被優賞事

この二つは道徳的説教にとどまる。

一、可被聞召貧弱輩訴訟事

これも起草のインテリたちの飢食弱食の現実にたいする抗議という意味がある。

一、寺社訴訟依事可用捨事

寺社の伝統的な横暴をこの際思い切つて弾圧せよという意味がある。大荘園の所有者たる寺社は反動的勢力で、人の宗教的情緒を悪用し、迷信をばらまいて精神の自由をしばり、武力を擁して現実政治に脅迫的容喙をする。それに屈してならぬというのである。

一、可被定御沙汰式日時刻事

政治の執行や裁判は遅滞させてはならぬというのである。

後文には、古人は安きに居りて危きを思うと言うたが今は危きに居りて危きを思う時である、近くは義時、泰時を師として万人帰仰、四海安全の政治をなすべきだという結語がある。

この建武式目は尊氏の諮問に応じて八人のインテリが答申したものだが、インテリ特有の良心や、時勢の傾向の正確な把握や、革新の意をふくんだ主張や、自分たちは力がないからやれないが実力ある尊氏に自分たちの思うことをやらせてみたいという悲願、そうしたものがふくまれているとおもう。歴史上のインテリには権力者に媚びその悪心を満たしてやるために自分たちの才学をゆがめたものが少くない。しかし建武式目を起草したインテリたちはあえて尊氏に媚びず、できるだけ自分たちの思想をこの法律のなかに盛りこんだのはえらいとおもう。これをそのまま呑んだ尊氏の態度も賞讃されてよい。

延元三年（一三三八年）、尊氏は念願の征夷将軍となつた。この時期には強敵の義貞、北畠顕家相次いで戦没し、足利一門内部の党争はまだおこらず、尊氏は最も油の乗り切つた壮年者として政治的手腕をふるう。

半済法

ついでながら、ずつと後になつてからのことだが、尊氏が観応三年七月（一三五二）に着手し義満が後に完成したところの半済法についてものべておこう。これは半死半生の公家貴族に根本的打撃を加える政治上の政策であつたと共に、当時現実に進行しつつあつた経済構造の変革を一そう推進するものであつた。尊氏の政権の成立は武士の階級的勢力の充実を基礎とする。建武三年ののちに勝ちほこつた武士たちは、公家貴族に公然たる侮辱を加えその所領の荘園を露骨に蚕食した。尊氏は建武五年七月の追加式目のなかで諸国守護が寺社本所領を押妨し所々の地頭職を管理して自己の家人にしてゆくのを禁じ、貞永式目に規定する大犯三個条のほかは綺うべからずと命令したのだが、大名領地制の成立は時代の勢いであつて尊氏がそれを恐れ且つ禁じようとしてもできることでなかつた。戦功のある将士に恩賞を与えようとしても没収地はそんなにない。そこでかれは頼朝の故智を学んで半済法なるものを案出した。これは荘園領主の収入を折半してこれを兵粮料所として

武士に与うることである。かれは前記の年に近江、美濃、伊勢、志摩、尾張、伊賀、和泉八個国にある本所領は当年一年の間兵粮料所として武士の管轄となし、年貢を折半して本所及び武士の間に分つことを定め、地頭職の補任状に代うるに兵粮料所の預ケ状を戦功ある将士に与えた。其後尊氏は兵乱未だ鎮定せずと称してこれをひきのばし、土地を荘園領主に返還せず、却つて右の八個国以外にもこの方式を拡大した。後に義満は応安元年六月（一三六八年）勅許を得て宮廷領、寺社領、殿下渡領のほか一切の本所領を武士に預けて半済法を実行することを布告した。この半済法は土地そのものの折半を意味せず、収益の折半であつたのだが、やがて土地そのものの均分となつた。武力を恃む地方武士は将軍家の制止など眼中にない。土地の半分を押領すれば他の半分にまで手がのびる。かくして半済法は公家貴族の経済的基礎を決定的にくつがえす動機となつた。他方において鎌倉時代以来、荘園内部に発達してきた自治的郷村制は、領主大名制の発達と共に後者の行政区劃となつてゆく内面傾向がしだいに現れてくる。（これは応仁の乱後に現実化する。）半済法はかかる傾向の因となり、また果となるものであつた。

斜陽の王朝貴族

尊氏はこれまで朝敵の名を憚つて形式的には天皇をうやまつてきたのだが、建武三年に後醍醐天

皇の軍を撃破してから、露骨に北朝君主をロボット化し、一切の政治を尊氏のほうで処断する態度をあきらかにした。君主は虚位を擁するのみとなつた。戦功をほこる武士たちは、あだかも現代の共産革命ののち共産主義者が旧支配階級を遇する如くに苛酷無慈悲に王朝貴族をとりあつかつた。武士の貪慾は土地に集中する。餓虎の肉片をあらそうごとくかれらは公卿たちの荘園を押領しだしたばかりでなく、皇室領や上皇領にまで手をつける。そのため宮廷はさびれ、参内の人もまれになり、曲水重陽の宴、白馬蹈歌の節会などいう古めかしい、しかし宮廷政治になくてはならない諸儀式も費用がないからおこなわれなくなる。路で逢えば武士たちは貴族たちを公然侮辱する。長い王朝的逸楽と高慢な生活の夢がむざんにやぶれてゆく。大部分の貴族は苦痛に堪える力がない。卑屈にも武士の風俗をまねるものが出てくる。太平記の天下時勢粧事というくだりには「公家ノ人人、イツシカ云モ習ハヌ坂東声ヲツカヒ、著モナレヌ折烏帽子ニ額ヲ顯ハシテ、武家ノ人ニ紛レントシケレドモ、立フルマヘル体サスカニナマメキテ、額附ノ跡以ノ外ニサカリタレハ、公家ニモ附ス、武家ニモ似ス」という笑えぬ醜態が叙してある。

かような変動期には、新成上り者は相手が神聖視されていたものであればあるほど、それを侮辱することを愉快に感じ、ついにそれが帝室にまでおよんでゆく。あるとき光厳上皇が外出して帰路夕ぐれとなつたところ、むこうから酔払つた土岐頼遠と二階堂行長が部下をつれて馬上でやつてき

た。上皇の車の牛飼たちが院の御幸だ、下馬せよと呼ばわると、行長は馬より飛びおりて跪いたが、頼遠は酔眼を見開いてからからと笑い「何・院ト云カ、犬ト云カ、犬ナラハ射テ落サン」と言い、上皇の車をかこんで矢を射かけ、車は輪を折られて顚倒し上皇が夢心地でいるのをあざ笑うてたち去つた。酔払つていたとはいいながら上皇を、犬というのだから無茶である。これには流石の直義も怒つて頼遠を死刑にした。このとき例の夢想国師が頼遠にたのまれて直義に赦免運動をしたが駄目であつた。時人はその味噌すり坊主的態度を嘲笑した。道をゆく田舎人たちは頼遠のことをきいて「院ニタニ馬ヲ下リンニハ、将軍に参会テハ、土ヲ匐ヘキカ」と言つた。こののちに喜劇がある。あるとき貧相な貴族が破れすだれの車に乗つて痩せ牛にひかせて道を行つていると、向うからきた馬上二三十騎の武士が、これこそ院というくせ者よ、頼遠ほどの勇士も誅せられた、いざ下りて跪かう、と飛び下りて土下座すると、吃驚した貧乏貴族もあわてて車を飛び出し、そのはずみに立烏帽子を落し乱髪をおさえながらこれも土下座して向いあうてばつたのように互に頭を下げあうた。往来の市民がそれをとりまいて手をたたいて大笑いしたというのである。

佐々木道誉は尊氏の腹心の大名だが、あるとき妙法院の前を通りかかり、その庭のもみぢの美しく色づいているのをみて無断に下僕に命じて手折らせて争いになつたところ、道誉は面倒なりと妙法院に放火して焼き払つてしまつた。妙法院は叡山の門主の居所、門主は王族である。叡山怒つて

尊氏に訴えるけれども道誉をかばうてとりあげない。叡山いよいよ怒つて、神輿を京都にかつぎ込もうとしたので、尊氏も折れて道誉を上総国に流すことにして落ちついた。しかし道誉は上総への道中に行装美々しく若党三百人余を前後にひきつれ、道々に酒宴し宿々に遊女を弄び、あだかも遊山の旅の如くで流謫の人とはみえなかつた。これは叡山にたいするつらあてで、叡山は心にこれを怒つてもこれをとがめだてするほどの勢がもうなくなつていた。

尊氏は政治の実務を直義と師直にまかせたので、二人の権威はならぶものがなかつた。北朝の君主は直義にも気をつかう。暦応五年二月に直義が風邪で肺炎かなにかになつたとき、光厳上皇はひそかに勅使を立て八幡宮に願文をささげ直義の病気平癒を祈願した。その文に「四海の安危は偏に此人の力にかかる」とか「義は君臣なれど思は父子のごとし」などいう、聞くにたえないお世辞がある。ほどなく直義の病気が平癒したが、悪口を言う者はちようど折よく願文が間に合つたものだと言つた。

執事高師直、その弟師泰は帝室を敬う心など毛頭ない。むしろ無理論であるが衝動的な反天皇主義者である。かれらはのちに主人の尊氏や直義をまで脅迫するようになる。かれらにとつて利慾、淫蕩、暴力、権力だけが人生の現実であり価値でもある。権威や伝統は目ざわりである。かれらは本能的な下剋上主義者である。無類の活動家、武将としての高い才幹の所有者であると共に、残酷

な自己中心、当時の人々の精神になお深い影響をもつていた神仏をも平気に笑いとばす無信仰、睚眦の怨を忘れぬ執拗な復讐心、気に入らねば主人にも飛びかかつてゆく徹底した現実主義者であつた。師直は正平三年に楠正行を四条畷に斃したのちに大挙して吉野に押しよせ南朝君主の行宮を焼き払つた。かねて目をつけていた弁の内侍のような美しい女官を掠奪することも目的であつたかもしれない。（弁の内侍は、一度師直の手の者に誘拐されかかつたが正行がそれを救い、天皇は内侍を正行に与えようとしたのに戦死覚悟の正行がそれを辞退した物語が吉野拾遺にあることは前にのべた。）師直はかつて「都ニハ王ト云人ノ在シテ、許多ノ所領ヲフサケ、内裏院御所ト云人ノ有テ、馬ヨリ下ルムツカシサヨ、若王ナクテカナフマシキ道理アラハ、木ヲ以テ作ルカ、金ヲ以テ鋳カシテ、生キタル院国王ヲハ、何方ヘモ皆流シ捨奉ラハヤ」と言うた。徹底したものである。今の共産主義者の言いそうな言葉である。

師直は首相にあたる執事の職にあるから劣弱の京都貴族にどんな無理でもやれる。かれは王族や貴族を侮辱することに惨酷な喜びを感ずる。急に貧しくなつた貴族の娘たちは浮草の如く寄るべがなくなり、誘う水あらばとわびしい生活をしており、師直はそれらの女を掠奪して数十人を妾とする。やんごとなき宮腹の女さえその妾となる。深窓に育つた二条前関白の娘も師直の妾となつて武蔵五郎という子を生む。（彼は後に師直と一所に殺される。）この女が師直の漁色の烈しいために空

闇の嘆を発しているときに大炊大納言冬信という貴族が昔の宮廷の恋愛遊戯のように彼女に艶書を送つた。師直これを聞いて若党に命じて大炊邸に放火させて焼き払つた。冬信の七才の娘が焼け死んだ。放火の上に矢を射込んだと園太暦に出ている。

師直の弟師泰の乱暴もこれに劣らない。かれは菅原道真の子孫の宰相在登の東山の山荘を奪いそこにあつた菅原家の墓所を堀りくずした。累々たる五輪のもとから白骨が出る惨状である。これを恨むと聞いて師泰は、大力の召使の少年をやつて在登を刺し殺させた。この土木工事の際に、通りかかつた四条大納言隆蔭の青侍二人が人夫の休むひまも与えられずに汗水たらしている有様をみて、どんな下郎でもこんな苦役はしないだろうにとつぶやいたところ、これをききつけた師泰配下の工事監督の武士が大に怒つて右の青侍二人の衣裳をぬがせて人夫の着物をきせ、夏の炎天下に土運びや石運びに一日中こき使つた。これを見る人が恥を知るよりも命はよくよく惜しいとみえると言いあうた。これも武士の公家貴族に加える侮辱の一つの光景である。

天王寺は、用明天皇の草創以来七百年、国民の崇敬を集めてきたが師泰がその常燈料所の荘を押えたので常住の燈も消ゆるありさまである。あまつさえ師泰は、天王寺の塔の九輪の宝形一つをひきおろして鑵子に鋳させた。磨けば玲々たる光があり、これで燗をすると酒に特別の芳味があつた。これを聞き伝えた武士どもは、我も我もと和泉河内の数百の古寺の塔の九輪をひきおろして鑵子に鋳つ

た。古い芸術品も何もあつたものではない。武士はわりあい信仰深いところがあるが、この時代の武士は伝統無視の衝動や露骨な快楽主義の感情から神仏を何とも思わない無信仰者になつている。

尊氏の死ぬる頃になると、公家貴族の困窮と武士の横暴が一そう甚しいものになつている。栄枯全く地を易えたわけである。兵乱二十年、内裏も上皇の御所も大小貴族の邸宅も大部分焼亡し京白川には武士の邸宅があるばかりで民家は見あたらず、かつて賑かだつた街には草を生じ、叢には白骨うず高くよこたわつている。貴族の家族やその召使たちは離れ離れとなり、川に身を投げて死ぬるものがあり、遠国に落ちて田舎人に身を寄せるものがあり、飢餓のために死ぬるものもある。

これに反して武士は全盛の大盡のごとくで、守護は貞永式目の定めた大犯三個条どころか、寺社や貴族の荘園を押領して兵粮料所となし、司法権や徴税権を行使し、地頭や御家人を郎従のごとく使い、地方的小君主として勢力をもりあげてゆく。都にあつまる大名たちは奢侈に耽り、豪奢な遊宴を催し、茶の会などののちには大賭博場をひらいて一夜に五六千貫の勝負が珍らしくなく、田楽、猿楽、傾城、白拍子に惜しげもなく高価なものを投げ与える。武士は急激に膨大した富を湯水のごとく濫費する。太平記の記者はこの有様に憤激して「抑此人々、長者ノ果報有テ、地ヨリ物カ涌ケルカ、天ヨリ財カ降ケルカ、降ニ非ス涌ニ非ス、只寺社本所ノ所領ヲ押ヘ取、土民百姓ノ資財ヲ責取、論人訴人ノ賄路ヲ取聚タル物共ナリ（中略）人ノ歎ヲモ知ス、嘲ヲモ顧ス、長時ニ遊狂ヒ

ケルハ、前代未聞ノ僻事ナリ」と記している。すべてこれ略奪、搾取、賄路から得た富だというのである。大名化した武士たちはもはや生産から離れてしまつているから、富を蓄積してこれを生産力を高めるために利用し富の量をより大きくするなどの衝動はすこしもなく、ただむちやくちやに濫費するだけである。社会の富が武士だけに集中してそれが無鉄砲に濫費せられることは社会の他の階級の急速な貧窮をよびおこす。

Ⅷ、南北戦争

本質

不幸が人間を鍛錬する。零落と孤独が人間意志の新たな集中をよびおこして運命に対抗する力を強める。打ちのめされたのちに、それに屈せず、その教訓を学んで、人生の新しい戦いに赴きうるものは勇者である。天性豪邁なる後醍醐天皇は隠岐の配所で流謫から切実な教訓を学んだ。しかし北条倒れて一切の権力が王朝に返つたという外観に眩惑されて、建武中興のさいには、恐るべき自己内部の強敵たる怠慢と遊惰と油断にうち負かされた。その最も信任していた尊氏の叛逆によつて再びどん底に投げこまれた。この窮境は天皇の猛然たる闘志をよびさまし、現実を見る眼を与え、その理念を一そう強烈のものたらしめた。よしそれが武士を社会の指導力たらしめようとする歴史の大勢に逆うものであるとしても、純粋反動のものでなく、人に訴うるものをもち又現実の一つの力でもありえた。天皇は建武三年十二月に尊氏の幽囚から脱出するや、ただちに吉野に南朝の朝廷をつくり、反尊氏勢力の糾合に努力した。もはや、うしろは絶壁の深淵で、いかなる手段をとつても前進せざるをえないという立場に追いこまれている。これより二つの日本が現れる。

南北朝の対立は一三三六年（建武三年）から南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に三種の神器を譲つた一三九二年（南朝の元中九年、北朝の明徳三年）までの五十余年にわたるのだが、本来的意味の南北戦争は楠正行の戦死（一三四八年）のころまで、おそくとも北畠親房の死（一三五四年）の頃までであろう。それから後は宮廷相互間の対立というよりも武士団相互間の闘争という意味が強くなり、尊氏直義までが都合次第で南朝に降服を申出てすぐそれをひつくり返すという風に宮廷を傀儡化するものとなつた。

十四世紀日本の心情は二つの極端な方面で代表される。一は利益、他は理念である。歴史に永遠にくりかえされる両者の相剋は、この時代に特に強烈にあらわれ、両者とも中庸をうしない、そして悲劇的にも利益が理念を圧倒した。南朝は天皇親政々治の理念をふりかざす。北畠親房のような理論家が、記紀のごとき古典を脊骨としこれに宋学の大義名分論などを加えて王朝政治の神聖性を力説しその復元を理論づけるけれども、当時の情勢のもとにおいて非現実の抽象論たるをまぬかれない。しかし抽象論なる故にかえつて人の観念的昂揚をよびおこす作用がある。（このことは現代においてもみられることである。）他方に北朝君主をロボットとする尊氏の陣営を支配するものは徹底した利益主義の原則である。かれらは一切の理念的なものをあざわらう。神仏を道具にすることがあるが、本心では宗教やその慣習を軽蔑する無信仰者であり、利益主義にともなうあらゆる不

道徳を展開させ、利慾のためにのみ才幹や勇気を発揮し、利益のため兄は弟を売り、弟は兄に反し、父子もまた武器をとつて戦うことは、尊氏がそのモデルを示した。かれらにとつて軍力が一切を解決する唯一の手段となる。かれらには物質と肉体が世界の全部である。南北戦争の本質の第一の特徴は、非現実な抽象理念主義と徹底した利益主義との衝突だつたことにある。

第二の特徴は、実質的内容において武士内部の派閥闘争だつたことにある。表面は南朝の天皇と北朝の天皇との争いであるが、後者をあやつる真の役者は尊氏であり、前者のためにたたかう武士といえども純粋に帝室理念によつて動いたのは少数で、大部分は反尊氏気分のもの、地方的関係によるもの、土地慾のためのものなどを含んでいる。一度大きい分裂があると、それにともなうて分裂が細部にまでおよんでゆく。甚しい場合には一村の内部においてすら宮方と武家方が対立する。又宮方の村と武家方の村が対立して塀を構えたり関所を設けたりする。或は武士の一族が申し合せて南朝北朝に分れてナレ合いの戦争をしたりする。又形勢次第で南朝になつたり北朝になつたりする。備前の佐々木信胤は最初からの尊氏方だつたが高師秋と或る浮気女を争うてそのために宮方となつた。南朝イデオロギーも何もあつたものでない。尊氏陣営内の内訌に負けたものはただちに南朝に降服し、大丈夫になると又ただちに南朝を去る習慣ができて怪まれなくなり、尊氏も直義もそれをやつた。

尊氏の陣営の主要勢力は、武士階級の高級者すなわち守護クラスの大名の連合体ともいうべきもので、したがつて軍力的に優越する。しかしかれらは北条氏における地頭の如く唯々諾々として尊氏に臣従するものでなく、気に入らねば反抗もする。足利幕府はそのきげんをとらねばならない。かれらは将来の足利氏の禍となつてゆくのだがこの南北戦争の過程において所領を拡大し旧来の地頭を自己の臣下にとりいれ刻々に地方的小君主として成長してゆく。宮方の武士は一三三八年（延元三年）に義貞や顕家が戦死してからいよいよ雑軍的となり、忠実な宮方であつた結城宗廣の子親朝は北朝に降り、芳賀禪可は主人の宇都宮入道の子加賀寿丸を監禁して尊氏に降服するありさまで、九州の菊池武光のみがほとんど唯一の大物的な宮方で、新田の一族は執拗に運動をつづけるが分散的なるをまぬかれず、正成の子正行の戦死後には一族も動揺し正行の弟正儀はついに北朝に降服する。

南北戦争の結末についていえば、第一は利益主義が理念主義に勝つたことである。南朝の亡んだのは、現実的には南朝の軍力を構成する武士勢力が北朝のそれに敗北したからであるが、抽象的理念だけでなく理念そのものがほとんど全く軽蔑され、我慾とエゴイズムが全般的に勝利したことを意味する。それは悲惨なことであつたが、これによつて個人は自己の存在を証明するために実力を養成せざるをえなくなり、それは下剋上の空気をみなぎらせることとなり、利益主義が結果として

自由を産出するという逆説的現象がここから生じた。第二に理念主義者たる南朝の滅亡によつて武士階級が社会の一般的支配者となり、具体的には守護大名制の確立をもたらすに至つた。階級交替革命がほとんど完了する。第三に南朝の滅亡とともに北朝も権威を失い、帝室が全く政治の圏外に立つという一般的結果をもたらした。戦国時代になると、京都の市中に戦争があつても宮中ではそれらに無関心に和歌楊弓などの御遊がおこなわれるありさまであつた。又帝室はじめ公家貴族が非常に経済的困窮におちいるようになる。第四に南北戦争は足利氏の歴史の全体を通ずる長い戦争の前奏曲をなしたものにほかならないという観察も成り立つ。義満時代に早くも大内義弘の乱あり、義教時代に鎌倉合戦あり、次いで応仁の大乱あり、ついに紛々たる戦国時代となる。足利時代は戦争時代だと言つてよい。この長い戦争は近世日本を生み出すために経過せねばならなかつた高価な犠牲であつた。戦争は時として歴史の発展の歩度を急ピッチにする。南北戦争をかかる戦争時代の前奏曲としてみるならば、帝室理念の役割が南北戦争においても意外に小さかつたことを考えさせられる。

後醍醐天皇の死

後醍醐天皇は艱難がおそうてくると、ふしぎなほど猛烈に戦闘的となり巨大な指導者ぶりを発揮

する。しかし運命は、天皇が一困難を克服すれば、少しの休息を与えたのちに、さらに大きな困難を課して人間としての力のかぎりを発揮させるのをたのしんだようにみえる。天皇は吉野の孤城にかたちばかりの宮廷を作つた数日後にただちにもう規模の廣大な戦争計画を立てている。尊氏に京都を決定的にとられてしまつたが、南軍は撃滅されたわけでなく、全国的になお容易にくつがえされない地盤をもつている。叡山から北国へ落ちた義貞は途中大雪のため多くの士卒を失つたが、それでも越前金ヶ崎城に入つて再び勢いを盛り返しているという噂が諸国の南軍を力ずける。天皇は奥羽の北畠顕家に大軍を率いて西上し京都攻撃の主軍となることを命ずる。天皇の綸旨が諸国の土豪に飛ぶ。大和、和泉、河内、近江、但島、丹波、紀伊、阿波、淡路、伊豫、肥後、筑後、筑前、豐後、因幡、出雲、遠江、奥羽等の南軍が蜂起して尊氏方を襲撃しはじめる。その形勢は決して不利でない。

このとき北条高時の次子で前年のいわゆる中先代の乱の中心人物だつた相模次郎時行が南朝に参加する。そのときのかれの後醍醐天皇への奏状はおもしろい。それには次のことが書いてある。曰く亡親高時は臣たる道を弁えなかつたから滅亡したので、それは天誅の理に当るところだからお恨み申すところは一塵もない、しかし尊氏は許せない、尊氏は当家（北条家）歴代の優恩をうけて人となつたのに、恩を忘れ、又天を戴いて天に背いた不道徳漢である、ゆえに当家の氏族等は尊氏直

義を倒して恨を散ぜんことを願つている、不義の父を誅して忠功の子を召し使われることは古今に例が少くない、どうか南軍に参加するを許されたい、と。かように旧北条勢力にして尊氏にたいする怨恨から南軍に加わつたものが少くない。顕家が奥州軍を率いて西上する際鎌倉を占領したが、そのとき時行は伊豆から五千余騎をもつて協力し、又後に宗良親王が遠江を根拠地として戦うたとき時行はその忠実な部下であつた。

じつさい延元二年の春には南軍の勢いが振い、両軍の戦略構想は全国的となり、雄大となつている。後醍醐天皇はまずとりあえず奥州の顕家と陸奥白河の結城宗廣の軍を西上させ、九州の阿蘇惟時にも東上ををうながして、京都を東西より挾撃する計画を立て、更に懐良親王を九州へ、五辻宮を日向へ、宗良親王を伊勢へ派遣して永続的な軍事体制をつくろうとした。

しかし不幸の悪魔は窮境の天皇を更に打撃する。延元二年八月、北畠顕家は結城宗廣とともに奥州五十四郡の大兵を率い、白河の関を超え、途中、尊氏の子義詮の軍を破つて鎌倉を占領して破竹の勢いで東海道筋を進んだ。その途中で民家を掠奪したり、神社仏閣を焼払うなどの乱暴をはたらいたという記事が太平記にある。顕家の軍は山城国男山に拠り摂津の宮方と協力して連戦連捷するありさまだつたが、延元三年五月二十二日、泉州堺浦石津の一戦で敗れ、顕家が戦死した。年二十一である。これは大打撃である。奥州からきた遠征軍はこれで崩壊した。顕家は北畠親房の長子

で、その夫人は正中の変の主謀者で佐渡で刑死した革命貴族日野資朝の女である。親房は神皇正統記のなかに、元弘三年十月、顕家が後醍醐天皇の命によつて奥州の太守として下向する際の事情を記して、我家は代々和漢の学問を業として宮廷の政務にしたがう道のみを学び武芸にたずさわらないのだからと度々辞退したのだが、文武の道に二つなく今よりは武を兼ねて蕃屏たるべしとの仰せがあり、天皇自ら旗の銘を書き様々の兵器を賜つて出発したと述べている。親房もこの時奥州に同行したのであつた。元弘の変以来、王朝貴族にして武将となつたものが少くなく、なかには臆病な者もあつたが、優秀な武将となつたものもある。顕家は最も嘱目された一人で、尊氏が九州落ちを余儀なくされたのは顕家の率いた奥州軍の善闘からであつた。人々はかれの戦死を惜しみ、父親房は「心憂き世にも侍るかな」と悲んだ。

不幸はこれだけにとどまらない。北国に拠つた義貞の軍も振わず、三月六日には越前金ヶ崎城が陥落して義貞の長男義顕が尊良親王と共に自殺し、皇太子恒良親王は捕虜となる。義貞は七月二日、同国藤島で流矢にあたつて戦死した。尊氏の強敵ここに死んだ。

後醍醐天皇は度重なる打撃にも屈しない。天皇はさらに遠大な計画に着手する。親房の次子顕信と結城宗廣に七才の義良親王（のちの後村上天皇）を奉じて奥州へ下らせ、義貞の次子義興と相模次郎時行に宗良親王を奉じさせて武蔵相模に配置し、東国地方を政治的軍事的ににぎる計画を立て、

陸路は敵が充満しているので、九月二日伊勢大湊より五百余隻の舟を艤し親房も同行して出帆した。しかるに不幸が又も見舞うてくる。途中遠州灘で風波がおこり、沈没するものもあり、義良親王と宗廣は伊勢に吹き戻され、親房は常陸に漂着し、宗良親王は遠江城輪港に上陸して井伊城に入ることができた。これで計画がまた一挫折する。

しかし南軍はまだ決して弱つていない。奥州はなお南軍の主要根拠地である。九州には懐良親王のもとに菊地武光や松浦の党が活動する。上野国には義興、義宗（義顕の嫡男）、越前には義貞の弟脇屋義助とその子義治、河内には楠、和田の一族、尾張の熱田大宮司、出雲伯耆では名和長年の一族、四国には伊豫にある花園宮、遠江井伊城にあつて北国や信濃を扼する宗良親王、常陸で新勢力となつた北畠親房などがある。尊氏は親房にたいして高師冬を関東に、宗良親王にたいして高師泰を遠江に、伊勢の南軍にたいして高師秋を派遣したが、却て撃退されるありさまである。南軍の士気が又振い立つた。

かかる瞬間に最後の不幸が襲うてくる。巨人後醍醐天皇の死これである。

秋の霧とともに

後醍醐天皇は延元四年八月九日ごろから秋の霧に侵されてしだいに病重り、ついに八月十六日、

左手に法華経をもち右手に剣を按じていざよいの月とともにこの世を去つた。年五十二。遺言は、わが骨はたとえ南山の苔の下に埋むとも魂は京都を望んでおり、汝等、命を背き義を軽くするならば君も継体の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず、という辞気激烈なるものであつた。後の軍事を義貞の弟義助に托したことは太平記に見え、九州の懐良親王、遠江の宗良親王、陸奥の北畠顕信、結城親朝等に与えた激励の遺言は今も古文書に残つている。北畠親房は「寝るが中なる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、数々目の前なる心地して老の涙もかきあへず」と悲傷しているが、これは南軍将士の心情であつたろう。北朝方の公家たちも天皇が王朝政治のためにたたかつた業蹟を今更に追懐したもようである。

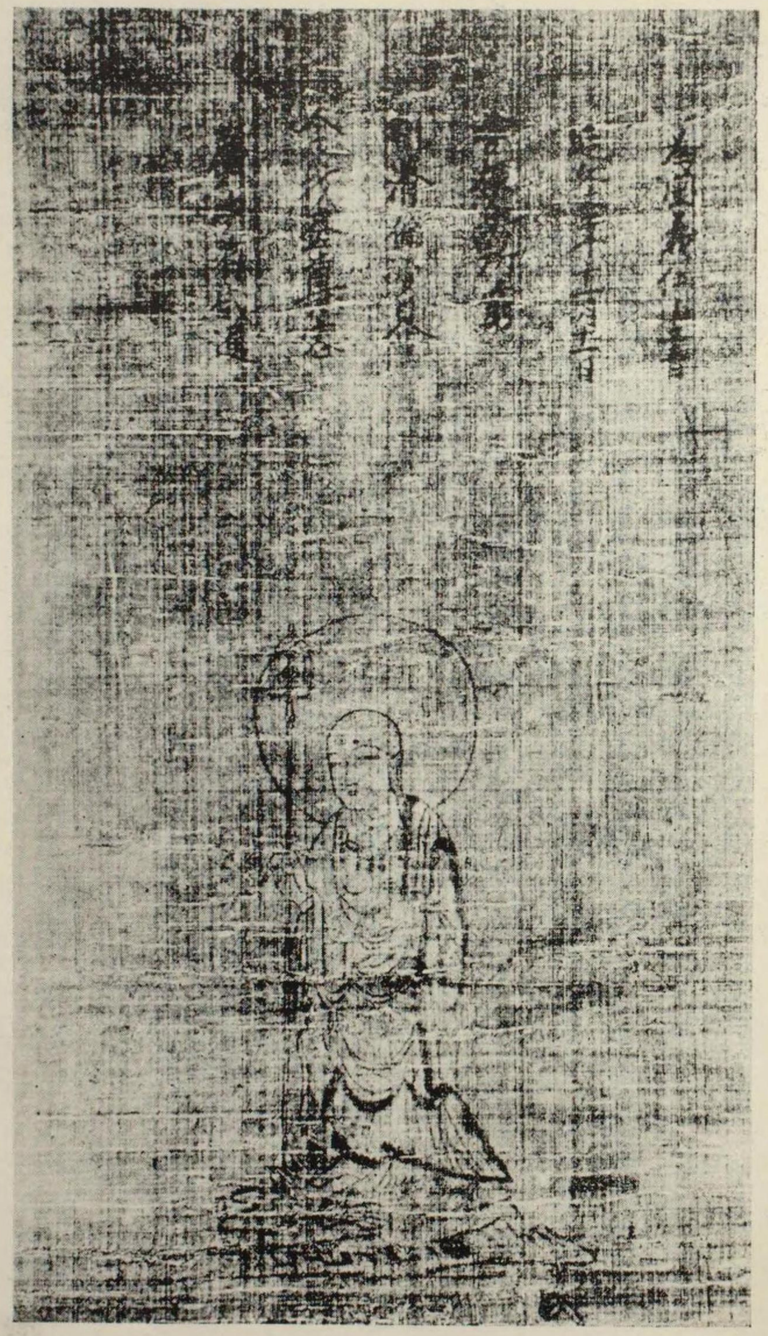
吉野の朝廷の貴族たちは失望落胆して解散を議しおもいおもいにかくれ家を求めようというものがあつたが、吉野執行吉水法印に諫められ楠正行が二千余騎で守備にかけつけるなどのことがあつて動揺が静まり、十月三日、第八王子にして十二才の義良親王が即位した。後村上天皇である。母は新待賢門院藤原廉子で、建武中興のさいは賄路を好み近臣に濫賜し尊氏に誘惑されて大塔宮を讒することなどのことがあつたが、その所生の義良親王の兄恒良成良両親王は尊氏に毒殺され、これも波瀾ある生涯をおくつた南北朝期婦人の一人である。

後醍醐天皇の一生は嵐の連続で、強烈の意志をもつて運命の課するもろもろの試練に抗し、運命

を自己の意志に服従せしめんとしてついに斃れたのはその運動が歴史の大勢と逆行するものであつたからだが、しかし意志と理性と情熱のおりまざつた巨人的な指導者で、半世紀にわたる執拗にして情熱的な王党派の運動の精神的根源はこの天皇である。一人の意志が一つの運動をひきずつた逞ましい一例である。正中の際には資朝俊基らの青年貴族を股肱として北条幕府打倒に着手し、第一回の失敗に屈せず、元弘の再挙のみぎりには隠岐に島流しとなり、ついに北条打倒に成功し、建武中興に失敗して尊氏に売られたのちにはただちに吉野に政府をつくつて全国の王党派の新組織に着手した。非合法運動者に特有ないろいろの欠陥もあつたが、その鉄の意志と指導力はおどろくべきものがあり、歴代の天皇のうち天智天皇と明治天皇のみが比肩しうる。学問も深く思想家でもあつたことは前にのべた如くで、著書建武年中行事は故実学者には今も貴重な文献である。

尊氏の天竜寺建立

北朝の君主は、後醍醐天皇の遠逝の報をきいて、まさか手をうつて喜びはしなかつたろうが、最初なにら哀悼の意を表しようとしなかつた。これは盲目的な党派心と尊氏にたいする卑屈な気兼ねからである。人は一旦卑屈になると止めどがなくなる。南朝の傲岸な孤立主義と北朝の卑屈な迎合主義はよい対照である。しかるに尊氏は報をきいてただちに七日間政務を停止して謹悼したので、北



朝があわてて廃朝したのは、一そう笑止であつた。

尊氏は、天皇の百箇日にあたつて等持院で盛大な仏事をいとなみ、みずから経文を書写して、先帝追悼の願文を草した。それは美辞麗句にみちたものだが、尊氏の今日あるは一に先帝のひきたての結果であると感謝しており、「溫柔の叡旨はなお耳底に留まり、攀慕の愁腸はなお心端を盡しがたし」などいう文句には一片の真情がある。水戸の学者はこの願文を評して、これは文を作り非を飾り、人の耳目を蔽い、耳を掩うて鈴を盗むの類で、尊氏の狡奸窮りないことが現れていると言つているが、これは単純な酷評である。この願文には偽飾や宣伝とともに一片の真情もいりまじつている。これは尊氏がひきずりこまれている心理状態でもある。

尊氏は後醍醐天皇の死の約二個月後の十月五日にその冥福を祈るという趣旨で亀山上皇の旧宮の跡に天龍寺を建立することにした。当時兵乱盗賊やむ時がなく、飢饉や伝染病のため民衆は飢え疲れている。ここで例の味噌すり坊主の夢想国師が出しやばつてきて、尊氏兄弟に、それは先帝の悪靈のいたす所であるから然るべきところに伽藍をつくつて菩提を弔うべきである、と進言し、暗に自分がその住職になりたいと自己推薦したのである。太平記の作者は、民衆の困窮は天の下した災でなく、国に政なく、武士が諸国を押領し民衆から搾つたものをただ奢侈に濫費するからであり、天龍寺建立の動機のごときも己を責むる心の足りない証拠だと正しい批判をくだしている。又叡山

足利尊氏自畫自賛地藏尊像

尊氏は地藏菩薩に對する深い信仰をもつていた。暦應二年京都に等持院を創建し、十萬體の地藏像を刻まして同寺に安置し、戰爭によつて命を失つた者の供養に充てたという。また日々地藏尊を自ら描寫し、僧俗諸人の菩提を弔つた。それにはいずれも

夢中有二感應一、令三我畫二尊容一、利二濟偏沙界一、善根無レ所レ窮、

の賛文を書いた。こゝに掲げたのはその内の一幅であるが、賛の次に、

延文二年十一月十一日

爲國義仁山書、

と同筆で書かれている。國義というのは多田氏で、國義の父頼氏は建武三年六月二十日叡山に於ける戰に尊氏に從い討死している。恐らくこの地藏尊像は頼氏の供養の爲め國義が尊氏に請うたものであろう。尚畫幅の下部に仁山の朱印と尊氏の花押がある。仁山というのは尊氏の法號である。

は宗教仲間の党派心や嫉妬心から、かような提案をする夢想国師を遠島に流し天龍寺を犬神人にいつけて破却すべきだといきり立ち傲訴をもつておびやかした。天龍寺の建立は、大土木工事で、当時の経済状態からみて無理だつたのだが、尊氏は押し切つて着手し、工事はじめにはかれ自ら土を担うて運ぶこと三度であつた。暦応二年より貞和元年まで六年かかつて竣工した。仏殿、法堂、庫裏、僧堂、山門、総門、鐘楼、方丈、浴室、輪蔵、雲居庵、七十余の寮舎、八十四間の廊下、宏壮華麗な大寺院ができあがつた。尊氏は安芸周防を料国に寄せ、其他寺領の寄進少からず、富もまた京都の寺院中第一となつた。夢想はその望みのごとく開山となつた。

康永四年八月二十九日に尊氏は天龍寺供養を催し、その翌日には花園光厳両上皇も例をやぶつて参列した。天皇も出席して勅会のかたちにするはずだつたが叡山が傲訴して苦情を申入れたので、それはとりやめになつた。この供養の光景は、頼朝の建久六年の大仏供養のまねごとであり、それを一層無精神に拡大したものである。尊氏が頼朝のしたことをなにからなにまで模倣しようとしたことを示す。尊氏が天龍寺に詣でる行列の有様は、一番に山名時氏がはなやかに鎧うた五百余騎をつれて先行し（これは頼朝の行列の先駆を畠山重忠がやつたことのまねである）次に武田信氏以下の諸将が美装して一番、二番、三番の二列縦隊で進み、次に尊氏が真新しい八葉の車に簾を高く揚げ衣冠正しく座つており、後陣に十六人の勇士がつづき、そのあとに直義が蒔絵細太刀を帯びて小

八葉の車に乗つており、そのあとに十番まで諸将がつづくにぎやかさである。京都の貴賤僧俗の群衆は道路に立ちつくして前代未聞の花やかな外観におどろいているのだが、この十数年来あまり度々権力者の転変を見なれており、その迷惑な影響を自分たちの生活の上にこうむつている京都市民は皮肉な批評眼で一行を眺めたであろう。京都は権力の集中しているところだから、うかつに公然不平をもらせないので落首のようなもので鬱憤を晴らす。（この陰性な皮肉な批評主義は今日の京都市民にもいくぶん伝統として残つている。）天龍寺の供養は夢想を導師として盛大に行われ参列の諸将が我も我もと寄進する珍奇な財物がうず高く積みあげられた。しかし頼朝の大仏供養における敬虔さ、その主従の恩の倫理でむすばれた古典武士的な空気はここにない。尊氏兄弟には偽飾と宣伝と誇示があり、諸将は利慾でむすびあうているだけで民衆から搾りとつたものを惜し気もなく仏前に投げ出す自慢くらべをしている。両上皇もその飾りにひき出されただけである。

尊氏は天龍寺建立の費用が莫大なので、それを賄うためという名目のものに貿易船を元に送ることにした。これを天龍寺船という。これは一種の官営貿易で、幕府は多くの利益を得た。天龍寺が完成した後にもこの貿易船の派遣をやめなかつた。尊氏も夢想も商売にも抜け目がなかつたのである。

尊氏の新強敵北畠親房

かつて尊氏の最も恐れた敵は大塔宮護良親王と新田義貞であつたが、この二人を倒し、南朝を吉野に追いこめ、みずから京都の主人となつた今日では、もはや真の強敵はなくなつたと安心した途端、南朝の北畠親房がかれの前に新しい強敵として立ち現れた。親房は永仁元年（一二九三年）の生れだから後醍醐天皇が吉野で南朝政府をひらいた建武三年には齢すでに四十四才で、これよりその死の正平九年（一三五四年、六十二才）に至るまで戦略的にも精神的にも尊氏の真の恐るべき敵として活動する。

親房は正中の変の際より後醍醐天皇の腹心であつたが、その養育した天皇の第二王子世良親王の死を悲しみ三十八才で出家した。出家であるからその後あまり表面に立たなかつたが、元弘から建武中興にかけて天皇の政治を助けた。元弘三年十月長子顕家が陸奥守に任ぜられたときは任地に同行し、建武二年尊氏が鎌倉で叛したときは顕家と共に奥州軍を率いて東上した。延元三年顕家も義貞も陣没し南朝が悲境におちいるや、かれは天皇を助けて頽勢挽回の重任を双肩にになうに至つた。かれが同年九月、義良親王らと伊勢大湊を出帆し途中暴風雨に逢いかれの乗船が常陸霞ケ浦に吹きつけられたことは前にのべた。それよりかれは筑波山麓の小田城に籠り、その陥つた後は関城

に拠つて南軍を指揮し、一三四二年（尊氏天龍寺供養の年）に関城陥つてから吉野に帰還し、後村上天皇を補佐し、全国の南軍を統一的に指導し、近畿では楠正行らとともに京都をおびやかした。長子顕家は戦死、次子顕信とその子孫は奥羽の南軍の中心となり、三子顕能、四子顕雄は伊勢に拠つて北軍と戦い（その子孫は代々伊勢の国司を称した）、又娘婿の大塔宮は直義に殺され、一族をあげて終始変らぬ忠実な王党派として活動した。

尊氏は親房にたいして二つの面で真の強敵であることを感ずる。第一は戦略の競争者であることであり、第二は精神的な方面で、親房の鋭い理論と剣のごとき筆は尊氏の胸を刺すものがある。

尊氏と親房の戦略競争

南軍は北軍にくらべると劣勢で、地方の小豪族が多く、大きな領地をもつ守護大名はたいてい尊氏方である。しかし尊氏方といえども一個の統一的意志のもとに堅く団結したものでなく、利害相反すれば独自的行動をとる我がまま者たちである。南北ともに卓越した指導能力をもつ者か又は衆心を服するに足る大首領があつて、個々の分散した軍事要素を一つの戦略構想のもとに統一性のある勢力に組織化しなければならない。吉野に南朝ができて文字通りの南北戦争の段階に入つてから、この役割をはたしたものが一方では親房、他方では尊氏である。

元来吉野で南朝を創立したことや諸王子を諸国に派遣することも親房の構想に出ているようにおもわれるが、かれの尊氏にたいする第一回の戦略競争はかれが常陸に漂着して小田、関両城で戦つていた頃である。この時期にかれは東北経営に力を注いだ。かれは次子顕信を今日の石巻と想像される地方に蟠拠させて奥羽を制し、白河の結城宗廣の子親朝を極力勧誘して東北と関東の咽喉を扼しようとした。更にはるかに九州の阿蘇の南軍とも気脈を通じた。こうして運動を常陸の一隅から指導したのである。尊氏のこれに対する戦略は石堂秀慶を国府に置いて常陸と奥羽の連絡を断ち、又極力、結城親朝を利をもつて誘うことであつた。親朝は父宗廣の遺嘱に背いて尊氏方に走り、小田、関両城も陥落するに及んで親房は吉野に帰還した。

第二回の親房の戦略競争はそれより数年後の正平元年に河内の楠正行の勢力をはじめ、遠く奥羽九州の南軍を動かし、紀州熊野の海賊衆をもつて敵の海上連絡を攪乱し、虚に乗じて京都を奪還せんとした運動である。これにたいして尊氏は、高師直師泰兄弟を和泉河内に派遣し、直義も出動し、親房は和泉で督戦し、互に勝敗があつたが、正平三年一月（一三四八年）正行は河内四条畷の戦で戦死し、師直は大挙して吉野に押し寄せて行宮を焼き払うた。後村上天皇は紀州賀名生に逃れた。親房は和泉を去らず、戦勝の北軍を逆襲して敗つたが、ここでも大勢は北軍に有利な結果に終つた。

第三回の戦略競争ともいうべきは、正平三年頃よりしだいに顕著となりつつあつた足利氏の内訌—直義対師直の党争、ひいて尊氏直義の不和—を巧みに利用し、尊氏方の諸将を操縦し、南朝に有利な形勢を展開しようとしたことである。時には直義と講和しようとしたことさえある。正平五年六月に直義がひそかに源大納言と会見したという園太暦の記事の源大納言とは親房のことだろう。元来直義は南北講和論者である。尤もかれは武家政治の容認を条件としての講和論なのであるが、南北戦争を二つの宮廷の正統争いという風に理解し、そのために兵乱の絶え間ないのはむだなことだという考えをもつている。親房の方では王朝政治の回復を目的とし且つ南朝の正統性を主張するのだから直義と一致するはずがない。親房はそれを知りながら、尊氏直義の不和を利用して自派を有利ならしめんとした。足利氏の内訌はだんだん深酷となり、尊氏直義兄弟相争うのみならず、師直は主人の邸を囲み直義を殺さんと計つたことがあり、尊氏の実子にして直義の養子たる直冬は尊氏と戦い、専横を逞しうした師直師泰兄弟は途上に殺害せられ、諸大名は或は直義、或は直冬、或は尊氏を支持するなどの分裂現象が次々におこつた。親房はおそらくこれらの内訌を刺戟し激烈にするような分裂政策をとつたであろう。少くともこれを南朝に有利なように利用した。足利方では内訌に敗れたものもしくは内訌に有利な地位を占めんとするものが一時的に南朝に降る風を生じ、直義・尊氏、直冬相次いでそれをやつた醜態は次章にのべる如くであるが、この間において、尊氏

と義詮が直義を討つ便宜上南朝に降り北朝の崇光天皇を廃して南朝の正平の年号を用いたときに親房は洞院公賢を左大臣として京都の政権を執らせたり、直冬の勢力を利用して一時京都を回復したことがある。足利氏の内訌が親房の工作によつて生じたものでないのはもちろんであるが、それを深めるとか利用するとかの政策をとつて足利政権に一つの打撃を与えることには成功したとおもわれる。

親房の哲学とその尊氏筆誅

スターリンはトロツキイを放逐した後、トロツキイが筆を揮つて世界の人々のまえにスターリンを毒罵するのに堪えられなくなつて刺客を派遣して暗殺させた。簒奪者は明るい理論をもちえない。尊氏は芸術好きであつたが、かれにあつては芸術は生の歓びを讃うるためのものでなく、瞬間の恍惚によつて人生苦を忘るるためのものであつた。仏教の哲学もかれにとつては自慰のためのものにすぎず、あまねく衆生をすくう仏教本来の悲願はかれ自身のものでありえなかつた。よい資質をもちつつ心ならずも人を売り、兄弟父子の間に我慾の齟争をせねばならなかつたかれはとうていの哲人の透徹した思想と風格をもちえなかつた。これに反して親房は王朝貴族の出身であるが、風塵にまみれ、運命にもてあそばれているうちに、運命を戯れとしてながめることができ、世界と人生

の本質に迫る心眼をゆたかに養うた。かれは政治家にして哲学者、歴史家にして戦略家、王朝貴族のふるくさい伝統や制約をこえた達人の心境にある。かれの死するや党派心にこりかたまつた北朝貴族たちも粛然として悲惜した。かれが真向から打ちおろす理論の刄には、尊氏が聰明であればあるだけ心の苦痛を感じたであろう。

親房の主著は神皇正統記である。かれは延元四年秋、常陸小田城にあつて後醍醐天皇崩じ義良親王の即位せるをきき、この少年天皇のために此著を草した。群書類従本の奥書には「此の記は延元四年秋成る、童蒙に示す為に老筆を馳する所なり、旅宿の間一巻の文書を蓄へず、纔に最略の皇代記を尋ね得て、彼の編目に任せ、粗、子細を勒し了る」云々とあるから、参考書もなく、少年天皇に教うるために胸中平生の哲学を吐き出したものである。筆を投じて劍を把るという形容はよく見うけるが、親房は劍戟のひまに陣中に一穂の燈をかかげて筆を劍として行動のための理論を思索したのである。神皇正統記のほかに著書職原抄がある。その他にかれの著書といわれる元々集、東家秘伝、二十一社記、古今集註、関城書などがあるが真著であるかどうか分らない。和歌は新葉集に二十七首、李花集に七十三首が載つている。

神皇正統記における帝室論はかれの信念だからそのままにしておいてよい。われわれの興味を感ずるのはこの書に盛られたかれの世界観や人生観や政治哲学ならびに尊氏批判である。その二三を

指摘する。

かれは「代下れりとて、自ら賤しむべからず、天地の始は、今日を始とする理あり」と言う。一切のものは日々新たな創造である。伝統は古いから貴まれるのでない。新しい生命が刻々附与されてのみ価値がある。人間は創造者である。天地を新にに作り出すというほどの熱情がなければ新しい歴史は生れない、というのである。これは立派な行動主義の哲学、革命をこころざすものの倫理である。

中国の古典中庸には「道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず」という言葉がある。この道なるものの本源は何であるか。親房は答えていう「その源というは、心に一物を蓄へざるをいう。しかも虚無の中に留まるべからず。天地あり、君親あり、善悪の報、影響の如し。己が欲を捨て、人を利するを先として、境々に対する事、鏡の物を照らすが如く、明々として迷はざらんを、誠の正道というべきにや」と言うている。心に一物をも蓄えざること、しかもそれはニヒリズムを意味しない。道徳の究極は人間性の弱所たる我慾の克服、そして愛他主義に帰着する。ここには東洋的な自己超克の哲学と愛の倫理がある。かれは、黒心なく、丹心をもつて、清潔を貴み、本を本とするという神道哲学をものべている。これは古代からの日本人の簡純な世界観である。

かれは労働の倫理を解する。農夫はその生産物をもつて己れも食し、人にも与えて飢えざらし

め、女子は紡織して自らも着、人をも暖かならしめ、このほか商人、手工業者、官吏の業あり、労働は賤しむべきでなく、正しい労働編制こそが人倫の大本であるという思想を展開している。

さきにも引用したが（三六頁）、かれは天下の万民はみな神物であつて、一人楽しんで万民を苦しむるは、天の許さざる所であり、人民を安らかにする政治を行う者のみが好運を得るのだとなしている。政治の根本はけつきよく人民の生活を保障することにある。この第一命題に及第しなければ百の理論も役に立たない。それ故にかれは王朝政治家であるけれども、頼朝や泰時が民を塗炭の苦しみより救うた功績を賞嘆している。

親房の尊氏批判は猛烈である。それは単なる王党派の立場からの党派的憎悪心からのみでなく、右にあげた世界観や政治哲学からの筆誅である。元来尊氏は源家の流れといつても、頼朝実朝のときにはただ家人たるにとどまつて特に優遇されていたものでなく、かれの先祖は実朝の八幡宮参拝の日は地下前駈二十人のうちに加わつていたくらいで、特に推賞に値する名門でもない、とも書いている。親房は婉曲に後醍醐天皇がさしたる大功もない尊氏を特に抽賞したのがまちがいのもとだつたと諷している。尊氏が自らを頼朝に比するような思い上りをするようになつたのは、慢りに天皇がかれを寵したからである、しかし頼朝が一臂の力を振うて万民の苦を救うて天下を鎮めたようなことは尊氏にはできない、尊氏は利慾と野心の塊りで、限りある土地を限りなく所望し、そのた

めに謀反を企て、却て万民を苦しむるに至つたとなしている。凡そ政道は正直慈悲を本として決断の力あることを貴ぶ。決断とは人を選んで官に任じ、国郡を私せしめず、信賞必罰の道あることをいう。これに違うのが乱政である。君が濫りに授くるを謬挙といい、臣の濫りに受くるを尸祿という。尊氏問題についていえば君臣ともにこの誤謬を犯しているというのである。親房は尊氏を「功もなく徳もなき盗賊」「乱臣賊子」「天の功を盗みて己が功と思へり」という烈しい言葉で痛罵している。

尊氏の政権奪取の動機には、王朝政治では日本は治まらず、武家政権のほかない必然性を痛感したこともあるのはたしかである。しかしその動機には我慾が一そう強くはたらいており、その手段はけつして明瞭でない。かれはかれ自身の我慾、かれの周囲の武士団の止めどなき我慾に嫌悪を感じたであろうが、それは時代の悪情熱であり、一つの洪水であつたから、かれの力で何とすることもできなかつた。当時の政治を担当する以上は権謀術数家ならざるをえなかつた。かれは聰明であつたから親房の精神的攻撃には堪えがたいものを感じたであろう。親房は現実の戦争ではうち敗かされたが、精神的に尊氏に心の苦痛を与えたかぎりにおいて勝利をしめたといいうるだろう。

南北戦争の結末

南北朝の抗争は、一三三六年（建武三年）の後醍醐天皇の吉野朝廷の創設にはじまり、一三九二年（南朝元中九年、北朝明徳三年）に南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に神器を譲つて南北朝合体が実現した年まで、すなわち五十六年間つゞいた。その争乱は全国におよび、無数の血が流され、いたるところに混乱が生じ、民衆が戦禍に苦しみ、精神生活にも大きな変化がおこつたが、これは日本の社会が古代的要素をぬぐい去り中世的封建主義の社会構造を完成するために、すなわち歴史の進歩のために、払わねばならなかつた高価な代償であつた。

南北戦争は半世紀の間にしだいに内容的変化をとげる。日本はこの期間にこの戦争だけにあけくれしていたのでない。足利氏はともかく中央権力の主人として政治や経済についての建設工作をすすめており、領地大名制の実際的発展とともに各地方の民衆の生活にも進歩が現れつつあるのに、南朝は吉野の山奥にあつて戦争的母体として機能するだけで、廣汎な民衆の生活に生きた接触をもちそれを政治的に表現する機会がない。時間の経過とともに時代の歴史における南北戦争の意義がしだいにうすれて最初の純粋性や熱情が失われてゆき、妥協や調停的空気が濃くなつてゆく。今この大勢を考慮にいれて南北戦争の過程を段階的にわけてみると次のようになる。

第一段階

第一期は吉野朝廷の創立から楠正行が河内四条畷で戦死する正平三年（一三四八年）ごろまで、南朝も尊氏方も必死に抗争し、両者の陣営にはそれぞれ強固な団結があり、内部抗争は未だあらわれず、両者いずれもいわば純粋性をもつて戦つた時期である。初期に北畠顯家、新田義貞が戦死し、さらに一三三九年には後醍醐天皇死して、南朝は大打撃をうけるが、毫もそれに屈せず、親房が思想的戦略的指導者となつて、或は東北、九州に永久的根拠地を作り、或は分散せる地方の宮方を全国的戦略のもとに統一し、或は親房みずから常陸にあつて関東を牽制する。尊氏の抗争態度もまたエネルギッシュで、はるかに九州の少弐、大友、島津を操縦し、中国四国に部下の諸将を配置し、関東では高師冬、師泰を派して親房、宗良親王に当らしめ、南朝方の結城親朝を降らしめ、近畿では蛮勇逞しい高師直をして正行を討死させた後に吉野行宮を襲撃してこれを焼き払う乱暴をはたらかせる。しかし南朝もまだ決して弱つていない。後醍醐天皇の諸王子は遠江の宗良親王、九州の懐良親王をはじめとして全国に活動し、九州の菊池や関東の新田一族のごとき熱狂的な宮方があり、河内、大和、伊勢における南朝の地盤は依然として強靱である。

第二段階

第二期は前期にひきつづいて尊氏の死んだ一三五八年（正中十三年、延文三年）の前後までであ